
おろかなひと

K.Taka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おろかなひと

【Nコード】

N7445Q

【作者名】

K・Taka

【あらすじ】

ルカリオ・アジャーニとマリア・ウォートンは恋人として蜜月を過ごしていた。

だがある日、ルカリオはマリアをうち捨てた。

「荷物をすぐにまとめて出て行け。君がこんなにも愚かで恥知らずだとは思わなかった」

愛を疑うことしかできなかった男の物語

ルカリオ・アジャーニは薄暗い階段を昇っていた。

薄汚れた階段はあちこちに落書きが描かれ、治安の悪さを見せている。その中を仕立ての良いスーツに身を包んだ男が、一人ゆつくりと階段を踏みしめる。

薄い扉の向こうから怒鳴り声が頻繁に聞こえてくる中、ルカリオは一つのドアの前で足を止める。手にしたメモに書かれた住所は、目の前だった。

深呼吸をしてから、ドアをノックする。

ドアの向こうから音はしない。だが、その向こうに目的の人物がいる事は、事前の調査で判明していた。

「……はい？」

ガチャリと音を立ててドアが開く。チェーンがかかっているのだろう。僅かに開いたドアから、女が一人、顔を見せた。

長い金の髪は扇情的にあらわになった肩にかかり、豊かな膨らみはキャミソールを下から持ち上げている。下着姿の女性は、ドアの向こうになつたルカリオを一瞥して、驚いたように目を見開いた。だが、それだけだ。

「……久しぶりだな、マリア」

沈黙を割るように、ルカリオは言葉をかける。

だが女　マリア・ウォートンは胡乱げな目つきでルカリオの頭からつま先までを見回し、鼻を鳴らす。

「五年ぶりね。なにか用かしら、ルカリオ・アジャーニ」
「話がある。……中に入れてくれないか」

ルカリオの言葉には懇願の響きがあった。
それを聞いたマリアは、わずかに眉を寄せ、扉を閉めた。チエーンを外す音が響き、再びドアが開く。

「どうぞ？ でも話は早めに済ませてちょうだい。私、もうすぐ仕事だから」

「……お邪魔する」

ルカリオが入った室内は、外観の薄汚れた様子からすれば、随分とマシに見えた。狭苦しいキッチン兼居間。その向こうにあるドアは、恐らくは寝室だろう。質素な室内は、最低限の家具しか置かれていないようだった。

「それで？ 一体なんの用かしら」

マリアは肌の露出の多い服に袖を通しながら、ルカリオを促す。

「マリア。僕の 僕たちの子供はどうしているんだ」
「は？」

マリアがキョトンとした顔で自分を見るのを、ルカリオは自分の内側の恐れを必死に押さえつけながら見つめ返した。

「教えてくれ、マリア。あの子は ジョシユアは、どこにいるんだ？」

「なにを言っているの、あなた」

「頼む、教えてくれ……。僕たちの子供は、どこにいるんだ？ ここに居るのか？」

顔色は真っ青で、こけた頬がルカリオの顔をまるで幽鬼か何かの類に見せている。それを知りながら、マリアはただ肩をすくめて見せた。

「話が分からないわ、ルカリオ・アジャーニ。僕“たち”の子供、って一体なんのこと？」

「マリア。どうか、頼む」

「どこに居るも何も。ルカリオ。『僕たちの子供』なんて、この世のどこにも居ないわ」

マリアの淡々とした言葉は、ルカリオの意識を停滞させた。

目の前で化粧を始めたマリアは、濃い化粧を施しながら口を開く。

「分かったなら、早く帰ってくれない？ そろそろ時間なの」

「マリア………どういう、ことだ？」

「だから、何がよ。どうせここに来たって事は、私のことは調べてあるんでしょ？ コールガールをやっているマリア・ウォートンの身上調査なんて、もう済んでいるんでしょ？ だったら分かるはずよ。ここにジョシユア・ウォートンはいないわ。『私の子供』は、もう居ないの。この世のどこにもね」

マリアの告げた言葉は、ルカリオの最後の希望を断ち切ったのだ。
。。
った。

その日、マリアは自分が遭遇した予想外の事態に呆然としながら道を歩いていった。

数日前から続く胃の不調や倦怠感から病院での診察を受けたのだが、そこで医師から告げられた言葉は「妊娠」という、酷く予想外なものだった。

恋人であるルカが果たしてどんな反応を示すのか。マリアはそれを思うと不安に苛まれてしまう。ルカは結婚という永続的な関係を、決して女性と結ぼうとしているようには見えなかった。

一夜の恋人として女を抱くことには躊躇いを持たない。そもそも、女が途切れるとも思えなかった。ルカ ルカリオ・アジャーニはアジャーニ一族という巨大な富豪一族の家長であり、様々な企業を従えるアジャーニ・グループの会長だった。両親の夭折を経て若くして家長の座についたルカリオは、その財力を見せる必要もないほどにセクシーな男だった。

事実、マリアがルカリオと初めて出会ったのは、マリアが出張で訪れた国のホテルのレストランでの事だった。ルカリオの素性を知らずともマリアは彼に惹かれ、そしてルカリオもまた、マリアに惹かれたようだった。

グラスを交わし、食事を共にし、気がつけばベッドの上に組み敷かれていた。

一緒にいたい、と。ルカリオの言葉に、マリアは頷いてしまっていた。

仕事を辞め、ルカリオのマンションで暮らし始めたマリアは、幸せの中にいた。それがルカリオの翻意があれば一瞬で失われる幸福だと理解していながら、そこから目を背けていた。今、この瞬間の幸福を手放せなかった。

ルカリオから渡されたクレジットカードを使う気にはなれなかったマリアだが、そうなれば彼は今度はマリアを引き連れて買い物をする事を好んだ。彼の好みでマリアを着飾らせることを、ルカリオは殊の外喜んで行ったのだ。

そうして一年ほどの時間を共に過ごしてきた先に、何があるのか。マリアもルカリオも、おそらくは想像はしていた。だが、そこから二人ともが目をそらしていたのである。

マリアが見るに、ルカリオはある種の傲慢さを持った男だった。ありとあらゆる人間の視線を惹き付ける魅力の持ち主であり、長い歴史を持ったアジャーニー族の長として相応しいだけの見識を持っている。持てる者が寛容なのは、ある意味で当然のことだった。そしてその寛容さがルカリオという男の魅力を、さらに深まらせて見せるのである。

少なくとも初めて会った女を、その日のうちにベッドまで連れ込める男がいるのだとしても、その翌日に仕事を辞めさせて自分のマンションに住まわせることができる男は、そうはいない。

将来的な約束を何一つしていなくても、ルカリオからの愛情をマリアが疑ったことはなかった。そこに何かが、言葉にはできない、しない何かがあると、マリアはそう思っていたのだ。

だからこそ、この予期せぬ妊娠とてルカリオはきつと喜んでくれるだろうと、そう思っていた。

高層マンションの最上階にある部屋へと戻れば、そこには落ち着かない様子のルカリオが、まるで冬眠前の熊のようにウロウロと歩

き回っていた。室内へ入ったマリアを見て、足早に近寄ると、その肩を掴む。

「どうだったんだ、マリア。診察の結果は」

「……ルカ？ 仕事は？」

「休んだ。君が病気かも知れないのに、仕事が手に付くはずがないだろう」

その表情は心底からマリアを案じていたと知れて、だからこそマリアは安堵と期待を抱く。

これから口にする言葉を、きつとルカリオも喜んでくれる。最初は驚くかも知れない。世の男性のほとんどは、予期せぬ妊娠という言葉には怯むものだろうから。けれども、ここまで自分を案じてくれる男性ならば、きつと。

そう考えて、マリアは唇を綻ばせる。

「マリア？」

「大丈夫よ。別に病気じゃあ、なかったの」

自分の言葉に安堵の息を吐いたルカリオを見上げ、そつとその胸に触れる。引き締まった筋肉をシャツの生地越しに感じながら、マリアは微笑みを浮かべて言葉を続けた。

その言葉が、明るい未来へ繋がっていると信じているから。

「妊娠したの。あなたの子供よ、ルカ」

そつ口にしたマリアを待っていたのは沈黙だった。

少しだけためらってから、ルカリオの顔を見上げる。どんな表情

をしているのかを確かめたかったから。

だがルカリオの顔は強ばっていた。触れていた胸の筋肉も、ひどく緊張しているのが分かる。

「……ルカ？」

やはり男性は意図しない妊娠には動揺するのだろうか。実際、自分だって医師から告げられた時は卒倒するかと思ったのだ。そう思いながらマリアは首を傾げて見せる。

「ルカリオ？ ……あの、突然で驚いたとは思うの。でも、あなたは避妊には気を遣っている様子じゃなかったし、私にもピルを飲むようには言わなかった。だから……その、これは、想定範囲内のことでしょうか？」

「冗談じゃない」

凍えるような声だった。ルカリオが唸るようになげた声は、まるで氷のように冷たく痛みすら感じさせるようにマリアの言葉を切り裂いた。

「荷物をすぐにまとめて出て行け。君がこんなにも愚かで恥知らずだとは思わなかった」

「ルカ……？ なにを言ってる」

「今すぐに僕の家を出て行け。おい、この女をすぐに放り出せ」

マリアの言葉を聞く様子もなく、ルカリオはマリアに背を向けて別室に控えているはずのガードマンを呼び出している。

「待って、ルカ！ どういうこと!？」

「よくもやってくれた物だ。僕以外の男をくわえ込んでおきながら、

僕の子供だと？ はっ。そんな嘘で僕から財産を掠め取るうだなんて、愚かなことを考えたことを後悔しろ！」

「待って、嘘なんてついてないわ！ 私はあなたとしか！」

「残念だよ、マリア。君の身体はとても魅力的だった。だが過去形だ。僕は自分の女を余所の男と共有するような趣味はない」

振り返ったルカリオの目は、汚らわしい汚物を見るような目だった。

マリアはその視線に射すくめられるように、身体が凍り付く。

「待って……説明して。ルカリオ。なにを言っているの！？」

「出て行け。二度と僕の前にその汚らしいツラを見せるな」

ルカリオの断罪するような言葉に呆然としたマリアは、抵抗らしい抵抗もできずにマンションのエントランスまで引きずり出されていった。

そのまま突き飛ばされて路上に放り出されたマリアの後ろから、彼女の荷物が放り出される。それはスーツケースに適当に詰め込まれた、彼女が最初にルカリオの部屋を訪れた時に持ち込んだ品だった。

地面にへたりこんだままのマリアは、呆然と周囲を見回す。

夜になって霧まで出てきた街は、いつもの騒がしさがまるで嘘のように静かだった。

一年間暮らした街だった。ルカリオ・アジャーニという男の庇護の下で暮らした街は快適だった。だが今、マリアの前には先の見えない薄暗い道しか見えない。

エントランスから誰かが出てくる様子はない。先ほどの暴言を謝るために駆け寄ってくるルカリオの姿もない。完全に捨てられたのだ。まるでゴミのように。

「……なんで」

マリアは放り出された荷物を拾い上げる。痛みを感じて下を見れば、膝をすりむいて血が滲んでいた。よろよるとふらつきながら、それでもなんとか立つ。

ルカリオの性格は知っている。傲慢で果断。その決断力は、味方であればこれ以上ないほどに頼りがいのある男だが、同時に彼の敵となったなら、最悪の相手だった。

マリアは霧に包まれた道を、よろめきながら歩き出す。

先の見えない道は、これからの自分の未来のように感じながら。

ルカリオは気むずかしい顔で屋敷の前に足を止めた。

それはこの辺りでも有数の高級住宅地に建っており、すでに百年以上の時間を経ているはずである。整えられた庭は早朝の明るい光に照らされ、瑞々しく輝いている。

「これはルカリオ様。お帰りなさいませ」

「ああ、久しぶりだな、マルセル。お爺さまは起きていらっしやるか？」

「はい。今朝は随分と気分もよろしいとの事で」

玄関ホールへと足を踏み入れたルカリオを迎えた執事服の初老の男性　マルセルに頷く。

この屋敷はアジャーニ家の本家が代々継承してきた屋敷であり、現在の主はルカリオの祖父だった。両親を幼い頃に事故で亡くしたルカリオは、祖父に引き取られ彼に養育されたのである。

屋敷はいつだって大勢の使用人が行き交い、さらには夜昼ともなく客が途切れなかった。そんな中でルカリオは暮らし、いつしかビジネスについて学んでいったのだ。

それを祖父が意図していたのかは、知らない。だがそれでも、ルカリオにとって祖父は敬愛する唯一の肉親だった。なまじ財産を持つがゆえに、ハイエナじみた遠縁の『親戚』が隙あらばアジャーニ一族の富のおこぼれに預かろうとするのを見て来ただけに、ルカリオの身内意識は徹底されていたのである。

屋敷の奥、陽当たりの良い二階の一室が祖父、アンジェロ・アジャーニの居室だった。

「おはよう、お爺さま。お加減はどうですか？」

「ルカリオか。おはよう。この年になれば、どこかしら悪いところはあるさ」

白髪を丁寧に梳かしなでつけたアンジェロは、ガウンを肩にかけてベッドで起き上がっていた所だった。手にした新聞を手元に置いて、ルカリオへと顔を向ける。

その顔に刻まれた皺は、アンジェロが刻んできた人生そのものだとルカリオには思っていた。だからこそ、子供の頃から彼は祖父のその皺だらけの手や顔を、とても神聖なものだと思っていた。

「そう仰らずに。お爺さまには、まだまだ元気でいてもらわなくては」

「老骨をいつまでも酷使しようとするとは、孫ながらひどい奴だ」

そう言ってお互いに顔を見合わせて笑う。そんな二人の後ろに、マルセルがそつと立った。

「旦那様。お茶のご用意を」

「ああ、すまんな。ありがとう」

使用人ができばきと用意するのを横目に、ルカリオはそつと祖父の顔を窺った。先ほどの軽口の応酬で少しは顔色が良くなったが、疲れている様子は消えていない。幼い頃にずっと見上げていた祖父は、こんなにも小さかっただろうかと思ひ、胸が痛くなった。

紅茶を一口含み、アンジェロは孫の横顔を見つめていた。

日課のように屋敷を訪ねるルカリオは、アンジェロにとっては可愛い孫だった。息子夫婦が事故で死んだ時、アンジェロは深く悲しんだ。それだけではない。大企業グループであるアジャーニ家の家長として、その席を譲るはずだった息子が突然いなくなったのだ。当然、グループ内では後継者が誰になるかで、早々と内紛の芽がほころび始めていた。

そんな中、一人残された幼いルカリオを、アンジェロは引き取ったのである。それ自体は、当然のこととして受け入れられた。アンジェロには息子が一人だけで、ルカリオはいわばアジャーニ家の直系の血を引く唯一の子供だったからである。

仕事にかまけ、あまり面倒をみる事ができなかったという自覚はある。だがそれでもルカリオは真っ直ぐに育った。その才気は幼少の頃から挫折を知らず、それゆえの傲慢さを持ってしまった事が、唯一の難点だろう。

だがアンジェロからすれば、アジャーニ家の男というものは、いずれもどこかしらに傲慢さを持ち合わせるものだという認識だった。

「ルカリオ。結婚はしないのか？」

「……またその話ですか？」

ここしばらくは、顔を合わせればその話題だとばかりに、ルカリオが顔を顰める。アンジェロは素知らぬ顔でそんな反応を受け流し、紅茶のカップを傾ける。

「結婚は良い物だぞ。私は妻に先立たれたが、それでも彼女と暮らした日々は宝物だ」

そこでアンジェロが浮かべる微笑みは、確かに満たされた者にしか浮かべられないものなのだろうと、ルカリオも認めるところだった。だがそれでも、ルカリオは敬愛する祖父の言葉に頷く気にはな

れなかった。

「ひ孫の顔を見るまでは、生きていたいものだ。この屋敷を受け継ぐであろう次代のアジャーニを、私に見せてはくれないのか？」

「お爺さま。そうは言っても、結婚も子供も相手あつてのことですよ」

「はっ。お前がその気になれば、明日にでも花嫁を教会に連れて行けるだろう。なあ、ルカリオ。この老骨の最後の願いを叶えてはくれんのか？」

わざとらしく哀れな声をあげる祖父に、ルカリオは嘆息を漏らす。「お爺さま。アジャーニの嫁に相応しい女性が、一日二日で教会に連れて行けるはずがないでしょう」

「確かに。相応しいお嬢さんには、それ相応の歓待がある。だがな、ルカリオ。私としては、なるべく早く早く安心したい。……特にお前が、結婚という契約から逃げ回っていると知っている身としてはな」

アンジェロの思慮深い目が自分をじつと見つめていることを感じながら、ルカリオはゆっくりと息を吸い込んだ。祖父の言葉は、ルカリオが女性との永続的な関係を維持しようとしないう事を指しているのだろう。だが、取りようによってその言葉は、ルカリオが永遠に隠し通したいと願う秘密に触れかねないものだった。

祖父が知っているはずはない。この事実を知っているのは、ルカリオと、そしてもう二人だけのはずだ。一人は決してこれを明かすことはないだろう。もう一人は 恐らくは、そんな恐れはない。であれば、祖父の言葉は単なる自分の日頃の振る舞いに対する苦言であると考えるべきだ。

「相応しい女性がいれば、すぐにでもプロポーズをしますよ」

「相応しい女性ならば、これまでもいくらでも居ただろうに」
「そうですか？」

じつと探るようにアンジェロはルカリオの顔を窺った。

この孫がなにかを隠している　なにかの理由があつて結婚を拒絶していることは、アンジェロも気付いていた。だがそれが金銭に群がる女性に囲まれた末に生まれた単なる女性不信なのか、それともまったく別の理由なのか。それがアンジェロには分かりかねていたのである。

「……ルカリオ。相応しいかどうかなど、誰にも分からぬことなのだよ。確かなのは、お前が強く焦がれる女性であるかどうか、だ」
「肝に銘じましょう」

ルカリオの短い答えは、彼がまったくアンジェロの言葉を受け入れていないことを、如実に示していた。

祖父の屋敷からオフィスへと出勤したルカリオは、苛立っていた。敬愛する祖父の容態が思わしくないという事実と、それを理解している祖父がたびたび口にするアジャーニの後継者という言葉が、チクチクとルカリオの神経をささくれ立たせていた。

アジャーニ・グループは世界的な不況を受けてもなお揺るがず、ビジネス面でのルカリオは圧倒的な成功者である。だが同時に、そういった成功者が集う場面ですでに三十四歳になるルカリオが特定のパートナーを伴わずにいるという事実が、周囲から奇異の視線を招く原因となっていた。

ルカリオが同性愛者だとか、そういった理由があるわけではない。事実、彼は言い寄ってくる女性を、むしろ積極的に食い散らかしている。だがそれも、ここ一年ほどの間は収まっていた。それは彼のマンションで暮らしていたマリア・ウォートンの存在があったからだろう。

ルカリオは女性に対しては真摯に付き合っているという自負がある。少なくとも、一人の女性と交際している間はパートナーの女性以外に目移りしないようにしている。問題があるとすれば、それはルカリオが考える交際期間が、非常に短期的なものだということだ。ルカリオからすれば、自分が飽きるまで相手の女性と付き合っただけ、という事になる。ルカリオにとって交際とは常に自分から破棄する物だった。

だが、マリアは違った。

ルカリオの脳裏に、マリアの言葉が浮かぶ。「妊娠した」といっ

て微笑み、恐る恐る自分を窺うように見上げた小柄な女性。思い出ただけで、ルカリオの脳裏は怒りで真っ赤に染まった。

妊娠。よりもよって、彼女はそんな卑劣な罠に自分をはめようとしたのだ。

これが他の男ならば、マリアの言葉にだまされて結婚の契約を交わしたかも知れない。妻という立場と財産を得るための口実を与えるのかも知れない。

それほどまでに彼女の『芝居』は巧みだった。恋人に突然の事実を伝えるかどうかで悩み、けれどもきつと恋人ならば受け入れてくれると信じるか弱い女性の『芝居』。ルカリオでなければ、あっさりと騙されていただろう。

これまでもルカリオに同じような罠を仕掛けてきた女は、大勢いた。だがそのいずれもが、ルカリオによって徹底的に破滅させられてきたのである。

あの時、マリアを家から放り出しただけで済ませたのは間違이었다。憤怒に燃える胸中で、ルカリオはそうごちる。

清楚で穏やかで、けれどその笑顔は明るく、裏表のない心の持ち主。そしてベッドでの相性は、抜群。

ルカリオの中でマリアはそんな女性だった。そもそも彼と一緒に暮らした女など、そうは居ない。今までであれば、ホテルに呼び出すか、精々が新しいアパートを買い与えてそこに通う程度だった。

自分自身の生活スペースに、他人を入れることをルカリオは殊の外嫌っていたのだ。

けれどそんなルカリオの中のマリアという女性像は、ただの虚像に過ぎなかった。

彼の目を盗み、余所の男とベッドを共にする。そして妊娠したという事実気付き、欲をかいたのだ。

確かにルカリオは避妊に気を遣っているようには見えない。だからこそ、マリアはアジャーニ家の花嫁となる野望を抱いたのだろう。

だが、それはありえないのだ。

だからこそルカリオは失望した。自分でも認めたくはないが、ルカリオはマリアを深く信頼していたのだ。だからこそ、彼女を放り出すだけである夜は精一杯だった。心の均衡を保つために、何よりもまずマリアを遠ざけることを最優先にした。

そして今、ある程度落ち着いたルカリオの脳裏には、彼女にいかにして償わせるか、という考えが浮かび続けている。この暗い炎が胸にある限り、この考えは消えないのだろう。

ただの女性が、アジャーニという帝国の財を掠め取るうとした。ならば、その安易で無謀な野望に対し、相応の代償を支払わせるべきだ。

ただ、そのために改めてマリアを捜し出すのも癪だった。むしろ、彼女の存在をなかったことにしてしまうほうが、精神衛生上はマシに思える。

そう結論づけたルカリオは、頻繁にかかってくる電話とメールの確認をするべく、意識を仕事へと向けるのだった。

マリア・ウォートンは深々と頭を下げ、感謝の言葉を口にした。

「ありがとうございます、社長。突然辞めたにも関わらず、こうしてチャンスを与えて下さったこと、本当に感謝します」

「気にすることはない。私が用意するのは、あくまでチャンスだ。それをつかめるかどうかは、君次第だよ」

デスクに座っている壮年の男性は、わざとらしく意地の悪い笑顔を浮かべている。

「マリア。一年前に君が突然辞めたいと連絡を電話一本で済ませようとした時は、正直手放したくはなかった。君は非常に優秀な社員だったからだ。だが、今、君が座っていた椅子には別の誰かが座っている」

男はマリアを一瞥し、にやりと笑う。

「新しい椅子を得られるかどうかは、君次第だ」

「はい。ご期待に込えて見せます」

頷いて見せるマリアに鷹揚に込えて見せたのは、アントニオ・ガゼット。一年前までマリアがつとめていた会社の社長であり、かつてのマリアの直属の上司だった。

こうして彼と連絡が取れたことを、マリアは神に感謝していた。仕事も家も失っていたマリアにとって、この伝手は生死を分かっ細い糸だったのだ。

一年前、ルカリオに言われるがままに仕事を辞めた。しかも電話一本でアントニオに辞意を伝えたのだ。一方的な退職は会社に少なからずの損害を出しただろう。

だから、今さら凶々しくも再就職を願いだしたマリアに、何か痛烈な言葉がかけられることは覚悟していた。それでも、生きるためには我慢せねばならない道だった。

だというのに、アントニオはちくりと嫌みを混ぜつつも、それ以上の言葉を浴びせかけることなく再就職のチャンスをマリアに提示してくれた。

「それにしても、君がシングルマザーになるとはね。我が社の育児補助制度が助けになればいいが」

ため息混じりに呟くアントニオは、もしかしたら嘆かわしいと思っ
ているのかも知れない。そう思いながらマリアは、ゆっくりと微
笑んでみせる。

「問題点があれば、改善案を提出させていただきますわ」
「そうだな。企画書を提出してくれ」

ひとしきり笑うと、アントニオに一礼して社長室を出たマリアは、
ホッと息を吐いて全身から力を抜いた。一年前に通っていたオフィ
スは今も騒がしい。明日からは、マリアもまたここで働くことがで
きる。

当面は試用期間として、アントニオが提示するだろう難問に挑戦
させられるだろう。だがそれをクリアできれば、再び正社員として
の雇用を得ることができる。少なくとも、収入面での心配は減る。

オフィスビルを出たマリアは、そつと自分の下腹部に触れた。そ
こはまだ見た目にはなんの変化もないように見える。けれど、そこ
には小さな命が宿っているのだ。

ここに赤ちゃんがいる。その認識は現在のマリアにとっては、励
みになっていた。

海を渡り自分の国へと帰ってきたマリアは、ルカリオと過ごした
一年間を悪夢だと思うようになっていた。

あの夜。ルカリオのボディガードによってマンションの外へ放り
出された後、霧が出てきて人気のなくなった道をトボトボと歩きな
がら、マリアは一夜が明かせるホテルを探して歩き回った。

ルカリオの怒りの原因が理解できなかったマリアは、ひとまず時
間をおいてから再び話し合おうと考えていた。だからこそ、宿を求
めてホテルを回ったのだ。

だが、どんな冗談かどのフロントでも満室だと断られたのだ。時間も時間だったのだろう。フロントのすげない断りに呆然したマリアだったが、食い下がった結果、一件のボロホテルのリネン室で夜を明かすことができた。

翌朝、マリアはルカリオに連絡を取ろうと電話をかけたが、まったく出る気配がなかった。それどころか数回かけた後、突如マリアの携帯電話は使用不能になってしまった。

契約が解除されてしまったらしい、という事実を知ってマリアは呆然となった。

彼女が使っていた携帯電話は、ルカリオと出会う以前から使っていたものだ。つまり、マリアの名前で契約され、マリアのお金で維持されている物なのだ。

つまり、本来ならばルカリオからどうこう出来るはずのない物が、どうこうされてしまったのである。

本来の契約者であるマリアを素通りして、アジャーニ家の権力と財力をもってマリアの権利を侵害した。これまでのマリアが抱いていた、少しばかり強引で我が侷だが優しい恋人というルカリオという人物像にヒビが入ったのは、この瞬間だった。

彼の傲慢さが好きだった。それはアジャーニという富豪一族に産まれ育った特権階級が持つ証にも見えたからだ。その傲慢さが、自身自身に対しては親愛の情の表現として向けられる間は、強引だがそれもまた男らしい魅力に見えていたのだ。けれど今、その傲慢さはマリアを傷つける剣として振るわれている。

ルカリオがなぜ、マリアが浮気したなどという誤解をしているのかは理解できない。マリアが彼以外の男性と寝たという虚構を真実と思い込み、彼女を排除しようとしている。

彼のホームグラウンドであるこの国では、マリアはその存在すら

も否定されるだろう。

もしかしたらホテルに泊まれなかったこととて、ルカリオが手を回した結果なのかも知れない。

そう思った瞬間、マリアはルカリオ・アジャーニという男性が、心底から恐ろしくなった。

彼はもしかしたら自分のお腹の子供を否定するあまり、その命すらも奪おうとしているのかも知れない。

連絡を取ろうという気力はすでになかった。空港に向かい、なるべく早い便を押さえて帰国する。それだけを考えて、マリアは空港へと向かった。

一年間の蜜月を過ごした国を、マリアは逃げ出すように　　いい
や。まさに逃げ出したのだった。

/ 4

「ただいま、リズ」

「おかえりなさい、マリア。その顔だと、うまくいったのね？」

少しばかり年季の入ったアパートメントの一室でお茶を飲んでいたりジー・ダーシーは、部屋に入ってきた親友の顔を見て、ホッと息を吐いた。

「ええ。まだ試用期間があるけど、その間にボスの試験に合格すれば、正社員として雇ってもらえるって」

ハイタッチをして喜びを伝えるマリアは、久しぶりに晴れやかな笑顔を浮かべていた。それを見て、リズは安堵する。

リズとマリアは、学生時代から続く親友だった。お互いの初体験の相手だっただけ知っている。だからこそ、一年前に突然マリアが仕事を辞めていなくなった時には驚き、心配していたのだ。

マリアからのメールや電話では幸せそうだったから、リズは何も言わないことにしていた。だが数日前に現れたマリアは、憔悴しきっていた。

両親を事故で亡くしているマリアには帰る場所などなく、リズはそんな彼女を自分のアパートメントに住まわせることを即決したのである。狭苦しい我が家だが、少なくとも今すぐにも身投げでもしそうな姿のマリアを放置できなかったのだ。

妊娠しているという事実を知った時、リズは我が事のように怒った。なぜマリアが一人で不安に苛まれなくてはならないのか。子供は一人では作れないのだ。必ず原因がある。

マリアの話聞く限り、ルカリオ・アジャーニという男性は下の下な卑劣漢だった。

一年間も共に過ごしておきながら、マリアの何を見ていたというのか。彼女がそんな畏を仕掛けられるような女性ではないことを、リズは知っていた。真摯で、真面目で。いつだって相手のことを先に考えてしまう。そんな女性なのだ。マリア・ウォートンという女性性は。

けれどルカリオ・アジャーニは、マリアが妊娠したと言った瞬間に全ての責任を放り出し、彼女を夜の街に放り出した。大企業のトップともある人間の取る行動とは思えない、信じがたい愚行だ。一方的にマリアが裏切ったと決めつけた男を、心の内で首を締め付けてやりたいと思いつながらリズは嘆息する。

「良かったわ。いつまでもリズの部屋に間借りしているわけにはいかないし」

マリアがそう言って苦笑するのを見て、リズは眉を寄せた。

「なに言ってるのよ。お腹が大きくなったら、一人でいるよりも私と一緒にいたほうが、何かと都合が良いわよ？」

「……でも、リズにはリズの生活があるでしょう？」

自分にも紅茶を用意したマリアが、カップに口をつけながらそう呟く。それは確かに、恋人が居るのならば、友人といえどもいられても困るのかも知れない。けれど幸いな事に現在の自分はフリーだった。

リズはそう告げると、肩を竦める。

「ねえ、マリア。あなたは他人の手が必要な状況だわ。あなたの主義として、自力で何事も済ませたいというのは理解できる。でも、手を借りる事は別に悪じゃないのよ？」

「リズ……」

「私は、あなたの力になりたい。それだけなの」

両親を失ってからは、アルバイトで生活費と学費を稼いで大学を卒業したマリアは、他人に頼るのを苦手としていた。他人に迷惑をかけたたくない、というマリアの優しさが、彼女をそんな風にしてしまったのだ。

けれどリズからすれば、親友から頼られる事は、嬉しくこそあれ迷惑などでは決してない。今回、マリアが進退窮まって自分に頼ってくれた事も、リズにしてみれば嬉しくあつたのだ。

「子供のためにも、お金は余裕があるほうが良いわ。だからしばらくは家に居なさい」
「……ありがとう」

うるんだ目で自分を見る親友に、リズは微笑んだ。

数週間の試用期間を経てマリアはアントニオの秘書となった。元々いた職場だった事もあり、顔見知りが多い。突然辞めたにも関わらず再び現れたマリアに対し、かつての同僚達は最初こそ訝しげにしていたものの、真摯に仕事に取り組んでいるマリアを見て、すぐにかつての距離感を取り戻していた。

あえて言うならば、企画営業というかつての職場で、自分の後釜に座ったらしいレイチェル・スタンバックが自分を警戒する目を向けてくるくらいだろう。

だがそれは、仕方のないことだとマリアは理解していた。自分が一年前に、どれほど無思慮な行動を取ったのかについては、自分自

身が一番理解している。無分別で無責任。それをレイチエルは警戒しているのだろう。他の同僚達はマリアのことをある程度知っているからこそ、今は認めてくれている。

だったら、自分はレイチエルにも認めてもらえるように、真摯に仕事に取り組むべきだ。

手にした書類を確認し、電話を数本入れつつマリアは、ほっと息を吐いた。

「マリア？　どうかしたのかね？」

社長室から顔を出したアントニオが、ちよつどため息を吐いたマリアに首を傾げた。

「社長？　あ、いいえ。ちよつと目が疲れただけです。何かご用ですか？」

「ああ。コーヒーを頼めるかな。濃いめで」
「かしこまりました」

アントニオの秘書という席に座れたことは、マリアにとっては僥倖だった。前任の秘書が結婚を機に退職したと聞いて、少しだけ羨ましく、そして痛みを感じる。だがそれがなければ、恐らくはアントニオは自分を雇ってはくれなかっただろう。

彼の信頼に応えなくてはならない。自分は一度、会社の彼の信頼を裏切っている。

だからこそ、与えられたチャンスに対して必死にくらいつこう。そう考えながらマリアはコーヒーを淹れると、アントニオのオフィスへと入っていった。

アントニオは上着を脱いでシャツ姿のまま、難しい顔でモニタを覗き込んでいる。

「社長。コーヒーをお持ちしました」

「ああ、ありがとう。そこに置いておいてくれ」

アントニオはモニタから目を離さずに、何かを考え込んでいるようだった。

それを確認すると、マリアは乱雑に放り出された資料のうち、アントニオがすでに片付けたと思しき資料をまとめると、机の端に置かれたトレイに放り込む。

「……マリア？」

「こちら、すでに片付いているのでしょうか？」

現在、アントニオが睨み付けているモニタの案件とは、まるで別件の内容を指さす。本来ならば処理済みとして扱われているはずだが、今見ている別件が入り込んだために、おざなりに放置されていたのだらう。

「ああ、ありがとう」

「いいえ。他になにかご用はありますでしょうか？」

「いや。無いよ。……ああ、そうだ。なにか連絡はあった？」

首を横に振って見せると、アントニオは「そうか」と呟いて窓の外へと視線を向けた。

高層ビルの最上階にあるアントニオのオフィスから眺める景色は、素晴らしいものだった。空へと向けて突き立てるように伸びる高層ビルの群れ。遠くに見える山脈の峰を眺めながら、アントニオが求めている連絡の主のことを思う。

アントニオもまた、恋人に去られた男性だった。彼もまた自分と同じように、恋人に捨てられたのだという。だがマリアは、それは違うと思っていた。話に聞く彼の恋人は、どう考えても彼のために身を引こうとして、離れていったようにしか思えなかったからだ。

だからこそ、マリアは折に触れて彼女を探すように、アントニオ

に告げている。

彼もまた、少しずつ恋人を探し出そうという気力を取り戻しつつある。

自分にはない未来。それを思いながら、マリアは自分の下腹部にそつと触れる。

ここで育っている命は、自分を捨てることはない。そう信じていた。

#4 (後書き)

2011/02/11 誤字修正

企画営業課のフロアはマリアにとっては、かつての職場である。現在はアントニオの秘書 というよりは、アシスタントとして働くようになってからも、幾度か足を運んだことはある。

元・企画営業という立場から、課から社長に向けてのプレゼンの補助役として、アントニオが求める企画の方向性と、メンバーの求める方向性の調整を行っているのだ。

かつての同僚でもあったマイクと資料を挟んで話し込んでいると、背後から視線を感じて振り返った。

「……レイチエル？ 何かしら？」

「いえ、別に。先輩のお仕事を見学させていただこうと思って」

レイチエル・スタンバックは鋭い雰囲気そのままに、マリアとマイクの様子を黙って見ている。それに肩をすくめて見せると、マリアはマイクが提案する内容に意識を戻す。

剣呑な視線を背に感じながらもチェックを終わらせると、マリアは立ち上がった。

「じゃあ戻るわね。社長のスケジュールからすると、明日の朝は空いているわ。ねじ込むなら今のうちに用意しておくけど？」

「ああ、願います。……君が企画営業から居なくなったのは、正直痛かったな。今からでも十分やれるんじゃないか？」

マイクが口ひげを撫でながら苦笑いを浮かべるのを見て、マリアは小さく肩をすくめる。

「買いかぶりよ。それに今は、私よりも優秀なレイチエルがいるじゃないの」

そう言っただけでオフィスを出て行くマリアの背を見送り、マイクはふと気がついたように視線を横に向けた。

「なにか言いたいことでも？ レイチエル」

「みんな、おかしいですよ。ウォートンさんの事、買いかぶり過ぎじゃないんですか？ あの人の、一年前に突然辞めたんですよね。それなのに今度は社長秘書だなんて」

レイチエルが吐き捨てるように口にする言葉に、マイクは苦笑う。

そして手にした書類をまとめると、それをレイチエルへ押しつけた。

「こいつを読んでみる。マリアなら二十は改善案を出してくる」

「……は？」

「レイチエル。君は確かに優秀なスタッフだし、美人だよ。だが優秀さを鼻にかけてるようじゃ、社長のお眼鏡にはかなわんな」

「な」

頬を紅潮させたレイチエルを置いて、マイクは休憩スペースへと向かうべく立ち上がった。

見なくても分かるほどに怒気を発しているレイチエルを思い、マイクは再び苦い笑みを浮かべた。

レイチエル・スタンバックは、マリアが突然辞めた一ヶ月後に採用された。前任だった彼女の穴を埋められるだけの才気を持った人材を、と要望しただけあって、レイチエルは確かにデキる女だった。同時にその優れた容姿に惹かれる男達は多かった。

だがマイクは、レイチエルが始めからアントニオ・ガゼットを狙っている事に気がついていた。アントニオの前でだけはしおらしい振りをする彼女を見て、その古典的な態度に思わず笑ってしまったほどである。

そんなレイチエルが、マリアをあそこまで敵視する理由。それもまた、分かつてはいた。マリアが会社に現れた時から、企画営業部の人間は彼女をあつさりを受け入れている。それは一年前から変わらない彼女の人柄のおかげだろう。

それがレイチエルからすれば気にくわない。何せレイチエルからすれば、マリアが帰ってくる事は望ましい状況ではないのだから。自分と比較されるうえ、明らかにマリアのほうが優れている。それはプライドの高いレイチエルには、耐え難い屈辱だろう。

さらにはレイチエルはアントニオの妻の座を狙っていた。マイクから見ても露骨なアピールを繰り返しているようだが、成果はない。そこに現れたのもマリアである。アントニオの秘書に収まり、四六時中一緒にいる二人はお似合いにも見えた。レイチエルからすれば、全てが屈辱なのだろう。

「もめ事にならなければ良いがなあ」

マイクの呟きは、願望にも似た響きがあった。

「……ミスタ・アジャーニ。お忙しい所を申し訳ありません」
「いや。それで祖父の容態は？」

入り口からエレベーターを待つ時間も惜しく、階段を駆け上って

きたルカリオは、乱れた呼吸を整えながら当直の医師に状況を確認する。

その報せは夜遅くまでオフィスに残って仕事をしていたルカリオに、直接届けられた。

祖父であるアンジェロの担当看護師から、アンジェロが病院に搬送された、という連絡である。

「現在のところ、容態は安定していらっしやいます。とはいえ、元々心臓が弱くなっていらっしやいますから、安心はできません」

「そう……か。意識は？」

「今は薬が効いていますので、あまり明晰な状態ではありませんが……お顔をごらんになる程度なら大丈夫でしょう」

医師の言葉に頷いて病室へと入る。

アジャーニの前当主に相応しい最新医療機器が、細い枯れ枝のようなアンジェロを取り囲んでいる。いつもよりも弱々しく見えるのは威圧感すらある医療機器のせいだろうかと思いつつ、ルカリオは敬愛する祖父の枕元に立った。

「お爺さま」

うつろに開かれたままだったアンジェロが、自分を見るのが分かる。

ルカリオは皺だらけで節くれ立った祖父の手を取った。

「大丈夫そうで、安心しました」

「……ルカ……リオ」

ゆるゆると力が込められる手を握り返し、ルカリオは祖父の口元に耳を寄せた。

囁くように告げられた言葉に、ルカリオの表情が強ばる。

「お爺さま……それは」

言い返そうとするルカリオを余所に、アンジェロは目を閉じて寝息を立てる。

薬が効いたのだろうかという医師の言葉を聞きながら、ルカリオは祖父の言葉を考えていた。

「次代のアジャーニを」

それは恐らく、祖父が生きるための糧なのだろう。ルカリオはそう考え、沈思する。

祖父の望みを叶える事はできない。

だが、死の旅路へ向かおうとする敬愛する祖父のために、自分が叶えられる事ならば叶えたい。

ならばどうすれば良いのか。

ルカリオ・アジャーニの脳裏で一つの案が浮かぶ。彼はそれを考え、悪鬼のように笑みをその顔に浮かべるのだった。

「今夜はありがとう。助かったよ」

「いえ。あくまで秘書としてご一緒しただけですから」

ドレス姿のマリアを傍らに置いて、アントニオは苦い笑みを浮かべている。企業家によるパーティーは人脈作りには有益だが、同時に独身で未来の有望な男性を狙う女性　はたまた、その逆もまた多くいる場所だった。

そんな中、アントニオ・ガゼットは一人の女性を伴って現れた。これまでのパーティーでは特定のパートナーを持つていなかった彼が、珍しく連れてきた女性。それはパーティー参加者の好奇心を強く刺激したようだった。

肩を丸出しにしたドレスは、まだお腹の目立たないマリアのほっそりとした体型に良く似合っていた。

「車が回されるまで時間がかかりそうだな。大丈夫かい？」

「ええ。今夜は暖かいですから」

肩にかけてシヨールを直しながら応えるマリアに、アントニオも笑う。

「そうか。家までは車で送るから安心してくれ」

「ふふ。ありがとうございます」

微笑みながら玄関前に回された車にエスコートするアントニオ。そんな扱いを受けるマリアは、どう見ても彼のプライベートなパー

トナーと見えていただろう。

事実、それを目にした男はそう考えていた。

出張に出る寸前に問題が発生し、その対処のために入国が遅れたルカリオ・アジャーニである。彼はホテルのフロントでチェックインを行っている最中、大勢の着飾った人々が現れるのを目にした。

「何かあったのかな？」

「ええ。本日は当ホテルにて、フランジル社の創立記念パーティーがありましたので。そちらのお客様かと」

ルカリオも名の聞いた事のある老舗デパートグループの名を聞いて、なるほどと頷く。どうりで見た事のある顔が並んでいるはずだと得心し、そこに一人の女性の姿を見いだした。

着飾ったドレスは、自分が買い与えたそれに比べれば安物も良いところだろう。身につけているアクセサリーとて、見劣りのする品だ。ドレスの値段からすれば、レンタル品かも知れない。だがそれでも、彼女は周囲の人間達からひときわ目立っているように見えた。思わず名を呼びそうになって、彼女の傍らに立つ男に気がついた。マリアの腰に手を回し、親しげに顔を寄せて話をしている。恐らくは車を待っているのだろう。その姿に言いしれぬ苛立ちを感じる。男の言葉に、マリアが笑う。明るく優しい笑み。それはかつて、ルカリオが向けられていたものだった。

この頃はマリアのことを考えなくなっていた。だがそれは忘れてた訳ではなかった。ただ意識して『考えなくしていた』のだ。目に映る二人はルカリオの視線に気付くことなく、停まった車に乗り込んでいく。マリアに続いて男も乗り込んだ所を見て、ルカリオの胸に

久しぶりに怒りの炎が灯った。

「あの、ミスタ？」

「……ああ、すまない」

フロントの男が恐る恐る訊ねるのに振り返り、ルカリオはサインを済ませるとポーターに荷物を持たせて歩き出す。

その頭の中では、先日考えついた計画を現実にするために、様々なプランを練り始めていた。

「アントニオ・ガゼット？ ああ、あの不動産屋か？」

「それだけではありませんが、まあ、ミスタ・アジャーニに比べればどんな実業家でも小物扱いされるのでしょうか」

ルカリオが普段から使っている探偵社の人間が、そう応えて資料を差し出した。少々若く、野心的な匂いがする男はルカリオも見た事のない男だった。とはいえ、探偵社に雇われているという事は、それだけの能力があるのだろう。個人はともかく会社を信頼するルカリオは、その個々のメンバーがどうであれ気にせずにいる事になっていた。

「こちらが調査の結果です。ミス・ウォートンは半年ほど前にガゼット社に採用されています。以前にも勤めていたようですが、改めて社長秘書として入社しています」

「前の秘書はどうしたんだ？」

「結婚を機に退職したとの事です」

「フン。なるほど」

手にした資料には、現在のマリアの住所や同居人の名前が書かれている。リジー・ダーシー。名前からも分かるが、添付された写真には女性が映っている。

「それで。そのアントニオについては？」

「はい。社員の一部に聞き込みをしてみました。興味深いことが聞けました」

「ほう？」

ルカリオが姿勢を直すのを見て、探偵は身を乗り出して見せた。

「……マリア・ウォートンが社長の愛人である、という噂です」

「愛人？」

ピクリと眉を動かしたルカリオに満足したように、探偵が頷き返す。

「はい。それに、前任の秘書も結婚退職などではなく、マリアを側に置くために社長が辞めさせたのだ」と

「しかし、他の聞き込みの結果では、そのような内容は上がっていないようだが？」

「ええ。どうやら古い社員は社長とも馴染みが深いようで、口が重たいのです。今回の情報は入社してそれほどでもない人間からの情報ですから」

「なるほど？ 社長を思って口を閉ざすような輩からは聞けない情報が出てくる、と？」

「左様です」

したり顔を浮かべる探偵を前に、ルカリオは資料に目を通す。

そして、内心で歯ぎしりを浮かべていた。愛人。つまりマリアが通じていた男とは、このアントニオ・ガゼットだということなのだろうか。

「付き合いの長さは？」

「それについては、あまり詳しくは。ただ以前に会社を辞める時にも、社長は随分と彼女を慰留したそうです」

「……ふん。その頃からの付き合いということか？」

マリアを自分のマンションに住ませた時。あの頃から、彼女は自分とアントニオを天秤にかけていたという事なのだろう。そう思うと、それだけでアントニオとマリアの首を絞めてしまいたくなる。だが、そんな内心を表情に出すことなく、ルカリオは探偵から受け取った資料に目を通し続ける。

「ご苦労だった。代金は、いつも通りに支払おう」

「ありがとうございます。それでは、またご用命があれば」

「ああ。そうさせてもらおう」

頷くと探偵は退出していく。若さが鼻につくが、腕は良さそうだ。ルカリオはそう考えると、今度こそ自分の思考に沈んでいくのだった。

#6 (後書き)

読んで下さった方、お気に入り登録してくれた方に多謝。

ガゼット社に直接赴くのは少々問題がある。そう考えたルカリオは、調査報告にはマリアの現在住んでいるアパートの住所も載っていたので、その通り道で待ち伏せる事にした。

車を路肩に停めてマリアが通りがかるのをじっと待ち続ける。必要なのは、演技力だった。

ルカリオは天国へと召されようとしている祖父のために、『次代のアジャーニ』を見せる必要があった。それも、彼に疑われることのないように。

そのためには、マリアが必要だった。

彼女の演技力は十分だ。妊娠というアクシデントが無ければ、ルカリオは彼女を疑うことなど無かったのだから。

当初は彼女に全てを話そうかとも考えた。だがその考えはすぐに捨てた。あの欲深い女性にそんな事を話せば、どんな要求をするかも分からない。それならば 騙された振りをすれば良い。彼女が自分を騙しているとその美しい顔の裏側で嗤っているように、自分もまた、彼女を騙せば良いのだ。

それはルカリオにとって心地よい案だと思えた。傷ついたプライドがそれを後押しする。自分を騙した女を、自分が騙し返す。それもアジャーニの妻という立場まで与えた上で、恐らくは彼女にとって幸せの絶頂から突き落とす。

そう。ルカリオは、マリアに結婚を申し込むつもりだった。しかも、かつて彼女を放り出した事についても謝ったうえで、である。無論それは演技だ。彼女の裏の顔を知っている今、マリアを信じる

事など無いだろう。だがそれでも、死に瀕する祖父がひ孫が生まれ
たという事実を胸に安らかな死を迎えられるならば、例え相手が毒
婦であろうと一時的に目を瞑る覚悟はしていた。

そう。ルカリオの気分はすでに殉教者のそれだった。

愛など抱かない。だが自分が彼女を愛していると、そのように思
わせるための演技はする。

いつか、来るべき日に毒婦に断罪するために。

「……来た」

暗くなつた道を一人歩く女性の姿。それはどこか心細さを感じさ
せるほど、ほっそりとしている。本当に妊娠しているのだろうか。
そんな疑問すら抱かせるほどに、マリアは痩せていた。

疲れたように肩を落として歩く姿は、ひどく弱々しく見える。

だがルカリオは脳裏に探偵の報告書を思い浮かべ、そんな憐れみ
を切り捨てる。彼女は毒婦。欲得尽くで動く悪女。憐憫など不要。

車のドアを開き、路上へと出る。

全てのタイミングを計り、最適の表情を浮かべながら。

目の前の車から人影が出てくるのが見えて、マリアは足を止めた。
この辺りは決して治安が良い訳ではない。無論、強盗が歩いてい
るほど治安が悪い訳ではないが、決して安心して無警戒に歩けるよ
うな場所でも無い。

だからこそ、車から突然現れた人影にマリアは警戒した。だが次
に、その人影が街灯の下に立ったのを見て、愕然とした。

そこに立っていた男を、マリアは見た事があった。否。いやとい
うほど見覚えがあった。

仕立ての良いスーツに身を包んだ偉丈夫。スポーツ選手と言われるても疑わないだろう均整の取れた肉体は、ジムで鍛え上げた物だという事を知っている。その肉体が与えてくれる快感も、その存在が与えてくれる安心感も、よく知っていた。

「マリア」

自分と呼ぶ声が、とても優しい物なのだと信じていた。

「やっと見つけた。マリア」

こうして、自分のことを愛しい存在なのだと言わんばかりに、優しい声をかけてくれるなど、信じられなかった。それほどの事を、彼はしたのだ。

「探したんだ、マリア。……ああ、すまない。突然すぎてびっくりさせたかい？」

ルカリオが、まるであの夜が無かったかのように、自分の記憶と変わらぬ顔と声で話しかけてくる。

マリアは自分の心臓が壊れそうな早さで鼓動を刻むのを感じていた。

そのくせ全身から血が引くような感覚を覚えているのだ。分かるのはルカリオ・アジャーニという男が今、目の前に立っているのだという事。

けれど、一体なにをしに来たというのか。お腹の子を自分の子供ではないと決めつけ、自分を夜の街に放り出した男が、一体なんのつもりで？

「話がしたい。マリア、車に乗ってくれないか？」

「……いや、よ」

かろうじて唇に乗せられた声は、まるで自分の声じゃないように聞こえた。掠れ、震えている。怯え。恐怖。ルカリオがそこに立っている意図がまるで理解できず、マリアは後ずさった。

「……マリア？」

「私には、あなたと話す事なんて何も無いわ！」

怪訝そうに眉を寄せたルカリオを置いて、マリアは駆け出す。ルカリオの横を駆け抜けると、リズの待つているだろう彼女のアパートへと走る。

頭の中ではなぜルカリオが現れたのか、という疑問がグルグルと回り続けている。だが何よりも、今マリアを突き動かしているのは、恐怖だった。

走り去ったマリアの後ろ姿を、ルカリオは呆然と見送ってしまった。

最初こそ自分の姿に驚いた様子を見せたマリアだったが、ルカリオが甘い声を出せばすぐにでも尻尾を振って近づいて来るだろうと予想していた。

だが、その予想は覆された。

彼女はまるで、幽霊でも見たかのように自分に怯え、さらには話を一言も聞くことなく逃げ出してしまった。

計画の第一歩から躓いた事に苛立ちながら、ルカリオはマリアが

走り去った道を見つめる。どうせ彼女の行き先は分かっているのだ。予想よりも手間取るかも知れないが、それでも計画に変更は無い。

ルカリオは、車のエンジンをスタートさせながら、そう考えていた。

決して裕福とは言えないがリジー・ダーシーはアパートメントの一室を所有している。

その扉が乱暴に開かれ、人影が入り込んでくるのを見て、眉を寄せた。

「ちよつと、ドアを壊さないですよ？」

「……リズ」

そこに立っているのはマリアだ。だが彼女はどこか途方に暮れた子供のような顔で、リズを見るとその場でへたり込んだ。

「ちよ、ちよつと、マリア！？ どうしたの！？」

慌てて駆け寄ったリズにマリアはすがりつくくと、震える身体をそのままに必死にしがみつく。ドアの鍵が閉まっているのを確認して、リズはマリアを抱きしめた。震えがゆっくりと収まっていくのを感じながら、リズはマリアの頬を撫でる。

「どうしたの、マリア？ 強盗にでも襲われた？」

ヒューヒューと喉を鳴らすマリアが、ゆっくりと呼吸を整えているのを見守り、リズはマリアの姿を確認した。別段、着衣の乱れも無い。であれば？

「ルカが……ルカリオが」

「え？」

「ルカリオ・アジャーニが、いたの」

リズが淹れてくれたコーヒを飲みながら、マリアはソファに沈み込むように座っていた。ボンヤリと何も映っていないテレビを見つめるマリアの横に、リズが座る。

「マリア？」

「……うん」

気遣う様が理解できたのだろう。マリアが、ゆっくりと考えをまとめるように口を開いた。

「アパートへの道を歩いていたら、道に車が停まっていたの。考えてみたら、この辺りであんな高級車が停まっているはずが無いのにぐ、とカップを掴む手に力がこもる。」

「男が降りてきたわ。……ルカリオだった。彼は　まるであの夜の事が無かったように、私を呼んだの」

リズは震えているマリアの肩を、そっと抱きしめた。

この肩とて、以前の記憶の中にあるマリアとは比べものにならないほどに、やせ細ってしまっている。

「私を路上に放り出せと命じた事など、覚えていないような顔で私が好きだった笑顔を向けて、話がしたいって……」

それはつまり、ルカリオの笑顔が結局のところ、心のこもっていない代物だったという事か。リズはそう思うも、口には出せなかった。マリアとて気がついていないのだろう。だからこそ彼女は震えている。愛している。愛していた。今も彼女の心はあの男に囚われたままだ。だがその笑顔は　誰にでも向けるような笑顔だったという事なのだから。

「……マリア」

「逃げ出したわ。話なんて無いって言い捨てて、後ろも見ずに逃げ出したの。怖かった。ルカリオが何を言い出すのかが分からなくて彼がどんなことを言っても、彼にすがりついてしまいそうで」

今も胸には彼への愛がある。理由も理解できぬままに路上に放り出され、一時は憎みもした。だが結局のところ、マリアの中には今もルカリオへの消えぬ愛が燻っていた。お腹の中で成長する子供が、

その愛を保つ原動力ともなっていたのだろうか。

だがそれは、あくまでも遠くから テレビに映ったスターを見るような気持ちになっていたのだ。もはや、ルカリオ・アジャーニとマリア・ウオートンの人生は交差する事はない。

そう考えていたのだ。

だというのに、彼は現れた。

話がしたい、と。そんな事を言ったのだ。

あの誇り高きアジャーニの男が。

一体なんの冗談なのか、と。今ならばそう思える。だが、ルカリオがなんの理由も無く、こんな場所に現れるはずは無い。では理由は？

もしかしたら、という希望がマリアにはあった。

ルカリオが、あの夜の誤解に気付いて後悔し、自分を迎えに来てくれたのではないか？という希望が、ほんのわずかでもマリアの胸に火を点す。

けれども、同時にそれがほとんどありえない事だとも理解していた。

もしも誤解だったというのなら、ルカリオのあの変わりのない笑みはなんだったのか。

ルカリオは自分がそこまで愚かだと思っているのだろうか。ちょっと微笑めば犬のように尻尾を振ってついていく、と。そんな風に思われていたのだろうか？

マリアが落ち着いたのを確認して、リズは立ち上がった。窓の橋から外を眺めればいやに大きな黒光りする高級車がアパートの前に停まったのが見て取れた。

「……マリア。どうやらおいでなすったようだよ」
「え……？」

呆然と顔を上げたマリアに、リズは肩をすくめて見せる。

「この辺りで、あんな高級車は見た事がない。ってことは、多分そのルカリオ・アジャーニなんだろうさ」

そう口にした途端、ドアが大きくノックされる音が室内に響き渡ったのだった。

ルカリオは「待たされる」事が滅多にない。無論、自然ややむを得ない事情で待たされる事はあるが、こういう風に誰かを訪ねて玄関先で待ちぼうけを食わされるなどという事は、まず無い。誰もがルカリオが訪れたと知れば、あらゆる手を止めて彼を歓待するからだ。

だが、目の前のドアは一向に開く様子が無い。苛立ったルカリオは、今度はより力を込めてドアをノックした。

「はいはい。ドアをたたき壊さないですよ？」

インターフォン越しに女の声が響く。その声が聞き覚えのない声だという事実が、ルカリオをさらに苛立たせた。

「ミス・ダーシーかな？ 開けてくれないか」

「自分の名前も名乗らないような男を家に上げる女は居ないよ。一昨日おいで」

威勢の良い声で啖呵を切られ、ルカリオは目を白黒させる。彼にこのような物言いをする者などいない。たとえ親戚であろうとも、アジャーニの当主である自分にはもっと丁寧な口の利き方しかできないのだ。

だが、このインターフォンの女性は平然と口答えを返してきた。恐らくは自分を知らないのだろう。そう考えてルカリオは胸をなで下ろし、改めて名乗る事にした。

「僕はルカリオ・アジャーニだ」

それだけを言えば、扉は開くと思っていた。
だがインターフォンは何も返さず、ドアが開く様子もない。
怪訝に思っていると、インターフォンからは呆れた声が発せられた。

「……で？」

「なに？」

「ルカリオ・アジャーニさんね。了解したわ。で？ そのアジャーニさんが、どんな用事だと？」

初めから喧嘩腰な物言いに、この女性が自分を知っていることをルカリオは理解した。恐らくは MARIA から、彼女にとって都合の良いように様々な事情を吹き込まれているのだろう。さしずめ自分は、健気な彼女を捨てた情のない男、というところか。

「……MARIA・ウオートンが、こちらでお世話になっていると聞いている。彼女と話がしたい」

「話？ 具体的には？」

「……ここで話すような内容じゃあ無い。それは彼女の名誉のためにだ」

こう言えば、この女性もさすがに譲歩するだろう。
ルカリオはそう計算し、インターフォンへ視線を向ける。

「……分かったわ。ちょっと待ってなさい」

ブツリとインターフォンが切られ、ガチャガチャと音を立ててチーンが外される。そして、ドアが開いた。

そこには地味で質素な服を着た女性が立っていた。黒髪を一本縛りにして背中に流し、険のある目つきで自分を睨み付けている。

「……言っておくけど、私も同席するわ。それに、隣には腕自慢の友達に住んでるの。変な真似をしようとするれば、すぐに駆けつけてくれるわ」

「……大丈夫だ。話をするだけだよ」

睨み付けてくる女性に両手を挙げて見せれば、彼女はフンと鼻を鳴らして踵を返す。

「こつちよ」

会話するつもりのない女性。だがその態度で確信した。

リジー・ダーシーはマリアから事情を聞いている。それも恐らくは彼女にとって都合のいい「真実」を。

「なるほど。味方は多いほうが良い、という所かな。マリア」

だがどんな味方を得ようとも、マリアはルカリオには勝てない。アジャーニという巨大な帝国からすれば、こんなちっぽけなアパートに暮らす独身女性など、敵にもならないのだ。ましてや、非は彼女の方にある。どれほど都合のいい嘘で友人を騙したのだとしてもいや、もしかしたら友人もグルなのかも知れない。

ルカリオはそう考えて、身を引き締める。

嘘つき二人を相手にする　そう考えて、苦笑を浮かべた。どれほどの詐欺師であろうと、ルカリオの前で嘘をつき続けるなど不可能だ。これまでの自身の経歴を合わせて考えてみれば、当然のことだった。

ルカリオの目の前に、二人の女性が座っていた。先ほどから自分を敵意に満ちた視線で睨み続けているリジー・ダーシー。そしてその隣に座っている女性は、ルカリオにとっては見慣れた存在だった。だった、はずだ。

けれどルカリオは、目の前に座る女性が本当にマリア・ウォートンなのか確信が持てずにいた。妊娠しているはずなのに、以前よりも細く痩せた身体。安物の服に身を包んでいる。顔色も悪い。

「……マリア。どこか病気なのかい？」
「っ……。別にどこも悪くはないわ」

思わず心配して声をかけるも、マリアはとりつく島もない声色で、冷たく返答するだけだった。

ルカリオが二人の前に腰を下ろし、リジーが入れた安物のコーヒーを口に運ぶ。

「それで？」

二人がいつまでも話し出さないことに焦れたのだろう。リジーが口火を切る。

「そう……だね。まずは、どうして僕がここに来たのか、から話そう」

「そうね。あんたがマリアにした仕打ちは、許せるものじゃないわ」
「……そうだね」

頷いて見せる。なぜならばリジーは、マリアから事情を聞いているだろうからだ。つまり彼女は基本的にマリアの味方なのだ。だがルカリオは別にリジーを説得する必要性は感じていなかった。正義は我にあり、とルカリオは考えている。

つまるところ、マリアを利用するために今は彼女達が思う「真実」を自分も認めたように見せれば良いのだ。そうすればリジーの反応も好転するだろうし、マリアの怯えたような様子も変わるだろう。

そう考え、ルカリオはマリアに対し頭を下げて見せた。

「すまなかった、マリア」

「……ルカ……リオ？」

マリアの呆然とした声が下げた頭の上から聞こえてきた。呆然としているのだろう。実際、自分のこんな姿を社員が見れば、この世の終わりかと思うかも知れない、とルカリオは思う。

ルカリオ・アジャーニが誰かに頭を下げるなど、この世が終わるうともありえない事なのだから。

「あの時、君が浮気をしているという電話がかかってきていたんだ。……そこに君が妊娠した、というから悪意の噂を信じてしまった」
ルカリオは沈鬱な顔を作り、マリアへと告げる。彼女の望むだろう「真実」を。

「けれど、君を追い出した後、冷静になって考えてみたんだ。君がそんな真似をするだろうか？ ……答えは否だ。君はそんな真似をするような女性じゃあない」

マリアが、おずおずと顔を上げる。その目に希望の光が宿っているのを認め、ルカリオは内心で笑みを浮かべた。

「マリア。どうか許して欲しい。そして僕にチャンスをくれないか

？ そのお腹の子供の父親として、僕を認めて欲しい」

そう言って頭を下げた。

本来ならば高いプライドを持つルカリオが、こんな毒婦に頭を下げることなどありえない。だが今は自分のプライドよりも、敬愛する祖父の願いを叶えることのほうが優先される。

そう考えながら、ルカリオは頭を下げ続けていた。

「父親として認めて……って」

マリアは目の前で頭を下げているルカリオの存在が信じられなかった。

一年間、共に暮らした中でマリアの中に構築されたルカリオ・アジャーニという男性の印象は『傲慢』の一言に尽きるのだ。アジャーニ一族の家長として采配するという責務がある以上、そうなるのも仕方のないことなのだろう。彼の肩にはアジャーニの一族だけでなく、傘下企業の従業員達の生活すらものしかかっているのだから、傲慢なほどでなければやっていられないのだろう。

だが、だからこそ彼が頭を下げるなどという図は、思い浮かばなかった。

「一緒に帰ろう。そして結婚して欲しい」

顔を上げて見つめてくるルカリオの視線は熱を持っている。じつと懇願するような視線に、マリアは困惑の表情を浮かべていた。その隣で、リズが険しい顔をしている。

「今さらと言われるかも知れない。確かに僕は君に酷い真似をした。だが、もしもまだ君の側に誰もいないのなら、どうか僕にチャンスをくれないか？」

「……ルカリオ」

真摯な姿勢を保つルカリオに、マリアはどこか迷う雰囲気漂わ

せる。だがその直後、マリアは首を横に振った。

「駄目よ、ルカリオ」

「……マリア？」

驚いた表情で顔を上げたルカリオに、マリアは苦々しい顔を向ける。

「私は今、仕事をしているわ。以前、貴方に言われるがままに辞めてしまったせいで、迷惑もかけた。だから今度は貴方の言葉に従って辞めるわけにはいかない」

「……君は、僕よりも仕事を取るというのか？」

不意にルカリオの声が硬くなるのをマリアは感じた。

「どういっつもりだ、マリア。君は今、妊娠しているんだぞ。なのに仕事をするだなんて」

「お言葉ですけどね。今のご時世、妊娠していても仕事をしている女性は沢山いるわ。アントニオ 社長にもお世話になっているの。あの人の期待を裏切る訳にはいかないわ」

「……お世話に、ね」

ルカリオの言葉が嫌に耳についたが、マリアはそれを無視して言葉が続ける。

「分かって、ルカリオ。あなたも会社を経営する人間ならば、理解できるでしょう？ 突然従業員が辞めたりしたら、それは無用の混乱を生むわ」

「そんな事は無い。大概の従業員は替えがきく。少なくとも君の仕事は『君にしかできない仕事』じゃないだろう？」

ルカリオの言葉にマリアは言葉を失い、横で聞いていたリズすら

も唾然となった。

替えがきく。確かにそうだろう。従業員は特殊な技能を要する仕事でなければ、多くは別人でもフォローができるものだ。だが、そうだとすると、突然の退職は職場にとつては迷惑でしかない。

ルカリオは、雇用する側としてそれを知っているはずだ。なのに彼は、それを些末な事だと言う。

「確かに、私の仕事は社長の秘書といつても、たかが知れているわでもね、それでも社長は私を信頼して仕事を任せてくれているの。その信頼を裏切れと、あなたは言っているのよ？」

「君が僕の妻となるのなら、それは仕方のないことだろう。僕は自分の妻が、別の男の秘書をやっているだなんて冗談じゃない」

今や慥然とした表情を隠さない目の前の男に、マリアは途方に暮れてしまった。

ルカリオは譲るといふ事を知らないのだ。彼にとって、全ては譲られる物だから。

本来、ルカリオとて秘書が突然辞めるなんてありえない事だと分かっているはずだ。ルカリオにも当然のように秘書はいるし、むしろ彼には数人の専属秘書がいるのだ。その内の誰かが突然辞めるような事があれば、彼の業務にもなにがしかの差し支えがあるだろう。だが彼はそれを想像しない。

いや。できないのだ。

「ともかくだ。マリア、君には僕と一緒に来てもらう。仕事はすぐにでも辞めてくれ」

「ルカリオ！」

もはやマリアには悲鳴めいた声を上げる事しかできない。

ルカリオは初めから聞く気が無いように、自分の言いたい事だけ

を口にしていた。

最初に頭を下げた事が嘘のように、ルカリオは自分の思うように物事を推し進めようとする。

ルカリオの事が理解できない。彼は一体、なんのつもりでここまで来たのか。

マリアは、不機嫌そうに顔をしかめているルカリオを、怯えながら見つめる事しかできなかった。

ルカリオは苛立っていた。

このルカリオ・アジャーニが頭まで下げて見せたのだ。さらに結婚という言葉まで口にして見せた。アントニオ・ガゼットなど足下にも及ばない自分の妻に収まれるのならば、彼女はすぐにでも頷くと思っていた。

だが、マリアは拒否した。アントニオに世話になっていると言っても。その瞬間、ルカリオの胸中には憎悪がわき上がった。

それはマリアに対してであり、同時にマリアのパトロンであろうアントニオに対してもだった。マリアはここに至って、まだ自分とあの男を天秤にかけるつもりなのか。

不愉快な感情は、そのまま表情と言葉にも表れていた。

秘書の仕事と言っても、どうせアントニオの個人的なパートナーを側に置くための方便だろう。ならば、仕事と言いながら何をしているのか分かったものではない。

そもそも、別の男と密通しながら、自分に妊娠したと言うような恥知らずの女が、仕事の責任などという言葉をお口にすること自体が、お笑いだった。

だが同時に、一つの案が浮かぶ。

「良いだろう、マリア。仕事があるから僕と来られないというのなら、君の仕事が無くなれば良いんだろう?」

「……ルカリオ? 何を言ってる」

「僕を甘く見ない事だ。ガゼット社なんて、アジャーニからすれば中小企業も良い所の、下請けの下請け程度だ」

「待って。なにをするつもり!?」

「選べ、マリア。僕と一緒に来るか。それとも」

叫ぶマリアに、ルカリオは微笑みを浮かべて見せる。その笑みは、仕事場で部下達が恐れているような類の物だということを、ルカリオは良く知っている。

「卑怯よ、ルカリオ! あなた、自分がなにをしようとしてるか分かってるの!?」

「僕は何も言ってるはいないよ。ただ君に僕と来るか否かを『選べ』と言っているだけだ」

唇をかみしめるマリアの横で、沈黙を保っていたリジー・ダーシーが手を上げた。

「良いかしら、ミスタ・アジャーニ」

その視線は蔑みを孕み、すでに絶対零度に近い物になっている。

「あなた、自分が今、脅迫をしているって理解している?」

「脅迫? 人聞きの悪い。僕はプロポーズをしているだけだよ」

鼻で笑うルカリオを睨み付け、リズはため息を吐いて見せた。

「もし本気で言っているなら、最低のプロポーズだわ。ルカリオ・アジャーニ。あなた、自分が拒否されたからってマリアから全部を奪うつもり？」

「……なんだって？」

「今のあなた、マリアに拒否された事が許せなくて八つ当たりをしてるようにはしか見えないって言ってるのよ」

「ハ！ 何をバカな事を。僕が八つ当たりだって？」

笑って見せたルカリオを、リズは呆れた表情で見ると頭を振った。

「駄目だわ、マリア。こいつ、本気で分かってない」

「……リズ」

「ともかく！ 今日にはもう帰って。マリアにだって考える時間くらいよこしなさい。本気でマリアを愛して結婚したいんなら！」

リズのその言葉に、ルカリオは息を呑み、渋々と頷く。

「……仕方ない。僕はそう長い間、この国にはいない。マリア。あまり僕を待たせないでくれ」

そう言うと、足早に家を出て行く。その後ろ姿を見送ったマリアとリズは、お互いに顔を見合わせてただ頭を抱えるのだった。

翌朝、マリアは寝不足の頭を抱えたまま出社していた。アントニオが怪訝そうな顔をしているのに気付いているが、素知らぬ顔でやり過ごす。

マリアの脳裏には「なぜ」という言葉が繰り返し浮かんできていた。昨夜あらわれたルカリオは、許しを請うた。そして結婚という言葉をお口にしました。けれどもなぜかマリアには、その言葉が欠片も嬉しくは無かったのだ。

感じるのは怒りでも恨みでもない。

なにも感じなかったのだ。

ルカリオに捨てられる前ならば、きっとその言葉に喜んで頷いただろう。心は幸福と歓喜に満ちていただろう。だが昨夜、ルカリオがくれた言葉は何一つ胸に響かなかった。

ルカリオへの愛は、まだある。この胸と、この身体に宿った命は今も彼を望んでいる。

だが彼の謝罪にも、結婚の申し出にも、マリアはまったく震えなかった。

だからこそ、断ろうとした。無論、あの時口にした言葉は嘘ではない。アントニオには世話になっている。一度は身勝手に会社を辞めた自分を、それでも受け入れてくれた彼らを、また裏切ることはいかないのだ。

だがルカリオはマリアの言葉をまったく聞いていなかった。

ルカリオにとって、マリアが断ろうとするなど予想の外だったのだ。

「……本当に、結婚したいって思っているの？」

知らずこぼれた言葉は、本心だった。

不愉快だった。

出張先の海外法人会社の会議に出席しながら、ルカリオは胸の内からわき上がる不快さを消すことができずにいた。

理由は昨晚のマリアの態度だ。彼女は自分の申し出を断ろうとした。

このルカリオ・アジャーニが頭を下げ、さらに結婚を申し込んだというのにだ！

それを、仕事をしているからだの、急に辞めることなど出来ないなどと言っている。そんな理由で自分の申し出を断ろうだなんて、彼女は一体何様のつもりなのか。

「所詮は欲深く愚かな女ということか」

自分という絶対的な庇護者の下にありながら、別の男をくわえ込むような女だ。

ならば、彼女が断れないようにすれば良い。

そうとも。アントニオ・ガゼットがそれほど良いというのなら、彼が居なくなれば良い。自分の力を見せつけ、アントニオなど足下にも及ばないと知らしめれば良いのだ。

女という物を信じるなど、ありえない。ルカリオはそれを若い時に知った。

一人の女性を強く愛したルカリオは、その女性との結婚を強く願った。

だが彼女はルカリオに身体を許しながら、それ以上を許さなかった。結婚を口にするたびに笑って流されていた。だからルカリオは、既成事実をもってそれを達成しようとしたのだ。

相手の都合などルカリオには関係無かった。彼女とて口では断っているが、アジャーニの後継者の妻となれるならば、最終的には喜んでくれるだろう。そう考えていた。

だからこそ、わざと避妊をせずにセックスをした。何度も、何度も。彼女はそのたびに困った顔をして、妊娠したらどうするのかと怒っていたが、ルカリオにしてみればそれは望むところだったのだ。だが、彼女は一度として妊娠しなかった。

だからこそ、ルカリオは健康診断にかこつけて彼女と自分の検査を行ったのである。

それは全て彼女には秘密裏に行うはずだった。

だがその結果を、彼女は偶然にもルカリオよりも先に見つけてしまっていた。

ねえ、ルカリオ？ 笑っちゃうわね。あなた、女性を妊娠させる事ができないんですって。

今でも思い出せる。彼女の唇があざ笑うように下弦の月を描いていた姿を。

今でも思い出せる。妊娠させようとわざと避妊具を使わずにセックスをしていた自分を馬鹿にする声が。

彼女は去っていった。ルカリオは彼女が手にしていた報告書を燃えさかる暖炉に投げ捨て、そして全てに蓋をした。

彼女がその後、どこぞの大公に見初められて結婚したと風の噂に

聞いたが、ルカリオはすでに身と心を鎧に包んだ後だった。最早女性に心は揺らされない。女など、所詮は金と地位があれば誰にでも股を開くような存在なのだ。

アジャーニの後継者を作ることのできない自分は、結婚などしない。そもそも、後継者など数多居る親戚の中から適任者を据えればそれで良いではないか。

ルカリオの女癖の悪さは、そこから始まった。一夜の恋人と逢瀬を交わし続け、そして自分の中の女性への蔑視を強化していった。

そんな中、彼はマリアと出会ったのだ。ルカリオの地位や財産を知ってもなお、ルカリオだけを見ていた。そんな彼女に、ほんの少しだけ心が揺れた。

だが、彼女は妊娠した。自分以外の男の子を。そしてそれをルカリオの子だと言って、自分を騙そうとしたのだ。

ルカリオが不意に手を上げ、会議の席で交わされていた言葉が停まった。

不意にシンとした空間で、皆がオーナーの言葉を待っている。

「……ルカリオ様？」

「契約の見直しをしてもらおう。そう。とりあえず、このガゼットとかいう会社については、全て契約を見直せ」

「お待ち下さい！ ガゼット社との関係は非常に良好です！

これを見直す理由がありません！」

ルカリオの言葉に、担当者が驚いたように声を上げる。だがそれをルカリオは睨み付けるだけで黙殺する。

「やれ、と言ったのだが？ 命令に従えないのであれば、我が社に
いる必要性は無いな？」

そして、最後通牒を突きつける。それだけで担当者は押し黙り、席に座り込む。会議の出席者の顔を見回し、ルカリオはただ微笑む。それはとても綺麗で、そして何も無い笑顔だった。

「は？ どういう事です？ 契約の見直し？」
「いえ、ですから！ 突然打ち切りだなんて、冗談はやめてくださいよ！」

ガゼット社のオフィスは今、騒然としていた。突如鳴り響いた電話。様々な取引先から一斉に、これまでの契約や取引の見直しを告げる電話がかかってきたのである。

いずれもが、契約の打ち切りを匂わせる物だった。そうではなくても、これまでは考えられないほどの譲歩を要求された。

「一体なにが起こっている？ 不渡りを出した訳でも、スキャンダルがあった訳でも無いというのに、突然」

アントニオが苛立った表情で電話をかける。それは取引の見直しを告げてきた会社の取締役への直通電話だった。

「お久しぶりです。ガゼットです。 ええ。先ほど報告を受けました。 一体どういう事なのか、ご説明をいただきたい。我が社に何か落ち度がありましたか」

アントニオの不機嫌な声があったのだろう。相手の答えにアントニオの表情が強ばった。

「本社の指示？ どういう事です。なぜそちらの本社 アジャ―ニが」

その言葉を聞いて、マリアの身体が強ばった。

アジャーニが本社の企業。その言葉だけで、マリアはこれが誰によって引き起こされたのかを理解した。

ルカリオだ。そう考え、マリアは身体が震えるのを止められなくなる。

彼はガゼット社を潰そうと考えているのだろうか。これほど突然契約が打ち切られてしまえば、会社の信用は失墜する。そこに理由が無くても、「契約を打ち切られる何かの理由」があると勘ぐられてしまえば株価の暴落はすぐに始まってしまっただろう。

会社で働く仲間達。突然辞めたマリアを、再び雇ってくれたアントニオ。それがマリア一人のために会社の存続すらも危うくなるなど、あつてはならないのだ。

「……ルカ」

「ともかく、一斉にこんな真似をされる覚えは、こちらには無いんです！ ちゃんとした説明を！」

電話口で言葉荒く交渉するアントニオを見、マリアは携帯電話を取りだした。

以前使っていた携帯電話は解約されている。だがアドレスデータは無事だった。だからこの電話には、ルカリオの携帯電話の番号もちゃんと残っている。彼が番号を変えていなければ、だが。

しかし。

マリアはほんの僅かの間逡巡し、そして通話ボタンを押す。

コール音が数回。そして音が切り替わる。

『やあ、マリア。そろそろ電話が来ると思っていたよ』

「ルカリオ……。どういっつもりなの」

『何がだい？』

耳元で囁かれるように、ルカリオの声が耳朶をくすぐる。ベッドで抱かれている間、この声で愛を囁かれるのが好きだった。

だが今、ルカリオの囁きはマリアの心を、毛筋ほども揺らさない。

「あなたの指示なのでしょう？ ガゼット社との契約の打ち切りを止めて」

「一体なにを言っているんだい？」

「……ルカリオ」

途方に暮れたマリアの声に、電話口のルカリオが満足げに喉を鳴らして笑っているのが聞き取れた。

「ともかく、こんな真似はすぐに辞めてちょうだい！」

「マリア。僕は君に選べと言ったはずだよ？」

「こんな真似をしておいて、選択肢を提示してるような言い方はやめて！」

「別に僕は構わないんだよ、マリア。放っておいても、君が退職するのはこの分では変わらないからね」

悦に入ったルカリオの声に、マリアは肩を落とした。

これ以上の選択肢は無い。このままでは自分のことでアントニオやマイク達に、大きな被害が出てしまう。それは絶対に避けなくてはいけない事だった。

友人としてアントニオは助けてくれた。本当なら見捨てられてもおかしく無かったのに。

では、自分もまたそうすべきではないだろうか。

心が揺れなかったのだとしても、ルカリオと結婚できる。このお腹の子供に、きちんと父親がいてくれるというのなら。

自分の心が納得していなくても、頷くべきなのではないか？

「……分かったわ。でもあと少しだけ時間をちょうだい」

「時間？ ああ、そうだね。身の回りを綺麗にしてもらわないとね」

ルカリオの言葉に言い返すことなく、マリアは電話を切る。そしてため息を吐いたのだった。

突然電話を切られたにも関わらず、ルカリオは満足げに微笑んで携帯電話のディスプレイを眺めていた。

これで良い。彼女はもう、こちらの手の内にある。

ルカリオはその手でインターフォンをつかみ取ると、支社の社長に向けてガゼットへの見直しを上方修正するように伝える。無論、支社の人間は混乱するだろうが、そんな事はルカリオの知ったことではなかった。

時間が欲しいと彼女は言った。それがアントニオ・ガゼットと別れるための時間なのだろう。ルカリオはそう考え、唇をゆがめる。

アントニオがまだマリアに近づくようなら、それは阻止しなくてはならない。アジャーニの花嫁として迎える以上、妙なゴシップは避ける必要がある。祖父 アンジェロの耳に入れば、この結婚を行う理由それ自体が失われてしまうのだ。

「……ああ、ルカリオだ。調査を依頼したい」

マリアを連れて帰った後も、アントニオ・ガゼットの周辺を見張っておく。そのための準備を終えると、ルカリオは満足げにソファに背を預けた。

「本気なの？ マリア」

「……ええ。アントニオにも、退職願いを出したわ。……怒られちゃったけど」

リズのアパートで、マリアは沈んだ表情のままマグカップを手立に立っていた。向かい側のソファには、リズが座ってじっとマリアの表情を見ている。

「あの男は、あなたの事を人形か何かだと思っているのかしら。今日のガゼットの株価が乱高下した理由が、まさかあの男のせいだなんて」

ガゼット社が突然、アジャーニ系列の会社から揃って契約を打ち切られそうになった。それはビジネスの世界では瞬く間に広まり、ガゼット社の株価は一時半値以下にまで落ち込んだ。だがそれは、その後再び広まった契約が上方修正で再締結されたという情報により、今度は倍近い値段を付ける事になったのだ。

事態が沈静した頃に、マリアはアントニオに辞意を告げた。

ルカリオと結婚する事を告げ、退職を願い出た。アジャーニの妻となれば嫌でもアントニオの耳にも届くだろう。だから隠す事はせず、ただ彼から結婚を請われたのだと告げた。

アントニオも、まさか今回の騒動がマリアへ圧力をかけるためだけに行われただなんて、考えもしなかったのだろう。突然の退職について、少々嫌みがましい口調で了解を告げられただけで、マリアは再び会社を去ったのである。

通っていた病院からカルテを受け取り、転院できるようにする。

細々とした物事を片付け、アパートへと戻ってみればリズが待ち構えていたのである。

「……マリア。私、あいつの事が信用できないわ」

リズの言葉に、マリアも苦い表情のまま頷くしかない。マリアとて、彼を信頼して良いのかどうか、分からないのだ。だがルカリオは目的を達するまで停まる事は無いだろう。なにが目的なのかは分からないが、自分と結婚すれば少なくとも友人や知人へ迷惑がかかる事はないはずだ。

それに、信じてはいないが信じたいとは思ってしまう。そんな自分がいる事を知っているマリアは、自嘲気味に笑う。

「……今の私を騙しても、ルカリオにはなんのメリットも無いわ。大丈夫よ、リズ。助けてくれたこと、本当に感謝してる。ありがとう」

そう告げたマリアに、リズはただ頷き返す事しかできなかった。

「ここに住むことになる。悪いが、僕はこれから会議がある。部屋の中はいじっていないから、以前のままだ。楽にしていってくれ」

マリアがルカリオに通されたのは、一年間を過ごしたマンションだった。

懐かしさすら覚える空間にマリアを通した後、ルカリオは早口でそう告げて踵を返す。

その背は、とてもではないが新婚の夫のそれとは思えない。

だがマリアは、それもやむなしと考えていた。

今、マリアの左手の薬指には指輪がはめられている。真新しい大粒のダイヤモンドの輝きは、マリアの趣味ではない。帰国したその足で連れて行かれた宝石店で、彼が選んだ品だ。彼女へ一言も確認せず、彼はそれを購入した。幸いサイズが合ったので、そのままはめて出てきたが、マリアに彼との結婚がどういう風に始まるのかを予感させるには十分だった。

さらに登記所へ連れて行かれ、ルカリオの秘書を立会人に結婚のための書類を提出した。

略式もいいところのそれに、マリアは不安を抱いていた。別に盛大な結婚式を挙げたかったわけではない。そう心に言い聞かせ、不安をなだめる。

だが帰国した足で結婚し、さらにマンションに一人で取り残されたことは、マリアの心を痛めつけるには十分だった。

のろのろと夕飯の用意を調えるも、ルカリオが難じに帰ってくるのかすら分からない。

いや。そもそも彼は、帰ってくるつもりがあるのだろうか。

どれだけ略式で簡素であったのだとしても、今日はルカリオとマリアが結婚した日だ。以前からベッドを共にしていたのだとしても、初夜すらないがしろにされる事は、マリアにルカリオの本心を想像させた。

結局のところ、彼は自分を愛してなどいないのではないか。

この結婚も、なにかの目的があつてのことではないのか。

あの夜、ルカリオが口にした謝罪も、実のところ本心ではないのではないか？

たった一人でマンションに取り残されると不安だけがわき上がってくる。指輪と登記所で受け取った結婚証明書だけが、これが夢ではないことの証拠だった。

ソファで膝をかかえて座り、自分のお腹を守るように小さくなる。まだ目立たない腹部は本当に妊娠しているのだろうか、そんな疑問すら抱いてしまう。けれど悪阻の兆候はあるし、医者からも順調だと告げられている。

ルカリオが忙しい人間だなんてことは、一年間過ごした中で知っていたはずだ。以前にもこんな風に、彼は自分を残して世界中を飛び回っていた。それでも不安に感じなかったのは、結局のところ彼の愛情を信じていたからだろう。

そして今、こんなにも不安なのは、彼の愛情を疑っているからだ。つた。

ルカリオが自宅マンションへと帰ったのは夜も遅く、すでに日付が変わった頃の事だった。

会議を終えて出張中に溜まった書類の決裁を済ませた頃に、友人

から誘われて夕食に出たのだ。そこで酒と料理を腹に収め、アルコールで酩酊した頭で部屋へと入る。

そこは電灯が点っていて、いやに明るい。アルコールで濁った頭のまま、いつもの週刊に従って冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、注いだグラスの中身を飲み干した。

「……………なんだ？」

そこで気付いたのは、ダイニングテーブルの上に置かれた皿だった。ランプをかけられ、冷め切っている。だがいずれも手の込んだ調理がなされた料理なのが見て取れた。

そして居間のソファの上で、丸くなりながら眠っている女性の姿を見つけた。

クッションを抱きしめ小さくなっているのは、マリアだ。どこか幼く心細げな表情で眠る彼女に、ルカリオは言いしれぬ苛立ちがわき上がった。

結婚式を挙げなかったのだとしても、略式もいいところで登記所で書類を提出しただけなのだとしても、今夜は初夜だった。なんの連絡も入れずに花嫁を放置し、友人と夕食を摂って帰宅した自分。自分が帰ってくるかどうかも分からないのに、夕食の準備をして待っていたのだろうマリア。

彼女の本性を知っていても、こんな風にされれば罪悪感の一つも湧いてくる。それが腹立たしい。まるでマリアが被害者のようではないか。自分こそが被害者だ。祖父のために意に添わぬ結婚までした自分こそが、アジャーニという巨大な家族への殉教者だ。

そう考えて怒りを湧き上がらせようとしても、こうしてソファで小さくなつて眠るマリアを見てしまえば、怒りは簡単に霧散する。
「くそっ」

思わず罵り声が漏れるが、マリアが起きる様子はない。

このままソファに置いておいては、風邪を引くかもしれない。妊

娠している状態で、それは望ましくないだろう。自分の子供ではないが少なくともアンジェロに『アジャーニの後継』として見せて彼を安心させるためにも、子供には健康に生まれてきて貰う必要がある。

ルカリオはマリアの身体を抱き上げると、ベッドルームへと運んだ。小柄で体重の軽いマリアだが、それでも抱き上げた彼女は数ヶ月前よりも軽く感じた。

本当に妊娠しているのだろうか。そんな疑問すら抱いてしまう。ベッドに寝かせ、布団をかぶせると彼女の目尻に触れた。

わずかに湿っていることに気づき、ルカリオは舌打ちをして部屋を出て行った。

マリアは浅い眠りの中で誰かが帰ってくるのに気付いていた。明晰化しない意識のまま、ぼんやりと薄目を開けて見ればそこにはルカリオがいた。

書類上、夫となったはずの男性。だが彼は酔っているようだった。一緒に暮らしていた頃も、彼は付き合いやパーティーで酔ったまま帰ってくるのが何度もあった。だからそれは別に珍しいことじゃない。マリアは痛みを告げる胸をなだめるように、心の中で繰り返す。

「くそっ」

自分を見下ろしたルカリオの罵りに、身震いしそうになった。眠ったふり続けながら、マリアはやはりそうなのかと、心中で嘆息する。

彼は結婚などしたくなかったに違いない。少なくとも、自分とはだからこそ、結婚式の当日に誰かと夕食を共にし、酔っ払って帰ってきたのだらう。もしかしたら帰ってきたくなかったのかも知れない。

どこかのモデルのガールフレンドとベッドを共にしたかったのかも いや。どこか別の女のベッドから帰ってきたのかも知れない。そこまで考えてしまえば、マリアにはもう目を開けてルカリオに「お帰りなさい」と告げる勇氣はなかった。

不意にルカリオの身体が、その体温を感じられるほど近くなる。抱き上げられたのだと理解したのは、ルカリオの使っている香水とアフターシェーブローションの香りを嗅いだ後だった。

ベッドまで運ばれ、布団をかけられる。そして、そっと目尻を撫でられた。

その感触で初めて自分が泣いていたのだと気付いたマリアは、ルカリオが立ち去るまで目を閉じて眠ったふりをする。

小さな舌打ちと共に人の気配がなくなり、ドアが閉まる音がした。それを確認してマリアはようやく目を開いた。

なぜ、結婚を望んだのか。

ルカリオの心が理解できず、マリアは枕に顔を埋めて声を押し殺した。

13 (後書き)

2	2	
0	0	
1	1	
1	1	
/	/	
0	0	
2	2	
/	/	
2	2	
2	1	
2	2	
3	3	
:	:	
1	3	
5	5	
誤字訂正	誤字訂正	

翌朝の目覚めは最悪だった。マリアは腫れぼったい目をそのままに、朝食の用意をするべくキッチンへと入る。そこで鼻をついたのは、コーヒーの芳香だった。

「……ルカリオ」

「おはよう、マリア」

そこにはスラックスにワイシャツ姿のルカリオが、陽光を背にして立っていた。片手にはコーヒーカップを持っている。

「ご、ごめんなさい。寝過ぎしちゃったかしら」

「いや。僕が早く起きすぎただけだよ。今朝は海外支社と早くからTV会議があるから、早起きしたんだ」

そう告げると、ルカリオはテーブルの上に置かれた皿へ視線を落とすとした。

「……すまなかった、マリア。せっかく料理を作って待っていてくれたのに」

「う、ううん。そもそも夕食がいるかどうか確認せずに、勝手に作った私が悪いんだもの。……あの、ルカリオは朝食は？ もう食べました？」

言葉を遮って続けたマリアに、ルカリオは苦笑を浮かべる。

「ああ、これを一皿貰った。美味しかったよ」

そう告げると、ルカリオはマリアの傍らに立ち、そつとこめかみにキスを落とす。

「……ルカ？」

「今夜はなるべく早く帰るよ。昨夜の分も合わせて埋め合わせをさせてくれ」

昨晚の罵り声と舌打ちを利用していなければ、この甘い声を簡単に信じただろう。けれどマリアは、昨夜の彼の様子を覚えていた。だからこそ、少しだけ戸惑ってしまう。

「あの……無理をしないでね？」

けれど彼に早く帰ってきてほしい、というのもまた事実だ。だからつい、そんな事を口にしてしまう。

ルカリオは一瞬驚いたように目を見開き、そして微笑む。

けれどその笑みは、マリアが見慣れていた素の笑顔ではなく、どこか取り繕われたものだった。

屋敷の寝室に運び込まれた医療機器。それに囲まれた祖父は、酸素吸入器をつけた状態で眠っている。ルカリオがマリアを迎えに行く前に、一時は昏睡状態に陥ったのだ。だからこそルカリオは、強引な手段でもって彼女を連れ帰ったのである。

祖父の容態が安定するまで、結婚を公表するつもりは無かった。

結婚とて役所で書類を提出しただけ。立会人も信用のおける秘書である。

だがアジャーニの花嫁には、莫大な財産が与えられる。マリアとて、彼女に渡されたクレジットカードは限度額無しの代物だ。引き落としはルカリオの個人口座からになっている。それを渡せば、マリアはきつと浪費でもってその本性を明らかにするだろう。そう思っていた。

ルカリオは花嫁に期待をしていなかった。だが、花嫁も自分に期待をしていないらしい、という事によろやく気付いたのは、結婚して一週間が過ぎた頃だった。

マリアは自宅を綺麗に整え、食事の用意をする。いつ帰っても散らかっていない部屋で、ルカリオはマリアと食事をしたのがいつ以来だろうかと考えてしまう。

初日の夜は、自分が酔って忘れてしまった。翌日の夜は早く帰ろうとしたが、海外で起きたトラブルの対処のため現地に向かわなくてはならず、結局約束を反故にした。そのまま三日間を海外で過ごし、帰ってきたのが一昨日のことだ。夕食をよろやく共にしたが、会話らしい会話もなく、淡々と時間を過ごした。おそらく今晚もそうだろう。

マリアは家を整える。ルカリオが生活するうえで、面倒な家事の一切を彼女が片付けているのだ。だがそれは、ハウスキーパーの領分だろう。ルカリオは別に彼女を家政婦にするために結婚したわけではない。

そこまで考えて、では何を目的としたのかを考えて洗面が浮かぶともあれ、祖父の前でぎこちない空気になるわけにはいかない。少しはマリアとの関係を打ち解けたものにする必要はある。

ルカリオは長々と延ばしていたが、マリアを抱くつもりになっていた。実際、彼女との身体の相性は抜群だったのだ。ルカリオに抱

かればマリアはすぐに燃え上がり、あっけないほど簡単に絶頂を迎える。震えながら涙を浮かべ、すがりついてくる彼女はたまらなく魅力的だった。

彼女がどれほど愚かで恥知らずな女なのだとしても、ベッドの上での彼女は別だ。

そう考えて、ルカリオは夕食のための店を予約するよう、秘書に連絡を入れた。さらにマリアの携帯電話へ電話をかける。

『……はい？ あの、ルカリオ？』

「ああ、僕だよ。奥さん」

『どうしたの？ 突然』

「今夜の夕食の準備はいらなくて、連絡をしようと思ってね」

突然の電話に怪訝そうだったマリアが、電話の向こうで息を呑む気配が伝わってきた。

『あの……分かったわ。ありがとう、連絡をくれて』

声はわずかに震えている。それでも礼を言うマリアに、さらに言葉を重ねた。

「今晚は外で食べようと思うんだ。十九時には車をよこすから、用意していてくれ」

『え……？ あの……ルカ？』

「結婚してからこっち、ろくなデートもしていないからね。君の好きだった店を予約したんだ。どうかな？」

電話の向こうでマリアが逡巡する気配が伝わる。ルカリオはなぜか、彼女が頷いてくれるように祈る気持ちで、じっと待っていた。

『分かったわ。ドレスコードは？』

「気取りすぎない程度で。大丈夫。アルマンの店だよ」

『……そう。じゃあ、十九時に』

そう言っただけで電話を切ったマリアに、なぜだかルカリオはため息をついてしまった。

マリアは渡されたクレジットカードを、まだ一度も使っていないようだった。

というよりも、まだ一度も外出をしていないのだ。彼女がアジャーニの花嫁という立場を得た以上、パパラッチや犯罪者に狙われる可能性はゼロではない。だから彼女にもボディガードがつけられている。そして彼らは、ルカリオにマリアの日常を全て包み隠さず報告する役目も負っていた。

だが彼らから提出されるレポートの内容は、この一週間同じ内容だった。

マンションからは一步も出ない。誰かを招く様子もない。

ただじつと息を潜めるように、あのマンションに籠もっている。

それはまるで、ルカリオの彼女の存在を公にしたくない、という内心を理解しているかのように。

少しばかり、昔を思い出すのは悪い事じゃないだろう。

ルカリオはそう考えながら、意識を仕事へと向け直したのだった。

マリアはマンションの自室で、じつと鏡の前に立ち尽くしていた。メイクも済ませ、着替えも終わっている。今着ているのは、半年ほど前にルカリオが買ってくれた有名ブランドのドレスである。こんな高価な物を着ていくような場所がない、と固辞したマリアに、ならベッドでそれを脱がすのを楽しませてくれればいい、などと答えたのを思い出す。

意識しすぎだと思うが、これを着ていることでルカリオに妙な思いを抱かせるのではないかと不安になったマリアは、やはり別のドレスにしようかとクローゼットを開いた。

だが時計の針は迎えが来る時刻をそろそろ指し示しそうであり、これ以上は時間的にも無理だろう。そう考えてマリアはため息を一つ吐く。

不意に気配を感じ、マリアは顔を上げる。振り返ったマリアの目には、ドアの所にたたずむルカリオが映った。

「……ルカリオ」

「これはこれは。よく似合ってるよ、奥さん」

腕組みをして壁にもたれかかっていたルカリオが、ゆっくりと近づいて来る。その姿がどこか獲物を狙うライオンのように思えて、マリアは無意識に後ずさっていた。

「あの、あなたが迎えに？」

「ああ。何か疑問が？」

「いえ……。誰か、他の人を使いによこすのだとばかり思っていた

ものだから」

そう口にしたマリアは、困ったように眉を寄せて笑う。それを見てルカリオは言いしれぬ苛立ちが湧き上がった。

「どうして？ 僕は自分の妻を食事に誘ったんだ。僕が迎えに行くのが当然だろう？」

すぐ傍らに立って手を差し出すルカリオ。その手をおずおずと掴むマリアは、困り顔のまま微笑む。

「そう。そうね。……ごめんなさい。あまり外出して食事って、慣れていないものだから」

そう言っつてルカリオの視線を避けるように、マリアは俯いた。

「行きましょう？ アルマンのお店も久しぶりね」

そして次に顔を上げた時には、朗らかに微笑んで見せる。その表情の変化に、ルカリオは息を呑んだ。

彼が知っているマリアは、いつでもこの笑顔を浮かべていた。

その前まで見せていた戸惑いや憂いといった物が、一切消えている笑顔にルカリオは困惑する。だがすぐに気を取り直し、マリアを促して部屋を出た。

「やあ、久しぶりだね、お二人さん！」

アルマンは陽気な中年男性であり、その陽気さはマリアにとって懐かしさすら感じさせてくれた。彼はルカリオとは少年時代からの幼なじみであり、アルマンが現在の店を開いた後も、ルカリオがアジャーニの会長となった後も、頻度は減ったとはいえ親交を重ねている仲だった。

マリアもまた、ルカリオと同居するようになってから何度か連れてこられている。自分のパートナーだと紹介するたびに、アルマンはルカリオを頼むと器用にウインクしてみせてくれていた。

アルマンが通してくれたのは店の奥まった場所にある別室で、他の客には見られないようになっていた個室だった。そこに通された事にマリアは戸惑い、思わず足を止めて振り返ってしまった。

背後に立っていたルカリオは、気むずかしい表情のまま進むように促してきた。

「……………あの、ここなの？」

「ああ。久しぶりだし、君とゆっくり静かに過ごしたかった。なにせここ数日、満足に家に帰ってすらいなかったからね」

そう言われれば、だったら部屋で二人きりで過ごしたほうが良かったんじゃないか。そう考えてしまうマリアである。

とはいえ、こうして食事に誘ってくれたのもルカリオなりの気遣いなのだろうと考え、「そうね」と頷き返すのが精一杯だ。

ルカリオは答えにほんの僅かな間が空いた事に気付かなかったように、マリアを席に座らせると自分も席に着く。

「ワインでいいかい？」

ルカリオの問いに、マリアは困ったように首を横に振った。

「あの、妊娠しているからアルコールは避けてるの。ミネラルウォーターか、ジューズを」

「……そうか。じゃあすまないが何かジューズを。それと僕には、いつものワインを」

ウェイターが頷いて立ち去ると、ルカリオはまじまじと目の前に座るマリアを見下ろした。

ほっそりとした　というよりは、痩せぎすな身体に身につけたドレス。確かに痩せたが、それでもまだルカリオは性的な興奮を引き起こされていた。あらわになつた胸元は、妊娠のせいか膨らんだのかも知れない。まだ味わっていないが、彼女の身体を味わい尽くしたいという欲望は、マリアを部屋へ迎えに行った時からずっと彼の中で暴れ回っていた。

ルカリオの無遠慮な視線に気付いたのだろう。マリアが気まずげに身じろぎする。タイミング良くワインとジューズを運んできたウェイターに視線を移し、ルカリオはグラスを掲げた。

「では乾杯しようか」

「……何に？」

そう問い返すマリアの表情は、まだ冴えない。それを気付きながら、ルカリオはグラスの中のワインに視線を落とした。

「今、僕らがこうしてここに居ることに」

一度はマリアを追い出した自分が、そんな事を口にするなど皮肉以外の何物でもないだろう。ルカリオはそう考えて唇をゆがめる。そしてマリアもまた、その言葉にびくりと身体を震わせていた。

だがそれはルカリオが思っているような理由ではなく、ただただひたすらに、彼が何を考えているのかが分からない、という理由からだった。

不意に優しくされる。その時には、言葉を尽くして愛していると囁かれる。だがその割に、彼はまだ一度も自分を抱こうとはしない。妊娠初期で安定しない事を気にしているのだろうか。だがそれならそれで、意思を示して欲しい。結局のところ、マリアの考えはそれに尽きていた。

しばし久方ぶりのアルマンの料理を堪能した二人だが、食卓に会話らしい会話は無い。時折交わされるのは、仕事がどうの、天気がどうのといった世間話程度のものでしかない。

そこでルカリオは抱えていた案件を、ここで話す事にした。

「……ああ、そうだ。君には僕の祖父に会って貰う」

「お祖父さん？ ルカリオの？」

「ああ。アンジェロ・アジャーニ。今は本家の屋敷にいるよ」

「お体の具合は良くなられたの？」

マリアの言葉に、ルカリオは首を傾げた。なぜ今の話で、そんな話になる？

「だって、あなた、一年間もいたのに私には一度も会わせようとはしなかったでしょう？ だから病気か何かで人に会わせたくなかったのかと思って……」

ルカリオの表情を読んだマリアの答えに、成る程と頷いたルカリオは、けれども顔を顰めた。

「いや。残念ながらその逆だよ。祖父の具合はどんどん悪くなって

いる。……だからこそ、今のうちに会わせておきたい」

その言葉はマリアにとってはある種の福音に聞こえた。

アンジェロ・アジャーニは現在のアジャーニ一族の隆盛を作り上げた稀代の企業家である。つまるところ一族の中でももつとも発言権のある人物だ。そんな人物に、自分を会わせてくれるというのなら、ルカリオは少しは自分を信用してくれているのだろう。

そう考えるマリアは、ルカリオがじつと自分を推し量るような目で見ていた事に、気付かなかつた。

#15 (後書き)

2011/02/24 21:51 誤字訂正

#16 (前書き)

ズミズミーンンのおわらじがぬりまのぶ、じ注意トネゴ。

料理に一通り口をつけ、残るはデザートという所でコック姿の男性が一人、ルカリオとマリアの居る個室へと入ってきた。

「やあ、お二人さん。最近はお見限りのようだったが料理の味はどうだったかな？」

デザートのケーキを乗せたトレイを押し入ってきたアルマンに、ルカリオがほっと笑う。

「ああ、美味かったよ」

「ええ、とても美味しかったわ。デザートも楽しみ」

微笑むマリアに向けてにっこりと笑いかけたアルマンはデザートを切り分けてマリアの前に置く。

「それにしても一体どうしていたんだい？」

「え、ええ……。ちよっと体調を崩していたものだから」

「大丈夫なのかい？」

アルマンがぎよろりと目を剥いてルカリオを見る。それにルカリオはただ頷いて答えた。

「ああ。そうじゃなきゃ、連れてはこないさ」

「……ふうん。まあ、治ったんならそれで良いけどさ。あ！もしかして子供ができたとか!？」

冗談めかして笑うアルマンに、けれどマリアは一瞬顔を強ばらせ

た。

すぐにそれを取り繕い、マリアは苦笑う。

「そうね。最初はそれも疑ったんだけど」

肩をすくめたマリアに、アルマンはにやりと笑った。

「惜しいね。子供ができていれば、さすがのルカリオも結婚に同意してくれただろうに」

アルマンの言葉には、1%の悪意も混じってはいなかった。彼はこれまでルカリオが連れ歩かなかったタイプの女性であるマリアをひどく気に入っており、早くこの友人が結婚すればいいのに、としつこく口にしてきたのだ。

「お前も早く結婚すれば良いのに。嫁は良いぞ、嫁は」とは、既婚者であるアルマンの言葉である。以前のルカリオは、彼がそう言うたびに苦い表情で話題を変えていた。

それがアルマンには、じれったかったのだろう。

だが、現状のルカリオとマリアは、すでに法的には夫婦である。けれどマリアはそれを口にする事ができなかった。なぜかルカリオがそれを望んでいないように感じられたからである。

「……ふん。そうかもな」

実際、ルカリオはコーヒークップに口をつけながら、短く鼻を鳴らしただけだった。

マリアは苦い笑みを消して表情を切り替える。ケーキを口に運びながら、できるだけ楽しんでる表情を作り出す。

「そうね。見てよ。倒れてる間にこんなに体重落ちちゃったんだから。美味しい料理で少しでも戻さない」と

痩せた腕をアルマンに見えるように持ち上げる。

確かにマリアの腕は自分で言ったように、やせ衰えていた。柔ら

かさやふくよかさなどない。触ればすぐに骨に届きそうなほど細く
なっている。

「確かに。よし、これはサービスだ」

頷いたアルマンが、ケーキをもう一切れマリアの前に差し出した。
「これを食べて前のマリアに戻ってくれ。俺はあんたの事が、嫁の
次に気に入っているんだから」

「ふふ。ありがとう」

微笑むマリアに、アルマンも笑い返す。

だが不意に咳払いが聞こえ、マリアは視線を目の前に座っていた
男へと移した。

ルカリオが不機嫌そうに自分を睨んでいるのに気付いて、マリア
は何か失敗しただろうかと自分の行動を振り返る。

だが、何も思いつかない。訝しげにアルマンへ視線を移せば、彼
はニヤニヤと笑ってルカリオを見ていた。

「料理長がいつまで油を売っている。さっさと厨房へ戻るんだな」

「はいはい。分かりましたよ」

肩をすくめたアルマンが個室を出て行く。出がけにしっかりと「
それじゃあ、また」とウイंकをしていくのに、マリアは思わず笑
ってしまった。

気詰まりのするほど沈黙があった個室だが、アルマンのおかげで
少しでも空気が緩んだ。そう感じてマリアはほっと息を吐く。

だがルカリオは、そんなマリアをじっと見つめていた。

目の前でため息を吐いた女を、ルカリオはじっと観察していた。アルマンが部屋に入ってきた時、ルカリオは MARIA が結婚した事を告げるだろうと思っていた。少なくとも「子供ができていれば」という言葉が出た時には、MARIA が妊娠を告げるだろうと思っていた。

だが彼女は口にしなかった。
なぜだ？

疑問は消えない。アルマンはルカリオにとっては古い友人である。別段ルカリオに対して強制力がある存在ではないが、彼が認める人間の一人ではあるのだ。

アルマンが結婚を知れば、恐らくはこの街に住むルカリオの知り合いにすぐに広まっただろう。それはMARIA も良く知っていたはずだ。

「……MARIA。そろそろ帰るかい？」

痩せたとはいえ、彼女はひどく魅力的に見えた。

不意に口をついて出たのは家に帰ろう、という言葉。虚を突かれたのが驚いた顔をしたMARIAは、コクリと頷いて見せる。それは幼子のような稚い仕草で、彼女の清楚さを際立たせる。

「では、そろそろ帰ろうか」

MARIAの手を掴んでエスコートしつつ、ルカリオはこの後の事だけを考えていた。

マンションに帰ったルカリオは、掴んだままだったMARIAの腕を引いた。

戸惑った表情のMARIAがされるがままに、ルカリオの腕の中にその身体を収めた。ほのかに薫る香水。髪に顔を埋め、キスを落とす。

「あの……ルカ？」

戸惑った声で確かめるように自分に触れるマリアに、ルカリオは知らず唇の端を上げていた。

薄いドレスの上からマリアの身体をなぞる。ぶるりと震えたマリアは、ぎゅっとルカリオにしがみついた。

いつもの事だ。マリアは本当に簡単に燃え上がる。ルカリオの指先だけで、幾度となく達するのだ。驚くほど敏感な身体を持ち主である彼女は、けれども性的な事柄にはひどく無垢だった。

だから彼女の反応は全て自分が一から仕込んだ物。そう考えていたルカリオにとって、彼女の身体を別の男が共有していたという事実は、酷く不愉快な物だった。

現在の彼女には常に監視が付いており、男と会うような事もない。つまるところ、現在の彼女は髪の手から足の先までルカリオだけの物だった。

ベッドに横たえられたマリアが荒い息で胸を上下させるのを見ると、それだけでルカリオは興奮していた。

「マリア……」

「あ、あの、ルカリオ……！」

考えてみれば、結婚してから初めてベッドを共にするのだと気付いたルカリオは、マリアの半開きになった唇に吸い付いて笑った。

「今晚が僕たちの初夜だな」

マリアの体に負担をかけないように気遣いながら、ルカリオは彼女の身体に没頭するのだった。

#16 (後書き)

これくらいならR15で収まるでしょうか……。
恋愛ジャンル日間ランキング47位に瞬間的にですが食い込んでい
ました。
ありがとうございました。

ぼんやりとしたまま暖かい布団に包まれている。意識は未だ明らかにならず、ただこの心地よい場所でまどろんでいる。そこに眠っているだろう愛しい男に触れたくて、無意識に手が探る。だがそこにあるだろう硬い肉体に触れることなく、手はただ冷たいシーツの上を這い回る。

「……………」

カーテンが引かれた薄暗い寝室で、マリアはゆっくりとまぶたを押し開けた。

乱れたシーツはそのまま、そこに誰かが眠っていた痕跡はある。だが、そこにあっただろう温度はすでに失われ冷め切っていた。

「ルカ……?」

マリアは上半身を起こし、部屋を見回す。

はらりと落ちたシーツの下に何も着ていないことに気が付き、誰もいないにも関わらずマリアは赤面してしまった。

シーツを身体に巻き付けて立ち上がると、裸足のままでリビングに出る。

だがそこにも、人の気配はない。わずかに残ったコーヒーの香りだけが、ルカリオが居たことを示しているようで、不安が湧き上がった。

一通り部屋を見て回り、ルカリオがいないことを確認したマリアは、ひとまずシャワーを浴びてさっぱりする事にした。そしてゆっ

くりと朝食の用意をする。

「……そうよね。別に、こんな事は前にもあったわ」

コーヒを淹れながらマリアは、誰にともなく呟く。

他に人のいない部屋は広すぎて、マリアは居心地の悪さを感じていた。それは一年間暮らしていた間にも、何度となく感じたものだけれどそのときは、ルカリオに抱かれれば収まった。彼と共にいられるなら、どこでも良かった。たとえダウンタウンのボロアパートだったとしても、きつと幸せだろう。

なのになぜ。

今、こんなにも物質的に満たされ金銭的に満たされ、妻という立場を得ているのに、寂しさを感じるのか。

「……贅沢よね。そんなの」

お腹の子供はきつと、恵まれた環境で育つだろう。母子家庭で育つよりも、きつと良いはずだ。アジャーニの後継者として、きつとルカリオも子育てには何か思い入れだってあるはず。何よりも母親と父親が揃っている安定した家庭環境は、子供の養育には最善のはず。そう考えても、彼が本当にこの子を望んでいるのか、実感できないでいる。

彼はことある事に愛を囁く。まるで義務のように。

マリアは、それを不安に思う心を停めることができなかった。

「え？　これから？」

掃除を済ませたマリアが受け取った電話は、ルカリオからだった。置き去りにした事については何も言わず、ただ祖父の家へ向かうことを短く伝えられ、マリアは慌てて着替えるために自室のクローゼットをかき回しだした。

今着ているのは、着古したシャツとジーンズである。部屋の中で誰と会うわけでもなく、家事をするには十分な格好だ。だが、初めて会うルカリオの親戚　しかも彼が敬愛すると常々口にしていたアンジェロ・アジャーニと会うというのなら、これでは失礼にあたるだろう。

とはいえ、華美な格好をするつもりも無かった。ドレスを着て会うなんて、マリアには想像もつかない。

なんとか整えたのは、ブランド物のスーツだった。これなら失礼にも当たらないだろう。そう考え、化粧を直す。

香水は少し考えて、控えめのものをわずかに吹き付けて終わらせた。

「……これでよし」

鏡の中には痩せたとはいえ、少しは数ヶ月前に近づいた自分が見える。

決して幸せそうに見えない自分に　なぜ、そう思ってしまったのか分かっていても　微笑んでみせる。

自分は幸せなのだ、心に言い聞かせる。

ルカリオの考えが分からない。彼が何を望んでいるのかが分からない。

だが今、自分は彼の妻という立場にある。ならば、その立場に相応しい振る舞いを。

鏡の中の自分が笑う。それはマリアにとって、最善の笑顔だと信じたかった。

ルカリオが前を歩く。綺麗に整えられた廊下は、品の良い調度品が飾られている。

いずれもが高価な品なのだろうと想像はつくが、かといって過ぎた金満家のような下品さは無い。

広い背中を揺らしながら歩くルカリオを見、マリアは少しあけ足を速めて彼の側に並ぶ。

ルカリオを先導して歩くのは、白髪をオールバックのまとめ、さらにアイロンのきいたお仕着せの衣装をまとった執事である。

彼はマリアを見て僅かに眉を動かした後は、その職務に忠実に沈黙を守った。

好奇の視線もなく、役目を守るように廊下を歩く。そして廊下の突き当たりに、その部屋はあった。

「旦那様。ルカリオ様がいらっしゃいました」

老執事がドアをノックし告げる。室内から「入れ」と短い応えがあり、老執事はドアを開けた。

「失礼します、お爺さま。ご気分はいかがですか？」

ルカリオが室内に入ると、それだけで部屋が狭くなったような圧

迫感が生まれる。そしてその視線の先には、広いベッドに埋もれるように一人の老人が横たわっていた。

かつてはルカリオに負けぬ美丈夫であっただろうと思わせる、大きな体躯。それに、皺を刻み年老いたとて分かる整った顔立ち。

それがアンジェロ・アジャーニ。アジャーニ一族の前当主であり、ルカリオの祖父だった。

「……今日はずいぶんとマシじゃよ。それにお前が珍しく客を伴っているのだ。いやでも気分は良くなるさ」

低く響く力強い声は、ルカリオに似ているように感じた。

「それで？ 儂に紹介はしてくれんのか？」

だが不意に向けられる顔はおどけた表情で、どこか笑みを誘う。

マリアは微笑んでルカリオの隣に並び、一礼した。

「初めまして。私はマリア」

そこでちらりと隣に立つ男を窺う。するとルカリオが腕を伸ばし、マリアの肩を抱いた。

「彼女はマリア・アジャーニ。……僕の妻です」

「なに？」

キョトンとしたアンジェロが、ルカリオとその腕に抱かれるマリアを見比べる。

顔を赤らめ、恥じらうようにルカリオから離れようとしているのを見て、それが嘘ではないと理解したようだった。

「妻……だと？ 結婚したというのか？ お前が？」

「ええ」

「この私を結婚式に立ち会わせることなくだと？ どういうつもりだ、ルカリオ！」

激しく感情を揺らしたアンジェロの声に、ルカリオはゆったりと微笑んでみせた。

「いえ。結婚式は挙げていません。お爺さまが意識不明になっていた間の事ですし、ひとまず登記所で」

「……歴史あるアジャーニの当主が、登記所で結婚などと……」
ぐずぐずと文句を呟くアンジェロに、ルカリオはただ肩をすくめて見せた。

「……まあ、良い。それで、彼女がお前の妻なのだな？」

「ええ。マリア？」

ルカリオが促すように、マリアの背を押す。それに応え、マリアは一步踏み出した。

「改めて、初めまして。ミスター・アジャーニ。私はマリアです」

「ほう、美人さんじゃな。僕のことはアンジェロと呼んでおくれ」

そしてマリアの手を取り、握りしめる。

「分かりました、アンジェロ。よろしくお願いします」

その手の温かさにマリアはどこか張り詰めていた物が緩むのを感じた。

#17 (後書き)

2011/02/28

22:54

一人称修正

マリアの手を握ったまま放さないアンジェロを見下ろし、ルカリオはなぜか湧き上がる苛立ちに戸惑っていた。

だがこうして喜んでいる祖父を見るのは、ルカリオにとっても喜ばしい事に思える。

「……それにお爺さま。もう一つ、ニュースがあるのです」

「なんだ？ これ以上の激しいニュースは、僕の心臓に良くないぞ？」

そんなアンジェロの物言いに、マリアは思わず笑みを漏らしてしまふ。

ルカリオも同じように微笑み、祖父の側に膝をつく。

「彼女は妊娠しているんです」

その言葉にアンジェロはハツとした顔になった。ルカリオを見て、そしてマリアへと顔を向けた。その視線に、マリアは頷き返す。

「本当に……かね」

「ええ。本当です」

マリアの肯定に、アンジェロの表情が輝いた。

「では 本当にそうなのか。ひ孫が 次代のアジャーニが。お、神よ」

震える手でアンジェロはマリアの手を強く握りしめた。

そして何度も何度も、上下に振る。

「ありがとう、マリア。ありがとう」

「あの……いえ。私は」
「ルカリオ。お前もようやく私の言う事を聞き入れてくれた訳だな！ 次代のアジャーニを儂に見せてくれるという約束を果たしてくれるのだな！」

その言葉にルカリオは僅かに顔を顰めた。

そしてマリアは、その言葉に身体が震えた。

「お爺さま。あまり興奮なさるとお体に障ります。今日はひとまずこれで下がりますので、また後日」

「……ルカリオ。……そうだな。少々興奮しすぎたか。マリアと言ったね。明日、また来ておくれ」

「あの……アンジェロ？」

「色々と話も聞きたい。それに、アジャーニの妻として知っておかなくてはならない事もあるしな」

そう好々爺のごとく笑うアンジェロに、マリアもおずおずと笑い頷いた。

帰りの車で二人の会話は無かった。

マンションの前で車が停まり、マリアはどうすべきかをまだ悩んでいた。だがそんな彼女に、ルカリオが声をかけた。

「僕はこのまま仕事に戻る」

「あ……ええ。あの……良いかしら。私がアンジェロを訪ねても」
「構わないよ。今のお爺さまには、君の存在が生きる理由になっ
ているらしい」

そう告げたルカリオはマリアを見ることなく、車を出すように運転手に告げる。

車を見送ったマリアは部屋へ戻り、ぼんやりとソファに座り込む。頭の中では自分を見なかったルカリオと、そしてあの時アンジェロが口にした言葉が繰り返し鳴り続けていた。

次代のアジャーニを儼に見せてくれるという約束を果たしてくれるのだな！

約束。次代のアジャーニ。祖父の生きる理由。

この結婚の目的が理解できた気がした。

ルカリオは理由は定かではないが、他人の子供と思っているお腹の子を祖父にひ孫として見せるために、自分をここに連れてきたのだろうか。

だから自分に頭を下げて見せ、連れ帰ったくせに結婚は略式も良い所で済ませた。さらに家に寄りつかず、自分に気を許そうとはしない。

彼が囁く愛が、なぜああも空虚に響くのか。そして、彼が自分に対して向ける敵意の欠片。

彼はきつと、まだ自分を疑っている。そう気がついていたのに、気付かないふりをしていた。目を背け、これが幸せのための道なのだ、繰り返した。

けれども ああ、けれどもマリアは理解してしまっていた。

アンジェロの屋敷からの帰り道、ルカリオが無言だった事も、それを後押しした。

彼はきつと気付いただろう。マリアがそれに気付いたという事に、それでも彼は何も言わなかった。言わなかったのだ。

それは彼が理解していたから。

たとえマリアが真実に気付いたのだとしても 今の彼女には、もうルカリオから逃れる事はできないのだと、マリアが知っているのだと。

お腹の子供のために。

あれほど喜んでくれたアンジェロのために。

マリアは、彼のもとを去る事ができない。

「……ああ、本当に」

彼は残酷だ。愛しく思えば思うほどに、その愛はマリアを傷つける。まるで心臓深くに突き刺さった荊のように。それでも、離れられない。この自分の愚かさ、マリアは堪らなく苦しかった。

「やあ、マリア。今日も来てくれたのだな」

「ええ、お邪魔でなければよろしいのですけど」

「邪魔なものか。君が来てくれるようになってから、私の体調も良くなっている一方だよ」

あの初対面の日からマリアの日課に、アンジェロの屋敷を訪れる事が加わった。

マンションからそれほど離れていない事に気付いたマリアは、徒歩で訪れるようになったのである。

執事と挨拶を交わしアンジェロの部屋へ入る。

そこでは待ち構えていたアンジェロが、目を輝かせて彼女を迎え入れてくれる。

この屋敷はマリアをルカリオの妻を歓迎した。最初こそ、この馬の骨かも知れない自分を拒絶するかも知れないと不安に思っていたが、今ではそんな不安も無い。

そしてそれは、アンジェロの屋敷にいる人間にとっても同じだった。

ルカリオが連れ歩く女性は、いつだって最高のプロポーションとセックスアピールの持ち主であり、そしてそれだけだった。

ゴシップ誌のトップを賑わす写真は、いつだってそんな女とばかり写っていたのだ。

だがマリアは、そんな女達とはまるで違っていた。

普段着はあくまで活動のしやすさを目安に選んだように見える。まだお腹が目立っていない事からマタニティ姿という訳でもなく、ゆるめのパンツ姿で訪れるのだ。

そして、屋敷の用人にも丁寧に接する。ルカリオの妻として、用人にはあまり謙った態度を取るべきではないと告げた老執事に、苦笑と共に頷いて見せたほどだ。

そしていつもアンジェロの体調を気遣っている。

少しでも具合の悪そうな素振りがあれば、すぐに休ませ医師に相談している。そんな彼女を、屋敷の人間が受け入れないはずがなかった。

「では今日はそうさな。儂が若かった頃の話をしようか。あれはまだ儂が駆け出しの頃の事じゃった」

老人の回顧話を楽しげに　いや、事実楽しんで聞いているのだろつ。

マリアの表情に偽りはない。

そのことに深く感謝しながら、老執事は一つの問題に頭を悩ませていた。

ルカリオが訪れないのだ。今や彼はアジャーニの当主として様々な仕事を抱えて忙しい事は理解できていた。その代わりといってはなんだが、妻のマリアが足繁く通ってくれている。けれども、以前ならば数日に一度は足を運んでいたルカリオが、ぱたりとその訪問を止めてしまったのは、一体どんな理由があるのか。

老執事は嘆息を漏らしながらも、沈黙を守る。

なぜならば、自分の主は今、これまでに無いほどに希望に満ちている。

あれほど望んだルカリオの妻。そしてその彼女は、彼のひ孫を妊娠している。

生まれるまでは死ねない。夜に部屋を訪れた自分にそう漏らした
アンジェロは、今は楽しげに若い頃の武勇伝を話している。

願わくば、あの女性が幸せであるように。

老執事は、ただそう願うだけだった。

「……今日も行ったのか」

ルカリオは苛立っていた。マリアをアンジェロに引き合わせて以来、祖父は彼女を猫かわいがりしていた。毎日のようにマリアは彼を訪ね、午後を共に過ごしている。そして夕方にはマンションに帰ってきて、食事の用意をしているようだった。

ボディガードから上がってきた報告書では、彼女の生活パターンにアンジェロの屋敷を訪ねるというルーチンが一つ追加されただけだった。それ以外では変わりはない。

渡したクレジットカードは未だ使われた形跡もない。

他の誰かと接触を持った様子もない。電話の通話履歴からもそれは確かだ。

あのリジー・ダーシーとすら、まだ連絡を取っていない事は、むしろ驚きだった。

マンシオンと屋敷との往復。それだけが彼女の日常だという報告書は、ルカリオの心にさざ波を立てる。まるで当てつけるようなその行動。

それに、アンジェロに自己紹介をしようとした時、マリアは自分との関係を口にしようとして躊躇した。なんと云うべきか、自分を見た。

あの時、彼女はウォートン姓を名乗ろうとしたのではないだろうか。

自分の妻として法的にも認められているというのに、彼女はそれを自覚していない。

お腹が大きくなってきた事もあり、セックスは控え気味になっている。けれども、ルカリオが触れれば、マリアは火が付いたように

官能に悶えるのだ。

そんな彼女は未だアジャーニの妻という立場を、理解していない。これで彼女が浪費でもしてくれたなら、なんの憂いもなく計画を進められるというのに。

ルカリオは険しい顔をしたまま、書類をシュレッダーに放り込んだ。と、不意に声がかけられる。

「どうしたの、ルカリオ？ そんな怖い顔をして」

ハツと顔を上げたルカリオは、ドアにもたれかかるようにして立っている女性に目を吸い寄せられた。

身体のラインを強調するようなびったりとしたドレスに身を包んだ女性。豊かなプロンドを揺らしながら、ルカリオの側に歩み寄る。

「サンドラ。どうしてここに」

「あら。私はここには、いつでもフリーパスなんじゃなかったのかしらっ。」

「……今は仕事中だ」

「グループの会長である貴方が、そんな机にかじりつく必要はないじゃない？」

デスクに腰掛けると、量感のあるヒップが形を変えるのがスカートトの薄い生地越しに見て取れた。だがルカリオは表情を変えることなく、サンドラの顔を見上げる。

「それで？」

「ねえ、ルカリオ。あなた、結婚したんですって？」

サンドラの挑発するような視線を真正面から受けても、ルカリオの表情は何一つ変わらない。ただ眉間の皺がより深く刻まれている

だけである。

「なによ。そんな不機嫌そうな顔をして。アンジェロにも会わせたっていうじゃない」

「お前には関係ない」

「冗談言わないで」

サンドラは不機嫌に尖った声で言い返す。その険しい視線は、眼前の男を射殺そうとばかりに貫いた。

「私は関係が大ありよ。それはあなたが一番よく分かっていることでしょう?」

サンドラの声に、ルカリオは眉を僅かに動かすだけだった。

「よいしょ、っと」

マリアは目立ってきたお腹に注意しながら、部屋の掃除をしていた。

アンジェロの屋敷を訪れる以外、特に予定のない生活を過ごしているマリアにとって、部屋の掃除というのは暇つぶしも兼ねていた。時に、アンジェロから何か欲しいものがないかと問われるが、マリアは正直彼らに買って欲しいものなど無かった。

すでに物質的には充足している。これ以上なにかが必要かと問われれば、特にないとしか答えられない。

ドレスの類とて、以前にルカリオが買ってくれた品が大量にクロ

ーゼットに眠っているのだ。妊娠中の現在は着ることはできないが、そもそもこんな状態でパーティーに出席するつもりもない。ルカリオからも同伴を求める言葉を聞いたことがないのだから、きっと自分が出席する必要はないのだろう。

掃除の手を止めてソファに腰掛け、ふうと息を吐く。

以前ならなんなく出来た事が出来なくなっている。それは自分のお腹の中に、もう一つの命が宿っているからだ。身体も重くなっているし、動くだけで億劫な気持ちになる。

医者の話では、適度な運動はむしろ推奨されるとの事なので、マリアはアンジェロの屋敷へ訪れる時もあるべく歩くようにしていた。散歩がてらの訪問は、部屋に閉じこもりがちなマリアの良い気分転換にもなっている。さらにアンジェロが語ってくれるアジャーニ家の逸話や、ルカリオの子供の話は、マリアの楽しみだった。そしてアンジェロもまた、どんどん大きく目立つようになっていくマリアのお腹の成長を楽しみにしていた。

ルカリオは表面的にはマリアを大事にしてくれているが、その好意は裏に別の意図が透けて見えている。それを感じ取ったマリアにとって、アンジェロが向けてくれる親愛の情と、生まれてくるだろう子供への期待は救いだった。

定例の産婦人科検診の待ち時間で、マリアがその雑誌を手にとったのはほんの偶然だった。

前の患者の診察が長引いているという話で、マリアは予約の時間を過ぎても待たされていたのだ。そこで待合室のマガジンラックに差してある雑誌を手にとったのは、偶然以外の何物でもない。普段、こういったゴシップ誌を読まないマリアだったが、人並みにそういった物への興味もある。今までは、そんな精神的な余裕もなかった事から、すっかり世間の波に乗り遅れていた感のあったマリアは、これ幸いとその雑誌を開いたのだ。

そして、そこで大きく見開きで載せられた写真を見て、息が止まりそうになった。

『 “アジャーニ”の帝王、その魅力は衰えず』

そんなタイトルと共に載せられた写真には、ルカリオにぴったりと寄り添って彼の頬にキスをするブロンドの女性が写っていたのだ。

マリアはソファの上で座りながら時計を見た。時刻はすでに日付が変わろうとしている。深く息を吐いて、少し反動をつけて立ち上がる。

大きくなったお腹を抱えたまま、マリアはダイニングのテーブルに置かれた料理を見て、もう一度ため息を吐いた。

日持ちをするものは冷蔵庫に入れ、一部は冷凍してしまう。そのうち自分の昼食や夕食にしてしまうつもりだ。そんなつもりで冷蔵庫に収められた品が、今や冷蔵庫の中に大量にあふれかえってきた。「もう……作らないほうが良いのかしら」

これらは全て、ルカリオのための料理だった。だがこうして手つかずのまま冷蔵庫行きになるばかりだ。理由は簡単。ルカリオがマンションに寄りつかなくなったからだった。

あのゴシップ記事を読んだ日から、ルカリオは家にあまり帰ってこなくなった。帰ってきたとしても夜遅く、マリアがすでに寝入った頃に帰ってきて、早朝に家を出ている。

あの記事については何も言われなかったし、マリアも聞けないままでいた。ルカリオがパーティーに出席するのは仕事のうちだということは納得している。そして本来、パートナーとなるべき妻の自分が身重で出席できない以上、ルカリオは誰か適当なパートナーを別に見つけて伴う必要がある、のだろう。

そのパートナーに、頬にキスされるくらい、あるのだろう。感謝のキス。親愛のキス。挨拶のキス。

だから、マリアは過剰に反応しなくなかった。

ただあの日を境に、ルカリオの帰宅はいっそう不規則になったし、帰ってこない日も増えた。仕事が忙しいと電話で告げられたことも

ある。

実際、忙しいのだろう。アジャーニという大企業グループのトップは、常に選択をし続ける義務がある。ましてや世界中に支社を持つ以上、夜昼となく仕事は存在するのだ。

だからルカリオが仕事に忙殺される事は、ある意味で当然のことだ。

マリアは部屋の照明を落として寝室へ向かう。もう二ヶ月はルカリオと触れあっていない。

言いしれぬ苦さを感じながら、マリアはベッドで目を閉じた。

「どうしたね、マリア。ここまで来るのが辛いのであれば、車を迎えに出すぞ?」

ベッドの隣でぼうつとしていたマリアに、アンジェロは気遣わしげに眉を寄せて訊ねた。その声にハツとしたマリアが、苦い笑みを浮かべて首を横に振る。

「いえ、違うんです。今朝は少し寝不足気味で」

「……ほ。そりゃ余計なお世話じゃったかな」

アンジェロが目を細めて笑う。彼が誤解したことに気付きながら、マリアはそれを訂正する気になれなかった。

「それにしても、ルカリオは元気でやっているのかね? 最近はずかしいなどといって、滅多に寄りつかん」

「ええ……。忙しいみたいです。いつも夜遅くに帰ってきますし」

帰ってこない日のほうが多いことは、マリアは口を嚙むことにした。だがそれを聞いてアンジェロがニタリと笑う。

「なるほど。なるほど。なら寝不足にもなるな」

「……アンジェロ」

義理の祖父のセクハラまがいの言葉にどう対応したものかと頭を悩ませるマリアに、アンジェロは表情を真面目なものに変えて向かいあう。

「マリア。寂しいならば、寂しいときちんと言わねば伝わらんよ？特にルカリオは、一度こうと決めると頭が固くなるからな」

その言葉に思わず笑みが浮かぶ。アンジェロに向けて、頷いて見せた。

「そうですね。……でも、私は彼の足手まといにはなりたくないのです」

「足手まといなどと！ 妻に迎えた女性を守るのは、夫の甲斐性というものだぞ！」

「そう、ですね。でも私は、アジャーニの総帥の妻となるための知識がなにもありません。ただの市民階層で生まれ育ちました。大学では経済学を学びましたが、それほど優秀な成績を残せたわけではありませんし」

少しだけ首を傾げたマリアの髪が、流れるように肩に滑り落ちていく。

「そうしてみると、私は彼が戦っている場所で一緒に立つには、力不足過ぎるんです」

「マリア……」

アンジェロが眉を寄せるのを見て、マリアは気を取り直すように頭を一振りした。

「良いんです。それに今はパーティーでストレスをためるより、こ

の子をちゃんと産んであげないと」

お腹を撫でながらそう口にするマリアに、アンジェロは小さく息を吐いた。

アンジェロにとって、マリアはすでに身内だった。

一族の縁者は多いが、アンジェロにとってこれまで身内と呼べる人間はルカリオや、彼の伯父とその娘くらいだろう。他は皆、アジャーニという巨大な金鉱に魅入られた亡者に大なり小なりなっている。

自分がこうして病床に伏している間も、遺産の分け前を狙ってアンジェロの前に現れた者は多い。だがマリアは、一度として屋敷の金品に興味を示したことはなかった。

アンジェロはそういった輩を見抜く眼力には自信がある。伊達にアジャーニの総帥として長年第一線に立っていた訳ではないのだ。

その目で見ても、マリアは莫大な資産に魅入られているようには見えなかった。無論、それが高価な品であることは理解している。むしろ触らない、近づかないようにしているのだ。

「のう、マリア。僕は君がルカリオの妻になってくれた事を、嬉しいと思っておる。君のような女性が側にいてくれるなら、あ奴はきっと幸せをつかめるじやろう」

そう。そのはずだ。

だがアンジェロは、どこかで胸騒ぎを感じている。

ルカリオの足が遠ざかったこと。マリアが時折見せる、儂げな様子。結婚し、妊娠し幸福の絶頂と言っても良いはずの彼らが、どこかちぐはぐに見える事がある。

だがアンジェロには、あまり時間は無い。今は小康状態を保っているが、元々、若い頃の無茶がたたって身体を壊している。医師は明言を避けているが、余命もそう長くはないだろう。

そう考えれば、自分の死後に彼らがどうなるのかは、不安要素だった。

「マリア。どうか、お願いだ。ルカリオのことを、見捨てないでや
つてくれ」

そう口にしたアンジェロに、キョトンとした顔のマリアが破顔す
る。

「はい」

そして、力強く頷いて見せるのだった。

#20(後書き)

誤字訂正

「今日も行ったのか」

ルカリオは報告書を読んで、小さくうなり声を上げた。手にした報告書にはマリアのボディガードからの定時報告が書かれている。彼女は連日アンジェロの屋敷を訪れているようだった。

腹部が大きくなってからは、本格的に散歩を兼ねているようである。それ以外に外へ出ることはない。食料品などは業者が宅配で届けている。マリアは服やアクセサリーの類を買ってはいないようである。渡したクレジットカードの利用明細はゼロのままだ。何かを買うにしても、自分のカードか口座の現金を使っているらしい。

頻繁に通っているのは、アンジェロに取り入ろうとしているのだろうか。そう考え、ルカリオは鼻を鳴らす。

確かに祖父であるアンジェロは、アジャーニの前総帥として多くの権限と資産を持っている。だがそのほとんどの権限は現在の総帥である自分がほとんど掌握している。遺産については、ルカリオや親族に分けられるはずだ。もしかしたらマリアにも幾ばくかの財産を遺すかもしれないが、それとて夫である自分の管理下に置くように遺すだろう。

そう考えれば、マリアが今行っているであろうアンジェロへのすり寄りも、その愚かさには笑えてしまう。

手にした報告書をめくると、次の報告書の内容を見て眉が上がった。

「……………ククッ」

思わず漏れた笑みに、来客用のソファにしなだれかかるように座り、乱れた着衣をそのままに口紅を塗り直していたサンドラが振り返った。

「どうしたの？ ルカリオ」

「……いいや。なんでもないさ」

そう答え、手にした書類をデスクに放り投げる。

立ち上がったサンドラが、今度はルカリオに覆い被さってくる。

濡れた唇が自分に重なるのを受け入れながら、ルカリオはもう一度デスクの上の書類に目をやった。

そこにはアントニオ・ガゼットが結婚した、という報告が書かれていた。

マリアは携帯電話のディスプレイに映し出された名前に驚き、慌てて通話に切り替えた。

スピーカーから懐かしい声が懐旧の挨拶を告げる。

「マイク？ どうしたの？」

『久しぶりだな、マリア』

かつての同僚の言葉に、思わず笑みが浮かぶ。だが同時に怪訝にも思っていた。今の今まで連絡のなかったマイクから、一体なんの用があったのだろうか、と。

「なにかあったの？」

『ああ。良いニュースがね』

マイクがわざとらしく間を空けるのに、思わず笑ってしまう。

「なあに？　マイクに恋人でもできた？」

「おいおい。酷いな。まあ似たようなものさ。アントニオが結婚した」

「アントニオが！？　相手は？　私の知っている人？」

『どうかな。フレデリカ・スコットって女性さ。知ってる？』

フレデリカ、という名前をマリアは知っていた。それはアントニオの探していた、彼の想い人の名だ。

「彼女が見つかったの！？　それにアントニオと結婚って……本当に？」

『ああ。おまけに彼女、子供を産んでいたらしい』

マイクの言葉に、マリアは思わず自分の膨らんだお腹に触れてしまった。

アントニオとフレデリカは、マリアが復職する前に出会い、そして別れたらしい。別れたというのは正確ではない。アントニオはずっと彼女を捜し続けていた。出会って数日後に、彼女が姿を消したのだ。ガゼットという一流企業の社長であるアントニオと、ただのOLに過ぎなかった自分との差に怯えて姿を消したとも言われている。

そのフレデリカが子供を産んでいた。

「……アントニオは？」

マリアはゴクリと唾を飲み込む。結婚したという事は、きっと彼は子供も受け入れたのだろっ。そう信じたい。だが。

『今や俺達の親愛なるボスは、奥方と娘にメロメロだよ。もう見て』

られないぜ？ 目尻が垂れ下がっただらしない顔してさ」
マイクの言葉に、マリアはほっと息を吐いた。

『今や俺達のボスは結婚式の準備でんやわんやさ。おかげでこっちにしわ寄せが来てる上に、レイチエルが辞めたせいで毎日午前様だよ』

「レイチエルが？ どうして」

『そりゃ当然さ。レイチエルはアントニオ狙いだっただからね。結婚して、おまけに浮気する様子も無いってんなら、次のターゲットを探しに行くだろうさ』

「アントニオ狙いって……そう、だったの？」

『気付いてなかったのは君くらいだろうな』

受話器の向こうで笑うマイクに、マリアは思わず微笑んでしまった。

だがこのニュースは、久しぶりに聞いた嬉しいニュースだ。そう思えて、マリアはホッと息を吐いた。

「マリアは？ 変わらないかい？」

「……ええ」

マイク達には、結婚して退職することを伝えていた。だから彼はきつと、新婚生活を謳歌しているであろうマリア・アジャーニに、惚気てみせると言いたかったのだろう。

だが、マリアは身近く答えて、話題を変えた。

「結婚式も挙げるのね？」

『ん？ ああ。もう籍は入れているんだが、アントニオが拘ってね。フレデリカにウェディングドレスをどうしても着せたいらしい』

「……そう、ね。ずっと探していたものね」

アントニオは仕事の合間に寝る時間を削り、ひたすらにフレデリカの消息を追っていた。そう考えれば、籍を入れただけで納得するはずもない。ああ、確かに。アントニオはフレデリカを深く愛していたのだから。

マリアは自分を省みることをしなかった。ルカリオに連れられ宝石店で指輪を買い求め、街の登記所で彼の秘書を立会人に籍を入れた。それだけだった。その間、彼はマリアをろくに見なかった。そしてその足で仕事に向かい、帰ってこなかった。

それに比べてフレデリカはどうだろう。彼女はアントニオに必死に行方を捜され、そして妻として求められた。生まれた子供も、愛されているという。

「……ねえ、マイク」
「ん？ どうしたんだ？」

マイクはただ、かつてのボスの慶事を伝えてくれたただけだ。きっと、マリアが幸せに暮らしていると思っただろう。そうだ。そう思っているからこそ。 。
「いいえ。なんでもないわ。アントニオとフレデリカに、おめでとうと伝えてちょうだい？」

「あ、ああ。分かったよ。それじゃあ俺は仕事に戻るよ」
「ええ。忙しい中、ありがとう。嬉しかったわ」

電話を切った後に、マリアはじっと手の中の電話に目を落とす。いつか。

アントニオとフレデリカ。そして彼らの娘と会うことができるだろうか。

そんな事すら考える。

「ねえ、ルカリオ」

もしも私がここから消えたら、貴方は私を捜し出そうとしてくれるかしら。

声に出すことのない眩きは、マリアの胸の中で響き続いていた。

「……ルカリオ？ お帰りなさい。今日は早かった……のね？」

その夜、マリアは珍しく早くに帰宅したルカリオを、驚いた顔で迎えていた。

夕食の用意もしていたが、こうして彼が帰ってくるなどとは思っていなかったのだ。そう。新婚でありながら、もはやマリアは彼が帰宅することに驚くほどになっていた。

「ああ。今日は良いニュースがあったからね。君と祝おうと思って、早く帰ってきたんだ」

ルカリオは機嫌の良さそうに笑い返し、自室へ着替えに入る。

「あの、良いニュースって？」

「あとで教えてあげるよ」

そう言って自室へ消えたルカリオの顔を思い浮かべながら、マリアは首を傾げる。

良いこと、とは一体なんなのか。そしてそれを、自分と祝いたいという。

ルカリオの考えが読めず、マリアはただ首を傾げながら、夕食の用意に戻った。なにはともあれ、ここしばらく作り続けていた料理が、ようやく彼の口に運ばれるようになったのだ。それは嬉しいことだった。

「君が以前いた会社 たしかガゼットと言ったか。その社長が

結婚したそうだよ」

グラスにワインを注ぎ乾杯した後、ルカリオはにこやかに笑いながらマリアにそう告げた。

マリアはといえば、キョトンとした顔でルカリオを見ている。その表情に自分が予想した感情が浮かんでいないことを見てとり、ルカリオは少しばかり苛立ちを覚えた。

「あの……それが良いニュース、なの？」

「ああ。君の元といえ上司の慶事だ。祝うべき話じゃないか？」

笑いながらルカリオはマリアの表情を、慎重に見定めようとしていた。

かつて恋人　　いいや、愛人であったであろうアントニオ・ガゼットが結婚した。しかも報告を聞くに、ずいぶんと妻を愛しているらしい。他の女性など目にも入らないだろう。それは今、自分の目の前で訳が分からないという顔をしているマリアであろうとも。

そう。つまりこれでマリアは帰る場所を失ったという事だった。

計画通り事を進めるならば、ガゼットを潰すこともやむなしかと考えていたルカリオにとって、これはまさに『良いニュース』だった。無駄な資金を投じる必要もなく、マリアの逃げ道が一つ潰せたのだ。

「彼には君も世話になったのだらう？　喜ばしいことじゃないか」

「え、ええ……そうね。でもそのニュース、もうビジネス界で伝わっているの？」

「どういうことだい？」

「私も、今日の昼に電話を貰ったばかりなの。ガゼットと一緒に働いていた同僚からだっただけけれど、アントニオが結婚したって」

「へえ」

すつ、とルカリオは頭が冷えるのが分かった。

「確かに嬉しいニュースだわ。アントニオはずっと彼女を捜していたから。見つけ出すことができ、結婚に同意してくれたというのなら、本当に嬉しいことよ」

そういつて微笑むマリアに、ルカリオは表情を変えないように気をつけながら、言葉を重ねる。

「では、君は彼が結婚したことを、喜ばしいと？」

「え？ ええ。貴方もそう言ったじゃないの、ルカリオ。彼はずっと彼女を捜していたわ」

「君は、自分の恋人が他の女に走つても、そんな寛大なことを言えるのかい？」

「は？」

マリアの顔が強ばるのを見て、ルカリオは自身の失言に気付いた。慌てて取り繕おうとするも、マリアが目を見開いて自分を見て震えているのに気づき、それすらも停まる。

「……マリア？」

「あなたは……私がアントニオとそういう関係だと、本気で思っていたの？」

マリアの脳裏には、以前ルカリオがリズの部屋を訊ねてきた時の言葉が思い浮かぶ。

『お言葉ですけどね。今のご時世、妊娠していても仕事をしている女性は沢山いるわ。アントニオ 社長にもお世話になっているの。あの人の期待を裏切る訳にはいかないわ』

『……お世話に、ね』

あの時、ルカリオの咳きはひどく嫌な感じがした。それは彼が、自分とアントニオの関係が男女のそれであると邪推していたからなのか。

自分に結婚を申し込んだ時ですら、彼は自分の不貞を疑っていたのか。

そう考えただけで、マリアは頭の中がカッと熱くなるのが分かる。

「冗談じゃないわ。私とアント二オには、男女の関係なんて一切なかった。私は彼の秘書。アシスタント。それだけよ。私たちは友人だった。度量のある得難いボスだった。それだけよ！　なのに貴方は、そんな彼を　私を疑うというの！？」

「男女の間に真の友情なんてものは存在しない。それが僕の持論だ。たとえ君にその気が無かったのだとしても、彼のほうはどうなんだ？　彼が君に気がないとは限らないだろう」

「ありえないわ。彼はずっとフレデリカを探していた　！」

叫ぶようなマリアの声が不愉快だった。ルカリオは言い返してくる女が嫌いだった。自分はアジャーニの総帥であり、彼の言葉は絶対だ。それを侵す事は、何人にも許されない。

付き合ってきた女性は全員が彼の言葉に頷いてきた。唯一人、あの女性だけが自分との結婚を拒絶したのだ。そう。彼女だけが特別だったのかも知れない。

それに比べれば、他人の種で妊娠しておいて自分に結婚を迫ったマリアなど、見下すに足る存在だ。

ルカリオは苛立ちながら、彼女にさらなる証拠を突きつけるつもりになっていた。

「　だが、証言がある。君とアント二オが愛人関係にある、という証言がな」

「は　？」

マリアが声を失って自分を見る。その様にルカリオは暗い愉悦が浮かぶのが分かった。

自分に分があると思っっている人間を追い詰める時ほど、ルカリオはゾクゾクとする爽快感を感じた。それはたとえば企業買収を行う時や、契約を締結する時に感じるそれに近い。

だが今、眼前にいるのは、名目上でも自分の妻である。
「君を捜した時に、同時に周辺調査も行った。そこで君について興味深い証言があった」

ルカリオの言葉が理解できない。マリアは呆然としたまま、彼の言葉を聞く。

「長く勤めている社員はボスを気遣って口を開かなかったようだが、残念だったな。どこの世にも口の軽い人間はいるものだ。その人物は、君とアントニオが愛人関係にあると証言していたよ。長時間、二人は行動を共にしすぎている、とな」
「なにを言って……」

確かにマリアとアントニオは長時間、その行動を共にしている。入社してから帰宅するまで。それはボスであるアントニオの勤務時間の長さからも、当然長時間にわたる。だがそれは当然だ。自分は彼の秘書なのだから。

「大体、ガゼットほどの規模ならば、いきなり新人が社長秘書など務められるはずが無いだろう。……社長の『きわめて個人的なアシスタント』ならば別だがね」

ルカリオは笑う。だが、辛辣な言葉は、マリアを次々と突き刺していた。

「むしろ僕に感謝してもらいたいほどだよ。僕は、君の過去を全てなかった事にして受け入れることにしたんだ。妊娠の真相も、君とガゼットとの関係もだ」

「な」

マリアは啞然となった。

今、ルカリオはなんと言った。

ガゼットとの関係？

そんなこと、今はもう関係なかった。

「妊娠の真相」、と。今、ルカリオはそう告げた。それはつまり。

「誰の子とも知れない子供を、僕の子供として産ませてやるうと言うんだ。君は少しは感謝するべきではないか？」

ああ、神様。マリアは思わずそう呟いていた。

ルカリオは疑いを捨てた訳ではなかった。リズの部屋で告げた言葉は、すべて嘘だったのだ。これがルカリオの真意。彼は今も、マリアのお腹の中で育っている赤ん坊が、自分の子供ではないと思っている。

その事実にもマリアは身体が震えるのを止めることが出来なかった。

眼前で震えるマリアを見上げ、ルカリオは少々やり過ぎたことに気付いた。

今ここでマリアを放り出す訳にはいかないのだ。アンジェロのためにも、彼女には無事に子供を産んでもらわなくてはならない。

しかも、ルカリオ・アジャーニの子供を、である。

それが真実かどうかは、この際問題ではない。アンジェロにとって、ルカリオの子供　つまりひ孫が産まれたという事実だけが必要なのだ。

そのためにも、自分がマリアを疑っているという事は知られる訳にはいかなかった。そのつもりだったのだが、表情を変えずに自分の話を聞いていたマリアが腹立たしく、ついぶちまけてしまった。

「どついう事なの、ルカリオ」

「……何がだ」

震える声のマリアに、ばつが悪くなりながら答える。

「貴方は、私があなた以外の男とベッドを共にしたと、まだ疑っているというの？　あの時、リズの前であなたが口にした謝罪は嘘だったの？」

「……嘘じゃない。だが君の不誠実な行動については、新しい証言のせいで再び浮上しただけだ」

「新しい証言？」

「君がアントニオ・ガゼットの愛人だ、という証言さ。それに1年前にガゼットを辞める時にも、彼に強く慰留されたそうじゃないか。

その頃から恋人だったんだろう？」

「な」

言葉もなく震えるマリアを見て、ルカリオは鼻を鳴らした。
ここまで知られているとは思っていなかったのだろう。そう考え
て、ルカリオはにやりと笑って見せる。

「幸い、僕と結婚してからは切れていたようじゃないか。おまけに
彼は結婚した。これで僕も、ようやく一安心だ」

晴れやかに笑うルカリオは、けれどもその目は笑っていなかった。
氷のように冷たい目が、じっとマリアを観察している。その視線に
気付いて、マリアはもう一度ぶるりと震えた。

「……あなたは、私を信じていないの？」

「信じるに足る行動を君は取ったかい？」

「そもそも疑われるような行動を取った覚えがないわ！」

「君の言葉は信じられない。調査の結果は、全てが君の言葉と正反
対の事実を示しているんだからな」

勝ち誇ったように笑うルカリオを、マリアは睨み付ける。

「だったら、どうして私と結婚したの？」

「君を信じたかったからさ。もちろん」

ルカリオの悦に入った表情を見て、マリアはカツと頭の中が真っ
赤になった。

「ふざけないで。私は何もしていないわ。あなたが私を疑う理由す
ら、私には理解できない。アントニオが私を慰留してくれたのは、
私があその時にそれなりに大きな仕事を任せられていたからだわ。私
がアントニオの愛人ですって？ そんな根も葉もない中傷を、本気
で信じているの？」

「だが、証言は証言だ」
「その証言の裏は取ったのかしら。そんな手間を惜しむような無能な探偵、さっさと切ったほうが身のためよ！」
マリアはそう叫ぶと、身を翻して自分の部屋に飛び込んでいった。ガチャリと音を立てて鍵がかけられるのを見て、ルカリオはフンと鼻を鳴らした。

賢しげな事を言う。そう思いながらも、確かにあの新顔の探偵が裏を取ったかどうかは確認しなかった事を思い出す。だが、あの探偵社とは長い付き合いで、その調査結果も信頼の置けるものだ。ルカリオは考えていた。

不意に携帯電話が着信を伝える。ディスプレイに映った番号を見て、ルカリオは小さく舌打ちをしてそれに出た。

「僕だ。どうした」
耳元で甘く囁かれる声は、ルカリオの股間を熱くさせる。

「これからか？」
誘いの言葉に、ちらりとマリアの部屋を見る。彼女はドアを閉じたまま、出てくる様子もない。

「良いだろう。これから準備して向かう」
満足げに笑う声を聞きながら、ルカリオはゆっくりと立ち上がった。

彼女はマリアと違って、自分を不愉快にさせることが無い。

サンドラ・イルケ。かつてルカリオが妻にしたいと切望した女でありながら、その彼を捨てて姿を消した女。

そして、再び自分の前に現れた女だった。

その容色は衰えるどころか、さらに磨きがかけられている。今や、彼女はただそこにいるだけで周囲の男を蕩けさせるような色香を発していた。

マリアが自分を裏切ったと知った日から、ルカリオにとって彼女と結婚したとしても貞節を守る理由など皆無だった。だからサンドラがオフィスに現れた時、むしろ積極的に彼女を抱いた。

あの頃、若かった自分が堪能したサンドラの身体は、今も素晴らしいものだった。

溺れるなどという言葉は自分には似合わないが、それでもこうして時間を惜しんで彼女と会おうとする自分は、あきらめの悪い人間なのだろう。

ずっと彼女を妻にしたかった。どうしても譲れない彼女に、既成事実でもって結婚を迫るために、彼女に同意を得ずに避妊せずにセックスをした。

そこで知った自身の不妊体質が、ルカリオのプライドを粉々に砕いた。そして彼女は自分の前から去り、某国の大公に見初められたのだという。何番目かの妻になったそうだが、その大公が死んだのを機に再び舞い戻ってきたのだと言っていた。

今も彼女の身体を思い出すだけで、ルカリオは身体が熱くなる。テーブルの上の料理を一瞥して、着替えるために自室に戻る。そしてその足で、ルカリオは部屋に籠もっているマリアに一言も告げることなく、出て行くのだった。

自室に飛び込んだマリアがしたことは、まずドアの鍵をかける事だった。

そしてベッドに座り込み、ルカリオの言葉を思い浮かべる。

彼は、探偵に自分の周囲を探らせていたらしい。そしてその探偵は、ルカリオに『マリアがアントニオの愛人である』という情報を伝えたのだという。

一体誰がそんな事を言ったのか。古くからいる社員は、アントニオがそんな公私混同をするような人物ではない事を知っている。そしてマリアが、そんな行動を認めるはずが無い、という事も。マリアの事を知らない人間？　そしてアントニオの事もよく知らない人間なのだろう。そうでなくては、あんな悪意のある噂を口にできるはずがない。

そんな条件に当てはまるとしたら

「……レイチエル？」

彼女はアントニオ狙いだったという。そんな人間が、他人にアントニオと自分以外の女性についての憶測を口にするだろうか。だが現時点で、もっともその可能性が高いのは、恐らくは彼女。

いや。そんな事を考えたところで、意味はない。

「ルカリオは、なぜ私が浮気したと、ああも確信を持っているのかしら……」

そう。どんな証言があろうと、結局のところルカリオが持っている確信の理由が見えなければ、どんなに言葉を尽くしても彼は認めないだろう。マリアの以前の交友関係を全て洗ったのだとしても、きっとルカリオは「それでも」認めない。

そんな予感がした。

「……どんな理由があるの……」

お腹を抱きしめてベッドに横になる。部屋の外で物音はしないが、それでもマリアは部屋の外に出る気になれなかった。

翌朝、恐る恐る部屋を出たマリアは、ダイニングに残された手つかずの料理を見てため息を吐いた。

マンシヨンの中にルカリオの姿は無かった。夜中起きていたマリアの耳に何も聞こえなかったところをみると、彼は自分が部屋に閉じこもった後に出かけたのだろう。

すでに乾ききってしまったり、悪くなっていそうな品を捨てながら、マリアはぼんやりとしていた。どこか現実感が無い。

ルカリオとの結婚は、始まりから現実感のない物だった。それを少しでも良いものにしようとマリアは家の中を整えることに気を遣っていたのだ。けれどルカリオは、そんな家の中には興味などないようだった。毎日作った料理も、結局は自分だけが食べていたようなものだ。

お腹の中の子供を、ルカリオは真実求めていない。

そう理解するのが怖くて、マリアは必死に目をそらしてきた。アンジェロが楽しみにしてくれるのを支えに、日々を過ごしてきた。

けれど、もう無理なのだろうか。

何も言わずにどこかへ出かけてしまったルカリオ。彼の言う証拠はいずれも噂の域を出ないものだ。写真の一枚も無いというのに、自分とアントニオの関係を疑うなんて、ルカリオらしくない。

そう。彼らしくないのだ。所詮は噂。その程度の情報を彼が鵜呑みにするはずがない。だからこそ証拠を出せと繰り返したマリアに、彼はなんと言った？

証言がある。

ただそれだけを繰り返した。この世でもっとも信頼ならないと知っているだろうゴシップを信じ込んでいる。ではなぜ？ ルカリオの目を曇らせているのは、一体なんだというのだろう。

もはや習慣となった部屋の掃除しながら、マリアはぼつと考え込む。

何気なくつけたテレビでは、ゴシップニュースが流れていた。

そこで見た映像に、マリアは立ち尽くす。

『アジャーニ総帥と元公妃が密会』

パパラッチが撮ったと思しき映像には、ルカリオと彼を迎える女性の姿がしっかりと写っていた。

女性は某公国の公王が迎えた何番目かの妻で、現在は未亡人なのだとキャスターは告げている。そしてルカリオのプロフィールもつらつらと語られた。その中に、彼の結婚は一度も触れられていない。

『あのアジャーニの総帥ですからね。もしも結婚という事になれば、これは公妃となった時と同じかそれ以上の幸運ですよ』

したり顔で告げるコメンテーターの言葉を聞きながら、マリアはその場にへたり込んだ。

あの映像が撮られたのは、昨夜の事だという。恐らくはマリアが部屋に閉じこもった後、彼は出かけたのだろう。あの女性の元へ！

「あなたは、私をどう思っているの」

自分は法的にルカリオ・アジャーニの妻だ。だが彼は自分をそう扱わない。それどころか、あんなにも堂々と他の女性と逢っている。結婚したという事実すら、公になっではいなかった。別に公にして欲しいわけではなかった。ただ、夫としての貞節を守ってほし

かった。自分の不貞とやらを責めるくせに、それは自分には適用されないのかと怒りすら湧き上がる。

「……っ」

ぎゅっと自分のお腹を抱きしめる。今、ここにある命だけがマリアにとつて、唯一の絆だった。ルカリオ自身が認めていなくても、マリアは分かっている。ここにいるのは、ルカリオ・アジャーニとマリア・ウォートンの血を引く子供だ。

これは夢でも幻でもない。現実だ。

ルカリオ・アジャーニは、ただアンジェロに子供を見せるためだけに、自分と結婚した。

そういう事なのだろう。

だが、どうしてそんな真似をしたのだろうか、という疑問が湧き上がる。子供が欲しいのなら、作れば良いだけだ。確かに子供を確実に作るなんて難しいだろうが、ルカリオが釣り合いのとれる女性と結婚すれば、いずれ子供はできていただろう。

どうして自分なのだ。しかも自分の子供ではないと思いついていくくせに、脅迫までして結婚を了承させたのだ。

行動に一貫性を感じられない。理由が分からない。ルカリオの望みが、分からない。

だが何よりも。

「産まれた後に、あの人はどうするつもりなの……？」

この子供が生まれ、アンジェロに見せることができた後、ルカリオは一体どうするつもりなのだろうか。

騒がしいパパラッチを振り切るように運転手に指示しながら、ル

カリオは車の中で苛立っていた。

昨夜、サンドラに呼び出されて訪れたホテルで、彼女の部屋へ入る所を写真に撮られていた事に気付かなかったのは落ち度だった。目の前で蠱惑的に微笑むサンドラしか見えなくなっていたのだ。自分の欲望を刺激する彼女に導かれるように室内へ誘われ、周囲を警戒する事をすっかり失念していた。

ニユースに流されてしまった事は失敗だった。もしこれをアンジエロが見れば、せつかく安定している容態が急変しかねない。

「早く沈静化させる。別のスキャンダルネタをくれてやれ」
電話で秘書に手早く指示を済ませ、ルカリオは不機嫌なままで書類を手取る。

昨夜のサンドラの身体を味わって得た充足感は、最早無い。残っているのは、このバカ騒ぎをいかに終わらせるかだ。

「……先にお爺さまに説明しておいた方がよさそうだな」
そう呟くと、運転手に行き先を変更するように告げる。

もしマリアが来ていたとしても、知ったことではない。たとえ彼女が何を言おうと、ルカリオの言葉が優先されるのは、当然のことだった。

「ルカリオか」

屋敷を訪れたルカリオを迎えた祖父は、不機嫌な顔をしていた。室内にマリアの姿がないことを確認して、ルカリオは微笑んで見せる。

「ご機嫌いかがですか、お爺さま」

「あまり良くは無いな」

眉間の皺が深く刻まれているのを見て取り、ルカリオは苦笑いを浮かべる。

「どうなさったのです？ どこか具合がよろしくないのですか？」

「僕の具合はいつも通りだよ。だが、滅多に姿を見せなかった孫が

現れたと思ったら、不愉快なゴシップ付きというのは、どういう事が説明してもらいたいものだな」

「ゴシップはゴシップですよ。根も葉もない噂です」

「あの写真はどういう事だ？」

「ああ、やはりご覧になつたのですね？」

ルカリオはベッドの傍らに置いてあつた椅子に腰を下ろし、祖父の節くれ立った手を握る。水気の無いカサカサの肌は、祖父の身体の状態を確かに感じさせた。

「彼女は友人です。相談があるというので訪ねたのですが、そこを撮られたようで」

「新婚の夫が妻を置いて、余所の女に会いに行くのは感心できません」

「そうですね。ですが彼女も納得してくれましたよ」

後でマリアには言い含めておく必要があるが、ルカリオはそう言つて祖父の心配をなだめる事にした。じつと自分を見る祖父のブラウンの瞳に、どこか居心地が悪くなるのを感じながら、表情を崩さないように気を張る。

「……彼女はいい娘だ。ルカリオ。お前は彼女をきちんと守らねばならない。アジャーニの男として」

祖父の言葉に、少しだけ苛立ちが湧き上がる。

「いい娘？ なるほど。マリアは祖父の前ではきつちり猫を被っているらしい。」

彼女の本性をここで暴露したい衝動が湧き上がるが、彼女が産む『ルカリオの子供』をアンジェロが見て安心してくれるまで、それをする訳にはいかなかった。

「……大丈夫ですよ。今も彼女にはボディガードが付いてますからね」

監視を兼ねたものだが、それでも外部からの脅威は排除できているだろう。

そう考えて笑うルカリオを、アンジェロは苦々しい表情で見つめ

て
い
た。

「旦那様。マリア様がいらっしやいました」

ノックして姿を見せたのは、アンジェロの屋敷の執事のマルセルである。

その後ろに、マリアが立っているのを見て、ルカリオは僅かに眉を寄せた。

「ああ。よく来たね、マリア」

アンジェロがにこやかに微笑んで彼女を迎え入れるのを、ルカリオは苦々しく思いながらも、表情には一切出さずに見守っていた。

マリアはといえば、おずおずと室内に入ってくる。ルカリオの姿がここにある事が、よほど驚きだったのだろう。今も目を見開いてルカリオの姿を視線が追っていた。

「あ……ええ。こんにちは、アンジェロ。お加減はどうかしら」

「ああ。良くもなく悪くもなく、という所だな。今朝は珍しい客もいた事だし、少しは良くなったかな」

笑って答えるアンジェロに、マリアはホツとして歩み寄った。自然、ルカリオにも近づく事になる。彼の姿を目の端にとどめながら、マリアはそつとアンジェロの腕に触れた。

「良かった。この子に名前を付けて欲しいと思っているのですから、どうか身体を大事にして下さい」

「ほ。良いのかね？ 名付けは親の特権だろう」

「……では、候補の一つに加えるということで、よろしいですか？」
クスと笑いあう二人を眺め、ルカリオはムカムカとした苛立ちを感じていた。

アンジェロと仲が良くなったとは報告を受けていたが、実際に二人が並んでいるのを見るのは初めてなのだ。そこで見た二人は、心

底から親しげだった。敬愛する祖父がマリアの本性を見抜けない事への失望だろうと見当を付け、立ち上がった。

「お爺さま。では僕はこれで失礼しますね」

「ああ。そうか。気をつけていけ」

「はい」

一礼し、マリアの肩に触れて立ち去ったルカリオの後ろ姿を、マリアはじっと見送ることしかできなかった。

その横顔に浮かんだ愛惜の情にアンジェロはため息が漏れてしまった。

あの孫がなにを考えているのかが分からない。少なくともマリアは妻として迎えるに、不足のない女性だ。気立てもよく教養もあり、何事にも前向きに取り組んでいる。見知らぬ土地に一人でいるというのに、彼女の周囲には笑いが絶えない。

この屋敷の中でも、当初こそルカリオが連れてきた素性の知れない女性を、アジャーニ総帥の妻とすることに懐疑的な視線があったのは確かだろう。だが、そんな状況を彼女は自分自身で覆したのだ。今では屋敷の使用人達は、マリアの訪れるのを毎日楽しみにしている。

彼女は風のように、この屋敷に新しい空気を運んできてくれるのだ。

「マリア。大丈夫だよ」

それゆえにアンジェロは、彼女の心配をぬぐい去りたいと願うのだった。

予想以上に祖父や、屋敷の人間に取り入っている。会社へと戻る車の中で、ルカリオはそう結論づけていた。

ルカリオがマリアに一言もなく屋敷を出ようとした事に対して、執事のマルセルが物言いたげな表情を浮かべていた事を思い出す。あの老人はルカリオにとっては、二人目の祖父のような存在だった。幼い頃に両親を亡くしたルカリオは、あの屋敷で育ったと言っても過言ではない。そしてマルセルは、そんな幼少期のルカリオにとっては、悪戯をしたといつては怒られる相手だった。だがその怒りには愛情が籠もっていたことを覚えている。決して理不尽な理由ではなく、マルセルの言葉には道理があった。

だからこそ、反抗期の頃にはマルセルに無性に反発した事もある。道理が通つていようと、それに抗いたくなるのが若者の一過性の流行病なのだろう。だが、道理をわきまえる歳になれば、あの当時のマルセルの言葉は全てがルカリオのためだったと理解できる。

だからこそ、ルカリオはマルセルまでもがマリアに籠絡されている事実が腹立たしかった。

しかしアンジェロに穏やかに人生の黄昏を送ってもらつたためには、真実を告げる訳にはいかない。

その事実が、ルカリオには歯がゆい。本来ならば、あんな女を妻にするなど考えられなかったのに。さらに今の自分にはサンドラがいる。あの頃、焦がれて焦がれて、それでも手に入らなかった幻の花が。そんな自慢の花をアンジェロに堂々と紹介できない事も腹立たしい。

「くそっ」

自分が女性を妊娠させる能力がないという事実を、これまで受け入れてきたつもりだった。サンドラが去った日に、子孫を残すという行為から自身を切り離れたのだ。

だが祖父はルカリオにひ孫を求めた。ルカリオの血を受け継ぐ命を求めたのだ。

死を間近にしている敬愛する祖父の願いを叶えられない事ほど、ルカリオにとつて辛いことはなかった。真実を伝えて祖父を落胆させる事もできなかった。

だからこそ、自分を裏切ったマリアを妻に迎える、などという屈辱にも耐えることを覚悟したのだ。

だが、彼女にアジャーニの妻という未来を与えるつもりなど、ルカリオには毛頭ない。

だが現状ではマリアを妻として遇するしかないのだ。少なくともアンジェロや、屋敷の使用人達に真実を知られる訳にはいかない。

そこまで考えて、マリアがアンジェロ達に何か余計な事を言う可能性を失念していた事を、ルカリオは気づいた。

もしかやアンジェロが気遣わしげな視線をマリアに向けていたのは、彼女が妙なことを祖父に言ったからなのではないか？

今夜は帰宅する必要があるか、とルカリオは深い息を吐きながら心の中で呟くのだった。

今晚も帰ってこないのだろうか。

マリアはそう思いながら、パスタをゆでていた。一人での食事ならば、そうそう手の込んだ料理など作る気にはなれない。だからマリアのここ数日の食事は、手軽なパスタだった。

トマトソースと混ぜ合わせ、バジルを散らせる。

適当な作りだが、裕福とはいえない環境で学生時代を過ごしたマリアにとっては食べなれた味である。

使ってる材料の値段は、かつて使っていたそれとは比べ物にならない高級品であるが、どことなく食べ慣れた味はマリアを落ち着かせた。

アンジェロやマルセルが、自分とルカリオの間にある緊張感に気づいていることを、マリアはわかっていた。ただ、それをどうしたら良いのかが、マリアにはわからない。

アンジェロは、生まれてくるだろう命を楽しみにしている事を繰り返し口にした。ルカリオがまったく見せてくれない期待を、義理の祖父は繰り返しマリアへ伝えてくれる。だからこそ、マリアはルカリオの行動を伝えることができずにいた。

ぼうつとしながらフォークで皿をつついていると、ガタンという音が玄関から聞こえた。

「え……？」

「なんだ、美味そうなのを食べてるじゃないか。僕の分はないのかい？」

ダイニングの入り口に立ち、皮肉げな笑みを浮かべているセクシ―な男。無造作に立っているだけなのに、なぜこつも目を引くのか。「あ……お、お帰りなさい。あの、ごめんなさい。夕食、ぜんぜん用意をしていなくて」

「それがあるだろ？ まだソースはあるみたいじゃないか」

「で、でも、あなたにこんなの……」

テーブルの上の皿を指さすルカリオに、マリアは混乱しながら眉を寄せる。冗談ではない。生まれた時から銀のスプーンを持っていた彼に、こんな安い味など食べさせられるものじゃない。そう考えて首を横に振ろうとするマリアに、ルカリオは口の端を持ち上げて答えた。

「マリア。僕だって公園のホットドッグを食べた事くらいはあるよ。それに比べれば、ちゃんとした料理じゃないか」

「……あの。いいの？」

「かまわないよ。着替えてくるから、その間に準備を頼むよ」

そう言っただいニングから消えるルカリオにマリアは呆然としながらも、パスタをゆでるべく立ち上がるのだった。

「うん。悪くないね」

「あの……本当に簡単に作ったものだから」

簡素なパスタ料理を口に運ぶルカリオに、マリアは困った顔を浮かべていた。

彼ならば、ホール缶のトマトに塩をふった程度のトマトソースや、バジルをふっただけのパスタなど、食べた事もないだろう。

「いや。たまには良いよ。こういうのも」

「……そう、ね」

どんなに豪華な料理も、毎日食べていけば飽きもするのだろう。だがマリアからすれば、これこそが彼女が日頃食べていたものだった。

コーヒーを淹れながら、パスタを口に運ぶルカリオの横顔を、マリアはちらりと眺める。昼間に見たときと変わらない姿は、気を抜いてるようにも見える。

旺盛な食欲を見せて皿を空にしたルカリオに、代わりにコーヒーを差し出しつつ、マリアは戸惑っていた。

マンションに寄りつかなかった彼が、一体どんなつもりなのか。それがわからなくて、不安がにじみでてくる。

「アンジェロは元気なようだね」

「え？ ええ。最初にお会いした頃に比べたら、ずいぶんとお元気になられたようよ」

頷きつつ、マリアはルカリオの対面に座ることがためらわれ、シンクにもたれかかるようにして立つ。

「マルセル達とも、仲が良くなった？」

「ええ。それなりに長い付き合いになったし。お腹が大きい私を、気遣ってくれているわ」

頷いたマリアに、意味深に目を向けてくる。そんなルカリオに、マリアは居心地の悪さを感じた。

「アンジェロの病状は、快復を望むことはできない。もう、祖父は日々を穏やかに過ごして、緩やかな死を迎える事しかできないんだ」

唇をかみしめるようにして、祖父の未来を告げるルカリオに、マ

リアは胸を締め付けられるような気がした。彼は確かに祖父を敬愛している。そして、その死を受け入れる事を、心のどこかで拒否しているのだ。

「ルカ……」

そつと彼の腕に触れる。その手から、視線が上がってきた。

「だからこそ。マリア。アンジェロに余計な事を言わないでもらいたい」

「え？」

「君が産む子供は、僕の子供だとアンジェロは思っている。僕は彼にそう信じたままで、天国へ旅だつて欲しいと願っている」

「……ルカリオ」

「そして、もしもアンジェロが真実を知るような事があれば、僕は君を決して許さない」

険しい視線が自分を睨んでいる事に、マリアは呆然となつてしまった。

ルカリオに触れていた手を離し、一步下がる。

目の前に座っている男が、途轍もない化け物に思え、マリアは震える身体を自分で抱きしめながら口を開いた。

「私だつて、アンジェロには穏やかに過ごして欲しいと願っているわ。けれど、真実つてなに？ この子はあなたの子供で、アンジェロのひ孫よ」

「まだ言うのか」

「何度だつて繰り返すわよ。この子はあなたの子供で、私は浮気なんてしていいない。むしろ、あなたこそ私に何か言うことがあるんじゃないか？」

キツとにらみ返したマリアに不快げに眉を上げ、ルカリオは鼻で笑つた。

そこには、蔑みの響きがあつた。

「君がなんと言おうと、真実は僕が知っている。それに、僕の行動については、君に何かを言う権利などはない。君にはクレジッ

トカードを渡しているだろう。それで好きに買い物すればいい。どんな服でも宝石でも、好きに買えば良い。アジャーニの妻という立場にいる限りは、それくらいは許容してあげるよ」

そう言い捨ててルカリオは立ち上がると、ダイニングを出て行く。手つかずだったコーヒーマシンが湯気を立てているのを見ながら、マリは俯いていた。

なにを言っても、何度繰り返しても、ルカリオはマリアの言葉を信じない。なぜ信じてくれないのか。彼が口にした証拠など、マリアの浮気のなんの証拠にもならないというのに。

「この子が産まれてきたら、DNA鑑定をすれば良いわ。そうすれば、あなたも信じられるでしょう!？」

「虚勢を張るのはやめておけ。そんな事をして、真実が露見すれば困るのは君のほうだろう?」

「なに一つ困ることなんて無いわ!」

「感情的になるなよ。あとで後悔するのは君だ」

そう言い捨てて、ルカリオは玄関へと向かって歩き出した。

「ルカリオ! どこへ行くの!?!」

「仕事だ」

そう言っただけ振り返りもせず家を出て行くルカリオの背を、マリは呆然と見送ることしかできない。

あの女性の元へ行くのだろうか。ゴシップ誌に載っていた美しい女性。その姿を思い浮かべながら、マリアはすとその場に膝をつくのだった。

#25 (後書き)

仙台に出張中に被災した友人と連絡がつかしました。無事とのことので、
一安心しました。

亡くなった方にお悔やみを申し上げつつ、自分にできる事をしてい
こうと思います。

マリアがアンジェロの屋敷を訪れたのは、いつもの時間より少し遅かった。執事やメイドたちが気遣う様子に、マリアは苦い笑みを浮かべた。

「ごめんなさい。少し所用があつたものだから。心配をかけてしまいましたね」

「いいえ、奥様。そのような事は」

「アンジェロは？ 起きていらっしやるかしら」

「はい」

頷いて、アンジェロの部屋へと歩くマリアの背を、マルセルは不安げに見送る。

マリアは、おそらくはなにも言わないだろう。何かの不安を抱えているのだろうに、彼女は決してそれをアンジェロや自分たちには告げないのだ。

それはマルセル達からすれば、水くさいと思えてしまう。だがマリアにも都合というものがある。そう理解してしまえるからこそ、マルセルは苦い顔をせざるを得なかった。

その女性を見たのは、マリアがアンジェロの屋敷へと向かおうとする時間だった。

エントランスへと堂々と入ってきた女性は、まるでパーティーからの帰りのようなデザイナーズブランドのドレス姿でハイヒールを鳴らして歩いてくる。マンションのフロントに立っている警備員も、あまりに堂々とした姿に制止すべきかどうか悩んでいるようだった。彼女がここに住んでいない事を、マリアは知っていた。もしもここに彼女が住んでいるというのなら、ルカリオの悪趣味さを疑ってしまっだろう。

そう。その女性はかつてルカリオがゴシップ誌に共に写っていた女性だった。

長いブロンドを揺らし、豊かな曲線をくねらせて歩く。ただそれだけで男性の視線を釘付けにするだけの力のある肢体。そして、それをどう見せれば良いかを知悉した者の動きだった。モデルよりも蠱惑的に。ストリッパーよりも清楚に。男のプライドを満足させ、女としての価値の一面を極端に突出させた姿。

「あら、ミス・ウォートン。おはようございます」

女性は初めて気付いたとばかりに、笑顔を浮かべる。その笑顔を真正面から受けて、マリアはただ会釈を返した。その女性が、自分とルカリオが夫婦である事を知らないはずはない。そして知っていて、自分を『未婚の女性』と呼んだ事は、彼女がどういっつもりで現れたのかを示していた。

すなわち、敵対。

「ええ、おはようございます。失礼ですが、初対面だと思いますけれど、どこかでお会いしたかしら」

だからマリアは、笑みを貼り付けて訊ね返す。そちらの存在など、眼中にも無いのだ、と。

「あら。そうでしたかしら。ごめんなさいね。友人からよくあなた

の話聞いていたものだから、もう知り合いになった気になったのね」

ブロンドの女性はクスリと笑い、そして真正面からマリアを見据えた。

「私はサンドラ。サンドラ・イルケと言います。よろしく願いますね、ミス・ウォートン」

「……ええ、初めまして。ですが私はミスでもなければ、ウォートンでもありません。私はミセス・アジャーニですわ。ミス・イルケ」
胃が引き攣りそうになりながら、マリアは眼前のサンドラを見据えて、そう告げた。

「あら。そうなの？ ふふ。失礼したわね」

だがサンドラは動揺した様子もなく、マリアの言葉を受け流した。そして、そのままマンションのエレベーターの前に立つ。

「あの？」

「私、今日からここに住むの。まあ、あまり家には居ないと思うけれど？」

流し目でマリアを一瞥し、サンドラがエレベーターの中に消える。それを見送り、マリアはジクジクと痛む胃を抑えるように、手をお腹へと添えた。

あれが、サンドラ・イルケ。結婚したにも関わらず、ルカリオがパートナーとしてパーティーに連れ歩く女性。

その女性が、今日から同じマンションに住むのだという。それが誰の指図なのか、マリアはすでに分かっていた。

「あの、ミセス・アジャーニ？ どうかなさいましたか？」

警備員が気遣うように声をかけてくるのに、なんでもないと答え、マリアはエントランスを出る。朝の光に満ちた空を見上げながら、マリアは何も考えずに歩き出した。

携帯電話にかかってきた番号を見て、サンドラはクローゼットの中を整理する手を止めた。ディスプレイに映った番号に、笑みを浮かべる。

「ハイ。どうかしたのかしら？　ダーリン」

『一体どういっつもりだ、サンドラ』

不機嫌な声に、サンドラは思わず吹き出しそうになった。

朝まで同じベッドで眠りながら、勝手に自分がホテルを出て行ったのが、そんなに気に入らなかつたのか。それとも、ここに自分が居を構える事を知つたからなのか。

「何のこと？」

『ふざけるな。なぜ君がそのマンションで』

「あら。どうせあと半年もかからないのでしょうか？」

『そついう問題じゃない。一体なんのつもりで』

「私もそろそろ、ちゃんとした扱いを受けたい。ただそれだけよ？」

サンドラの言葉に、相手が言葉を飲み込むのが分かつた。

「オフィスやホテルでしか会えないなんて、不愉快だわ。あなたの帰る場所を用意するのが、私の役目なのではなくって？」

喉を鳴らして笑いながら答えるサンドラに、相手は明らかに動揺していた。

さすがのルカリオ・アジャーニも、名目上の妻と同じマンション

に自分を住ませるだなんて事は考えていなかったのだろう。そう思えば、彼の予想を超えられた事が愉快でならない。

『サンドラ。聞き分ける。アンジェロに知られたら』

「あなたの大切なお爺さまは屋敷を出る事はできないのでしょうか？
なら、あなたのボディガードがわきまえていれば問題なんて起きないわよ」

『クソッ。会議の時間だ。あとでまた連絡する！』

一方的に切られた電話に肩をすくめて、サンドラはベッドに腰掛けた。

ルカリオ・アジャーニと出会ったのは、サンドラがまだモデルをしていた頃のことだ。もう5年以上前の事だろうか。アジャーニの総帥職を祖父から引き継いだ若き経営者として、彼は多くの女性から秋波を送られていた。そんな中、サンドラは彼と恋人となったのである。

若いルカリオは、サンドラに文字通り溺れていた。そうなるように仕向けた事もあるが、何よりもルカリオ自身が、若く美しく蠱惑的な女性であるサンドラを自分の物にしたがったからだ。

時間があれば、場所を選ばずにセックスに耽った。だがサンドラはトップモデルとしての生き方と社交生活を捨てる気には、到底なれなかった。ルカリオとのベッドの相性は抜群だ。彼の財力も、魅力的だ。だが、彼だけに縛られるのは嫌だった。

自分の美を前に傳く男達。ルカリオもまた、その内の一人に過ぎなかった。

だが、ルカリオはその他大勢となる事を拒否していた。

サンドラを自分一人の物とするべく、様々な工作をしていた。それすらも、サンドラの美を讃える一助であると理解していたからこそ、それを許容していたのだ。だが。

「うふふ」

笑みが漏れる。あのマリアとかいう女性は、ショックを受けている事を隠そうとしていたが、隠しきれない衝撃が透けて見えていた。あの顔が絶望に染まるのを見てみたい気もするが、サンドラにとってはどうでも良いことだ。

無駄な恨みを買う必要はない。彼女の恨みを受ける相手は、ルカリオだけで十分だろう。

「本当に、昔からバカな男」

サンドラは窓の下に見えるビル群を見下ろしながら、そう呟くのだった。

「……また載ってる」

手にした雑誌をゴミ箱に放り込みながら、マリアはそう呟いていた。

アンジェロの屋敷を訪ねた帰り道、本屋の店先に置いてあったゴシップ誌には、またルカリオとサンドラの写真が載っていた。その誌面には、ルカリオとサンドラの結婚が秒読みの段階にある、と纏められている。それを読んでマリアは思わず笑い出しそうになった。彼の妻は自分だ。法的にも、そうなっている。現状で彼がサンドラと結婚することはできない。

「なら、どうするのか」

ルカリオは最近、毎朝このマンションから出勤しているらしい。エントランスにいる守衛から、そんな話を聞いた。「最近はお主人もお帰りになられているんですね」と。

そう言われた時、マリアは一瞬戸惑い、そして取り繕うように微笑んだ。

ルカリオはマリアのいる部屋に帰ってきたのは、もうどれほど前の事だろう。彼の姿を、もう一ヶ月は見えていない。そしてそれは、ルカリオがこのマンションのもう一人の住人の部屋で寝起きしているだろうという推測を産んだ。

臨月も近づいた頃、マリアにとってはもう外部の情報はノイズに等しかった。ルカリオはまったく家に寄りつかず、彼女にとってはアンジェロや屋敷の者達との時間だけが慰めだった。

サンドラとは、あれからは一度も顔を合わせていない。ルカリオから何かを言われたのか。それとも、牽制する必要もなくなったのか。

だが、子供さえ生まれれば。この子が、ルカリオの子供だと証明さえできれば。

そうすれば　彼は気付いてくれるはずだ。
マリアはそう信じる事しかできなかった。

部屋はきれいに掃除されている。そこを使う人間が一人しかいないのだから、汚れる場所などたかが知れていた。

「……く」

最近では腹部の張りを感じることも多くなっている。医師からは陣痛の始まり方も聞かされていた。だが、こうして誰もいない部屋で独りしていると、不安が湧き上がってくる。

出産の時くらい、せめてルカリオに傍にいて欲しい。それは、分不相応な願いだろうか。マリアはそう思う事を止められないでいた。ソファに腰掛けたまま、壁にかけられた時計へ目を向ける。

夫は、まだ仕事だろうか。顔を合わす事すらないのでは、話す事もできない。

携帯電話を取りだし、メールを打つ。

何時頃に帰るのか。ただそれだけの短いメール。けれど返信がきた事はない。

本当なら「今日は帰ってくるのか？」と打ちたい。だがそう打つてしまえば、ルカリオの返信次第で彼がこの部屋を帰るべき場所だと思っていない事が明らかになってしまう。

それが恐ろしくて、マリアは帰宅時間を問うメールを打つ事が精一杯だった。そして、そのメールですら、ルカリオには届いていないのかも知れない。

彼がこのメールをspamメール扱いしていないなど、誰も保証はしてくれないのだから。

今夜も帰ってきそうにはない。そう思ったマリアは、食事を作る気力も湧かず、適当にフルーツをつまむだけで自室へと戻る事にしたのだった。

それが到来したのは、深夜の事だった。

不意に腹部から鋭い痛みを覚え、マリアは目を覚ました。何かの病気だろうかと一瞬考え、それから陣痛の可能性を考える。

「……くっ」

痛みは少しずつ強くなっている。脂汗が額に浮かぶのを感じて、マリアはパジャマの上にコートを羽織った。

着替えるだけの余裕はない。このまま病院に向かったほうが安全だろう。

支えてくれる人はいない。今も部屋の空気は冷たいままだ。夫へ連絡する余力もなさそうだった。だが。

タクシーを呼ぶようにフロントに連絡を入れ、マリアはエントランスへと向かう。

手にした携帯電話でルカリオの番号を選ぶ。かかって欲しい、と願うように耳に当てると、ずくん、と痛みが再び強まった。

漏れる呻き声をそのままに、荒い息を吐く。

普段はそうと感じないエレベーターの遅さが、苛立たい。

呼び出し音は鳴り続ける。だが、相手が出る様子はない。

「ルカ……お願い……」

縋りたかった。支えて欲しかった。今、この瞬間、命を産むという経験したことのない未来が怖かった。

だが、電話は繋がらないまま、エレベーターが停止した。

エントランスへ出ると、フロントマンが慌てた様子でマリアの身体を支える。

「大丈夫ですか？ 車が着くまで、もう少し時間がかかります。こちらへ」

そう言って待ち合い用のソファへと案内される間も、マリアは携

携帯電話を耳に当てたままだった。無情に続くコール音を前に、マリアは諦めた。車が着いたことを告げるフロントマンに礼を言い、タクシーへと乗り込む。

かかりつけの病院の名を告げると、マリアはぐったりとシートにもたれ掛かる。運転手も妊婦だと見てとるや、車を発進させた。

「大丈夫かい、お嬢さん」

「……ええ」

「俺のかみさんの時も、大変だったよ。あんたもすっかり気を持ちな」

「ありがとう」

苦い笑みを浮かべ、マリアは辿り着いた病院の入り口へと歩いて行く。それを支えてくれる運転手に、マリアは心底から感謝した。

先に連絡を入れておいたおかげか、看護師がマリアへと駆け寄ってくる。

看護師がマリアを支え、状況を確認する。それに何とか答えながら、病院の中へと入った。

「本当にありがとう！」

「良い子を産んでくれよ。頑張れ！」

運転手の言葉に頷き返し、マリアは診察室へと通されるのだった。

ルカリオがその着信に気付いたのは、サンドラのベッドの上だった。弛緩した身体をベッドに沈ませているサンドラの横に寝転びながら、ふと携帯電話のランプが明滅している事に気付いたのだ。

「……なんだ？」

見てみれば、それはマリアからの着信だった。何度も繰り返しかかっている事を示す履歴を確認して、フンと鼻を鳴らす。

一体なんのつもりなのか。何時に帰るのか、というメールが届いていた事を思いだし、ルカリオは身体を起こした。

「ダーリン……？ どうしたの？」

まどろんでいたサンドラが、その手を伸ばしてくる。首筋を撫でていく手をそのままにして、ルカリオは携帯の着信をもう一度確認した。

マリアから電話がかかってくる事は、これまで一度として無かった。何かあったのだろうか。

そこまで考え、それ以上の考えを放棄した。彼女の行動など、斟酌する必要などないのだ。彼女はただ子を生み、アンジェロを安心させるための道具に過ぎないのだから。

これまで付けていたボディガードも、最低限の人数となっている。とはいえ、何かあればボディガードから連絡が来るだろう。

「……なんでもないさ」

だからそう答え、ベッドの上で微笑むサンドラに覆い被さるのだった。

その夜、マリアは一人の男児を産んだ。たった一人で分娩台に乗り、大勢の医師や看護師、助産師の力を借りて、三千グラムの健康な男児を産んだのだった。

早朝、ルカリオはボディガードからの連絡を受けた。

「病院？ どういう事だ。何かあったのか」

しどろもどろで要領を得ない答えに苛立ちながら、ルカリオはマンションを出る。エントランスにいつもいるフロントマンが、驚いたような顔をしていたが気にも留めずに迎えに来た車に乗り込んだ。

「なに？ 何を言っている。産まれた？ 何がだ」

運転手が怪訝そうにバックミラー越しに自分を見ているのにも気付き、車を発進させるように手で示す。運転手もいつもの事かと車を発進させる。

その最中、ようやくルカリオの耳にまともな情報が届いた。

「マリアが出産しただと？ どういう事だ！ なぜ僕になんの連絡もなかった！」

怒鳴りつけた先で、ボディガードが言い訳を並べ立てる。曰く、人員が削減されたうえ、そもそも対象が夜間はまず出歩かない事から、監視を行っていなかった。昼の間はびったりと着いているが、彼女がマンションの自室へと戻った事を確認した時点で、チームは解散しているのだ、と。それは数ヶ月前のレポートで、そういう体制を取っている事が報告済みだ、と。

「だが、出産だぞ。ええい、もう良い。病院の名前は。病室はどこだ」

病院の名前と病室を確認し、ルカリオは運転手へ行き先の変更を告げるのだった。

早朝の病院の受付に立ったルカリオは、マリアの居る病室を確認

し、ズカズカと入り込んだ。

ベッドで眠っている女性の腹部がぺたりと潰れているのがシート越しでも見て取れる。だがその中身が見当たらない。

「……どういう事だ。子供はどこにいる。おい、マリア。子供はどこなんだ？」

眠っているマリアの肩を揺すりながら、ルカリオはその肩の細さと小ささに驚いていた。

彼女はこんなに小さかっただろうか。

真正面からマリアを見たのは、いつ以来だろう。

「ちょっと、あなた！ 何をしているんです！」

背後からかけられた険しい声に振り返れば、看護師の女性がルカリオを睨み付けていた。

「その人は夜遅くに出産したばかりで消耗しきってるんです！ それにまだ見舞いの時間じゃありません！ 早く部屋を出なさい！」

抑えた声ながら叱責する声に、ルカリオは眉間に皺を寄せた。

「僕に命令するな」

「ここは病院です。あなたがどの王様だろうと、医療スタッフの指示に従ってもらいます。例外はありません！ 早く出て！」

舌打ちをして視線をベッドの上で眠るマリアへ落とす。

青ざめた顔色は、彼女の不調を示していた。

「こんなに顔色が悪い。出産はうまくいったのか？ 適切な処置がされていないんじゃないのか？」

「あなたがここでギャーギャー言っているほうが彼女には害悪よ。

もう一度だけ言うわよ。外へ出なさい。これで従わないならガードマンを呼びます」

看護師の睨み付ける視線にルカリオは肩をすくめ、病室を出たところで足を止めた。

「これで良いのか？」

「そうね。それであなただけは？　彼女は昨晚一人で来て出産をした人らしいけれど」

「……彼女の夫だ。子供はどこに？」

「あなたが？」

目を見開いて驚いた顔をした看護師は、ふう、と息を吐いた。

「それを証明できる？　あなたが新生児の誘拐犯ではないと言い切れないわ」

その言葉にルカリオは口ごもる事しかできなかった。

夫婦の証明と言われても、役所の書類くらいしか存在しない。だがそれすらも、今出す訳にはいかない。

「……奥さんが目覚めるまで待つからね。子供は新生児室に居るわ。外から見ただけなら許可できるけど？」

「それで構わない」

渋い顔をしたまま、ルカリオは頷くのだった。

その子供は、ルカリオに似た髪の色をしていた。とはいえ、まだしわくちやで小さく、顔立ちも判然としない。

隣にいる赤ん坊と似たようにも見えるし、違うようにも見える。看護師が教えてくれた子供の前で、じっとルカリオはそれを見下ろしていた。

ガラス越しに見る事しかできない。新生児室の中へ入る事は許可されなかった。

ルカリオが子供を睨むように見つめているのを見て、看護師が首を傾げる。

「それじゃあ私は行きますけど。良いですね。許可が下りるまでは

入れませんからね！」

「ああ。了解した」

短く答えたルカリオに、本当に分かっているのか、と思いつつも自分の仕事がいっぱい詰まっている看護師は足早に立ち去る。

泣きわめく赤子の集団。その中の一人。マリアが産んだという男の子。マリアが余所の男とベッドを共にして作った子供。

「……ふん。とはいえ、男ならば祖父も喜ぶか」

そろそろマリアも目を覚ます頃合いか、とルカリオは新生児室を立ち去る。

彼女がなぜ一人で出産などしたのか。それを問い詰める必要があった。

もしもここで流産や死産なんて事になれば、祖父にとどめを刺しかねない。そういった事を考えられないならば、釘をさしておく必要がある。ルカリオはそう考え、マリアの病室のドアを開けた。

「……あの、子供にはいつ会え……ルカリオ？」

看護師が入ってきたと思ったのだろう。ベッドの上でマリアが驚いた顔をしていた。

「起きていたのか」

「あ、あの……ルカリオ。どうして」

「ボディガードから連絡がきた。君が昨晚出産した、と」

強ばった顔のまま、マリアが俯く。長い髪がさらりと肩口から滑り落ちる。

「マリア。なぜ一人で病院に向かった。君は分かっているのか？」

もしも子供が流れたり、死産だったりすれば、アンジェロにどれほどのショックを与えるのか

「電話したわ！ 何度も！ ずっと！ でもあなたは、出てもくれなかったじゃない！」

言い含めようと言葉を重ねたルカリオに、不意にマリアが叫び返していた。

涙を目に浮かべながら、マリアはキツと睨み返してくる。その視線の強さに、ルカリオは思わず息を呑んだ。

「陣痛が始まって、すぐに病院に向かうためにフロントに電話したわ。タクシーを呼ぶようにお願いした。それからはずっと、あなたの携帯電話に電話をかけ続けていた。そうよ。マンションからこの病院に入るまで、ずっと！ 何度も！」

興奮したマリアの頬は真っ赤になっていた。充血した目がルカリオを真っ直ぐに睨み、引き結んだ唇が白くなっている。

「……でもあなたは、一度として出なかった。あの夜、私からの電話があった事は、いくらあなたでも気付いたはずなのに。私の電話に、返信もくれなかった」

確かに着信に気付きはしたが、何もなかった。サンドラと抱き合う事を、快楽を優先した。

それを思っだし、ルカリオは怯んでいた。マリアの予想以上の反応に驚いてもいた。

「なのにあなたは私をなじるの？ 顔を合わせるなり私が悪いと糾弾するの？ ふざけないで！ 見ず知らずのタクシーの運転手のほうが私のことを気遣ってくれたわよ！」

「……君はまだ出産したばかりで気が立っているんだ。また後で来る」

踵を返したルカリオに、マリアは頭の中が真っ赤に染まった気がした。

「自分に都合が悪いと、そうやって逃げるの!？」

「君は冷静じゃない。また後で来る。看護師に鎮静剤を処方してもらうよう、頼んでおく」

「ルカリオ！」

後ろ手で扉を閉めながら、ルカリオは長い息を吐いていた。

あれはまるで、産まれたばかりの子猫を守る雌猫だ。そう考え、ルカリオは肩をすくめて歩き出す。仕事を始める前に面倒事が起きたが、とりあえずは問題もなさそうだ。そう考えながら、車を停めさせた駐車場への道を歩くのだった。

産後の体調を整えるために入院を余儀なくされたマリアの事をアンジェロに伝えるべく、ルカリオはアンジェロの屋敷を訪れていた。毎日のように訪れていた彼女が姿を見せないことで、アンジェロが動揺してはいけないと考えたからである。

「ルカリオか。珍しいな」

ベッドの上に起き上がっていたアンジェロは、部屋に通されたルカリオの姿を見て眉を上げた。そして皮肉げな響きを唇に乗せる。事実、ルカリオがこの屋敷を訪れたのは数ヶ月前のことだ。

「どうしたのだ、こんな時間から」

「お爺さまに嬉しい報告がありました」

笑みを浮かべながら、ベッド傍にある椅子に腰をかける。

「マリアはどうしたのだね。いつもなら、もう来ている頃合いなのだが」

「彼女はしばらくはこちらに顔を出せません」

ピクリと祖父の顔が強ばるのを見て、ルカリオは安心させるように微笑んだ。

「現在、彼女は入院しています。その……： 昨晚、子供を産んだのです」

「入院だと？ どこか身体を悪く なに？」

「出産したばかりなのです。安全をとるために、入院しています」

「出産だと？ 子供が生まれたのか？ マリアは無事なのか？」

「はい。母子共に無事に」

頷いたルカリオを、アンジェロは呆然と見つめていた。

「マリアは検査もあるので、しばらくは入院する事になると思います。彼女が退院したら、改めて子供と一緒に挨拶に来ますよ」

「そう……か」

クツシヨンに身体を預けながら、アンジェロがほぅっと思を吐いた。

「子供の性別は？ どちらだったんだ？」

「男の子です。嬉しいですか？」

ルカリオの質問にアンジェロは唇の端を緩めた。

「ああ、嬉しいとも。だがそれは男の子だからではない。あの子が、マリアが無事に子供を産めたからだ」

そして、じっとルカリオの顔を見つめた。その表情から、内心を推し量ろうというように。

「ルカリオ。お前はこれで父親となったわけだ」

「……そうですね」

「マリアはいい娘だ。慎ましく、分をわきまえ、賢い。そして何より、言うべき事を言える強さがある」

「お爺さま？」

「……あのような妻がいるのならば、私も安心できる。なあ、ルカリオ。子供の名前は決めたのか？」

穏やかに笑うアンジェロの言葉に、首を振って答える。

「いいえ。まだです。お爺さまが名付け親になって下さると、マリアから聞いていますよ？」

「はは。マリアはそう言っていたが、お前はどんなのだ？ 初めての子供だ。自分で名付けたかろう」

満たされたように笑う祖父。だがルカリオからすれば、生まれた子供は自分の血を引く存在などではないと知っていた。だから、その子に対して強い思い入れもない。それを祖父に知られるわけにもいかず、ただ微笑んで首を横に振って見せる。

「確かにそうですが……、すでにマリアが約束しているのでしょう？ 私が名付ける権利は、次の子供の時に行使しますよ」

「ははは。もう二人目のことを考えているのか。お前も、どうやら子供を見て親としての自覚が出来たか？」

アンジェロの喜びは真実だった。だが、だからこそ彼は見誤った。ルカリオが、その刹那ほの暗い笑みを浮かべたことに気付かなかった。

「そうですね。では僕はこれで失礼します。また後日」

「ああ。気をつけて帰れ」

一礼して部屋を出ると、執事のマルセルが深々と頭を下げている。「おめでとうございます、ルカリオ様。ご息が無事にお生まれになったと伺いました」

「ああ、ありがとう。マリアが世話になっていたな。こちらこそ、礼を言うよ」

「いいえ。マリア様は素晴らしい奥様です。使用人にも公正に接されるお方です」

「そう、だな」

こうしてマリアの高評価を聞く都度、なぜ皆は彼女の裏の顔に気が付かないのか、と腹立たしい思いが浮かんだ。確かにマリアは散財もせず、今あるもので充足を覚える性質を持っている。そのように振る舞っている。

パーティーにいるような、相手の事など知らないにも関わらず媚びてくるような女達とも違い、ルカリオの言葉を理解しようと勤めていた。初めて出会った頃は、多国籍企業の経済活動についてはあまり詳しくなかったのが、付き合っている間に自力で学んだのだろう。最後にはルカリオと討論できるほどにまでなっていた。

だがそれすらも、全てはルカリオ達を欺くための、擬態なのだ。彼女は清楚な顔をしておきながら、見知らぬ男に股を開く淫売だった。別の男との間に作った子供を、ルカリオとの間の子だと偽ってアジャーニの妻としての座を得ようとしたのだ。これが強欲の証拠でなくて、なんだというのか。

今も、金を遣う様子を見せなかったが、それとて演技でないと誰が保証できる。

「まったく」

だがそれでも。

子を産んだばかりの彼女は、美しかった。
クシャクシャな顔をした子供は、かわいらしかった。

「バカな」

一瞬胸に湧いた感慨を放り投げ、ルカリオはアンジェロの屋敷を後にしたのだった。

小さな赤ん坊を腕に抱き、母乳を与える。

たった3kgという重量が生きているという奇跡に、マリアは感謝していた。

不慣れな彼女を助けるように看護師が手を貸してくれる。それに感謝しながら、去っていった夫の背中を脳裏に思い描いていた。

「でも本当に、お父さんにそっくりね」

看護師の言葉に、マリアは物思いから顔を上げる。

「え？」

「早朝にね、ここに来ていたのよ。あの、あなたの旦那さんが」

看護師の言葉に、思わず呆然としてしまった。

来ていた？ 彼が、ここに。

自分と会うよりも前に、この病院に。

「あの、それからどうしたんですか」

「あなたを無理矢理起こそうとしていたから、部屋からたたき出したの。そしたらあなたの夫だなんて言うもんだから、一応新生児室の外から赤ちゃんを見せてあげたわ」

闊達に笑う看護師の言葉を聞きながら、マリアはほんの僅かに点る希望を自覚していた。

もしかしたらルカリオは、自分や子供の事を心配してくれていた

のではないか？

開口一番に自分に怒ったのも、心配の反動だったのではないか。

それにこの子を見れば、いくらルカリオでも気付くはずだ。この子は、アジャーニの血筋を色濃く受け継いだ顔立ちをしている。

誰が見たって、この子はルカリオ・アジャーニの子供以外の何者でもない。

マリアは、ルカリオが自分の間違いに気づき、子供や自分への誤解を正してくれる事を願いながら、無心に乳房を吸う赤ん坊の頭を撫でるのだった。

マリアの退院は、出産から数日後の事だった。子供を抱きかかえたマリアは、世話になった看護師に頭を下げた。

「本当にお世話になりました、ミレルさん」

「いいのよ。これがお仕事なんだから。……それよりも、今日は旦那さん、来てないの？」

「あ、いえ。下の駐車場にいます。この後、お爺さまに会いに行く予定なので」

マリアが苦い笑みを浮かべる。ルカリオが病院を訪れたのは、あの後に一度きり。退院の日付を確認し、その日にアンジェロの屋敷を訪れると伝えに来た時だけだった。

今も、もしかしたら待っているのはルカリオではなく、彼のボディガードの誰かなのかも知れない。けれどそんな不安を、看護師に知られるのは嫌だった。

腕の中にある暖かい命。自分の子供。ルカリオとマリアの血を分けた、我が子。このぬくもりがあるだけで、マリアは心が強くなるのが分かる。恐れてはいられない。迷ってもいられない。この子を守るために、マリアは強くならねばならないのだ、と。

「では、お世話になりました」

「お気を付けて。子供はすぐに熱を出したりするので、なるべく目を離さないようにして下さいね」

「ええ。ではこれで」

マリアは肩にかけた荷物を直し、子供を抱き直す。

名前はまだ決めていない。アンジェロに名付け親になってもらえるように頼んだからだ。だからマリアは腕の中の子供を『私の太陽』と呼んでいた。

病院のエントランスを抜け、駐車場へと向かう。その途中に立っていた黒服の男がマリアへ頭を下げた。

マリアに以前ついていたボディガードの一人だと気づき、マリアも会釈を返す。

「お待ちしておりました。車を待たせております。こちらへ」

マリアを誘導しながら、男はちらりと彼女を見下ろした。

「可愛い坊ちゃんですね」

「あ……ありがとうございます」

油断なく周囲を確認しながら、けれども男は苦い笑みを浮かべていた。

「いえ。私どもがきちんと奥様に着いていれば、お一人で病院までタクシーで向かう事も無かったです。これは私どもの手落ち。

申し訳ありませんでした」

「ま、待つて下さい！ 私のガード体制は……ルカリオの命令で大幅に緩められていたはずですよ。あなた方のせいではないでしょう？」

「いいえ。どんな理由があれ、対象を一人で歩かせた時点で、何が起こったとしてもおかしくはないのです。そこでもし奥様が襲われたとしたら、我々は職務の遂行すらできなかつたでしょう。ましてや、全てが終わってからボスに報告など 我々の職務怠慢以外の何者でもない」

男は悔しそうに俯いた。

「改めて謝罪いたします。無論、我々の処分について奥様がどのように指示されようと、我々は従います」

男の顔をマリアは呆然と見上げていた。

ボディガード達は、いつだってマリアの傍にいた。それは対象を守るというよりも、対象を監視するためだという事を、マリアは気付いていた。実際、ガードするなら見えない場所から守るよりも、傍にいつでも貼り付いているほうが楽だからだ。ルカリオのガードは、そうやって行われている。だがマリアのガードは、むしろ彼女から距離を取っていた。

今、目の前で自分の言葉を待っている男も、そのうちの一人だつたはずだ。彼らのリーダー役だったと記憶している。最初に引き合わされ、そういう体制でガードを行うと通告されていた。

マリアからすれば、それもやむなしと考えていた。ルカリオが自分をどう見ているのかなんて、結婚して一ヶ月もしないうちに理解をさせられていたからだ。

そしてあのサンドラという女性が現れてからは、マリアのガード体制は大幅に緩められた。その余剰人員がどこに配置されているのかなど、マリアにも想像がついた。

だが彼は、そんな扱いを受けているマリアを、奥様と呼んだ。

「……我々は、あなたこそがアジャーニの妻に相応しいと考えます」
男の言葉には真摯な響きがあった。真剣な男の顔を見上げる。

「あの……お名前、聞かせていただけますか？」

男はキョトンとした顔をして、それから苦笑した。

「ルシッドと申します。マーク・ルシッド」

「ではミスター・ルシッド。あなた方のガード体制はボスであるルカリオの指示です。あなた方は雇い主に逆らう事はできない。あなた方は職務を忠実にこなしていた。そう考えます」
腕の中の赤ん坊を抱き直しながら、マリアは微笑んだ。

「これからもよろしくお願いします」

「……了解しました」

ガードはマリアの手から荷物を受け取り、歩き出す。

本来ならばガードがそんな真似をするのは、ガードとしては自殺行為である。いざというとき、対象を守るための盾となるべき人間が余計な荷物を抱える事は、即応性を鈍らせるからだ。

だが、今回はガードとしてマリアを迎えに来た訳ではない事を理由に、マークは彼女の荷物を受け取っていた。ルカリオのガードのため、この病院の周囲にもボディガード達が配置についている。だからこそ出来た行動だった。

「ありがとう」

「いえ」

微笑むマリアの笑顔が曇らねば良い。マークはそう願わずにはいられなかった。

「来たか」

車の後部座席で書類を眺めていたルカリオは、自分のガードに連れられて車に歩み寄ってくるマリアを目に留めた。

そこでマークが彼女の荷物を持っている事に気付き、眉を寄せた。確かにマークは彼女の護衛ではない。それでも、優秀なガードの一人であるマークが、準護衛対象とはいえ、手をフリーにしている事が信じがたかった。

同時に、自分のガードのためにいたはずの人間が、幾人が配置距離を広げてマリアを護衛対象としている事に気付き、鼻を鳴らす。

果たして連中はどういふつもりなのか。無論、ルカリオの周辺は、十分な人数のガードで囲まれている。それでも、マリアを守るために彼らが自主的に動いている事が不愉快だった。

雇い主の意向を無視した事について、ペナルティを考える必要がある。そう思いながら、ルカリオは車に乗り込んできたマリアを見た。

小さな赤ん坊を抱き、ルカリオの隣に座る。

なにやら声を上げながら子供が手足をバタバタさせるのを見て、ルカリオはもう一度鼻を鳴らす。

「お待たせした……かしら」

「いや。大丈夫だ。顔色は良くなったようだね」

「え？ ええ」

「この子も大丈夫なのか？ さっきからもぞ動いているが」

「……初めて病院を出たから、少し興奮してるみたい。あの、抱いてみる？」

言ってマリアは子供をルカリオに差し出す素振りを見せた。

ルカリオは、この子が産まれてから一度も触れていなかった。無論、抱き上げた事もない。父親というものは、子供を未知の存在だと考え、どこかで恐れていると聞いていたから、マリアは歩み寄るようにルカリオに微笑んでみせた。

約一年ほど自分の体内で同居しているだけに、母親は下手をすれば子供を自分の一部と誤認してしまうほど同一視するそうだが、父親は違う。彼らにとって、子供とは異分子なのだそうだ。

だから、産湯につかわせる時などに父親がそれを行うことで、心理的な距離を埋めていくのだろう。ましてやルカリオはビジネスの世界で成功した男性だが、だからこそこんな赤ん坊など触れた事もないだろう。

少しでも慣れて欲しくて、マリアはルカリオの腕に子供を渡す。

「お、おい！」

「首がまだ据わってないから、きちんと支えてあげて。……そう。そうやって抱くの」

ルカリオは慌てながら、それでも子供を放り投げるような事はしなかった。

ただ身動きできなくなったらしく、マリアが指示した姿勢のままで固まっていた。

「もう。そんな怯えなくても大丈夫よ？」

「ち、違う！ 子供の世話は君の仕事だろう！」

「……あなたの子供なの。だから、抱いてあげて」

マリアの囁きはルカリオの耳には届かなかった。狼狽えて早くマリアに返そうとするルカリオを見て、マリアは思わず笑ってしまう。
「っつマリア！」

怒鳴りつけるルカリオの大声に、腕の中の子供が泣き出す。それを見てさらに狼狽えたルカリオの顔を一通り眺めて満足したマリア

は、ようやく彼の腕から子供を受け取った。

「はいはい、大丈夫よ。パパはちよつと声が大きいだけだからね」
そう言っつて子供をあやすマリアの横顔は慈愛に満ちていた。その名の通り、聖母のような美しさと優しさが満ちあふれていた。

その横顔にハツとしながら、それでもルカリオは鋼の意志で視線を窓の外へと向ける。

彼女のそんな姿も、どうせ欺瞞なのだと心の中で言い聞かせながら。

その日、マルセルは朝から主がそわそわと落ち着かない様子で何度も時計に目をやるのを眺めていた。だがマルセル自身もまた、常の沈着さが嘘のようにそわそわとしていた。

いや。それは彼らだけではない。この屋敷で働く使用人達が、皆どこか浮ついた様子で今か今かと首を長くして待っているのだ。

そしてそれは、やってきた。

「……お久しぶりです。アンジェロ」

「おお、マリア！ 無事でなによりだ！ その子が？」

ベッドの上で満面の笑みを浮かべるアンジェロに、ドアを開けたばかりのマリアが思わず笑みを漏らす。

「お爺さま。あまり興奮されると、身体に毒ですよ」

「なんだルカリオ。お前も居たのか」

しれっと返すアンジェロに、思わず使用人達が苦い笑みを浮かべる。

ルカリオはといえば、平然とした顔で祖父に歩み寄った。

「ええ。居ますとも。今日連れてくると言っただでしょう？」

「マリアとその子が来てくれれば、それで十分だ」

「ひどいな」

クスクスと笑いながら、ルカリオはマリアへ身体を向ける。

「どうぞ。あなたの曾孫です」

そう言っただけでマリアが腕の中の赤ん坊を、アンジェロへと向けた。目を開いてきよときよと周囲を見ている赤ん坊が、目の前のアンジェロへと視線を向ける。その目に映るアンジェロの顔は蕩けきったような笑みが浮かんでいた。

「おお……。アジャーニの特徴がよく出た顔立ちをしとるな」

「ええ。髪の色や鼻の形はルカリオにそっくりです」

マリアの言葉にアンジェロも何度も頷いて見せる。

「抱いてあげて下さい」

「どれ。……ほ。懐かしいな。ルカリオもこうして抱いたものだ」

アンジェロが眦を下げて笑う。赤ん坊もそんな空気を感じたのだろう。きゃっきゃと笑った。

「ははは。良い声で笑うな、この子は」

「ありがとうございます」

微笑むマリアにアンジェロは頷き返し、マリアとルカリオへと視線を向けた。

「二人も、これで晴れて親となった訳だな。どうだね、気分は」

「正直、まだなんとも。実感が湧きません」

「……私は、身体が軽いのが慣れなくて。ずっとこの子がお腹にいたのに、もう居ないんです」

その問いにルカリオはただ肩をすくめ、マリアは自分のぺったりとなった腹部にそっと手を添えた。自分の腕の中でもぞもぞと動いては、「あー」と声を上げる赤ん坊を見下ろし、アンジェロは破顔する。

「はっはっは。その代わり、大きくなるまでは君の手の中にいるだろうて。なあ、ルカリオ？」

「……そうですね」

頷く孫をちらりと見て、ルカリオはほくそ笑んだ。

ルカリオの反応の鈍さは、産まれた子供を見た事によるものだろう。孫の中に父性が芽生えつつあるのを見てとり、アンジェロは心の中でほっと息を吐いていた。

ルカリオとマリアの間にある緊張感。そして時折見せるマリアの不安げな表情。それをずっとアンジェロは気にかけていた。二人はアンジェロに何も言わない。だが、二人の間に距離がある事は屋敷の人間が全員気がついていた。ただ、マリアがそれを見せないように振る舞っていたからこそ、屋敷の人間も気付かないふりをしてい

ただけなのだ。

だが、今。ルカリオは確かに産まれた息子を気遣っていた。本人も無自覚なのかも知れない。だがそれでも　こうして時間をかけて行けば、二人の間の不可思議な距離も縮まるのではないか。

アンジェロはそう考えていた。

「それで、お爺さま。名付け親の件ですが」

ルカリオが切り出した言葉にアンジェロは眉を上げる。ルカリオがマリアとの間にあった空気を振り払うように、唐突に口を挟んだ事が訝しかった。

「なんだ。やはり自分で付けたくなったのか？」

「いいえ。ですがいつまでも、『この子』などと呼ぶのは可哀想でしょう。名前の候補は決まっていますのですか？」

「ああ。決めてある」

頷いたアンジェロは、自分の腕の中の赤子をマリアに渡し、ベッド横に置かれた引き出しから紙を取り出した。

「色々考えたがな。これが良いと思うのだ」

手渡された紙に視線を落とし、マリアは微笑んだ。

「ジョシユア……ですか」

「ああ。良い名前だろう？」

アンジェロに微笑み返し、マリアは紙をルカリオへと手渡す。

ルカリオはといえば、受け取った紙を一瞥して頷いただけだった。

「ではこの名前で届けを出さなくてはいけませんね」

「ああ。初めまして、ジョシユア。君の曾祖父だ」

にっこりとマリアの腕の中のジョシユアと名付けられたばかりの赤ん坊へ笑いかける。

きやつきやと笑い声を上げるジョシユアに臍を下げながら、マリアは頷いた。

「はじめまして、ジョシユア。あなたのママよ。そして……あなたのパパ」

ルカリオへジョシユアを向ける。ジョシユアが大きな目で見上げると、ルカリオはゆっくりと屈んで微笑む。

「はじめまして、ジョシユア。僕はルカリオだ」

だー、などと声を上げる赤ん坊の頭を撫で、ルカリオは立ち上がった。

「申し訳ない。僕はこれから会議があるので、もう行きます。……」

マリア。君はどうする？ 戻るなら車で送るが？」

「……こんな時くらい、仕事を休めば良からうに」

「海外の取引先との商談なんですよ。さすがに個人的な理由でスケジュールを動かせないでしょう？」

まったく、とアンジェロが嘆息する。それに一礼してルカリオが部屋を出て行く。

その背を見送り、振り返ったマリアはギョツとした。

アンジェロがじつと自分を見つめていたからである。

「……あの？」

「大丈夫かね？ 今朝退院したばかりなのだろう？」

「あ、ええ。はい。大丈夫ですよ、アンジェロ」

苦笑いで答えるマリアを、些細な嘘も見逃さぬとばかりに、じつと見つめるアンジェロ。その視線と表情が気遣ってくれていると理解できて、マリアはもう一度「大丈夫ですよ」と繰り返した。

「なあ、マリア。なんだったら、この屋敷で暮らさないか。ベビーシッターの用意もしていないのだろう？」

「ええ。でもどうせ私、一日中家に居るわけですし」

「気晴らしの一つもできねば、ノイローゼになるぞ。うちの人間なら気にする必要はない。連中、君が来るのを楽しみにしているのだからな」

「ありがとうございます。でもしばらくは……一人で、いえ、ルカリオと二人でやってみようと思います。どうしても大変だったら……お世話になっても良いですか？」

窺うように尋ねたマリアに、アンジェロは笑顔で頷いて答えるのだった。

「そうだ。アンジェロ。もう一つ、お願いしてもよろしいですか……？」

「なにかね？」

「……この子、ジョシユアとあなたのDNA鑑定をしたいのです。マリアの思い詰めた顔を見つめ、アンジェロは首を傾げてみせる。「なぜかね」

「私の妊娠は、ルカリオとの結婚前に発覚したものです。……言っではなんですが、この子がルカリオの子ではない、などと影口を叩かれる可能性があります。ですから」

「だったらルカリオとの親子関係の判定を行えばよからう？」

アンジェロの言葉はもつともだ。本来ならば、マリアとてそうしたかった。

だが。

「駄目なんです。ルカリオは『そんな必要はない』と繰り返すだけで……検体の採取にも応じてくれません」

「ならば、それで良いだろう？」

「駄目なんです。この子がアジャーニの一族の血を引くのだ、と。そう科学的な根拠を与えない限り、この子を疑う人間が必ず現れます。……ですからアンジェロ。お願いします。ジョシユアとのDNA鑑定を受けてはいただけませんか……？」

必死な顔をするマリアをじっと見つめ、アンジェロは頷く事しかできなかった。

どこか鬼気迫るマリアの様子には、それだけの迫力があつたのだ。

「……ありがとうございます」

礼を言いながらホッとしたように微笑むマリアは、どこか儚く見えたのだった。

退院して一週間も経たないが、マリアは再びジョシユアを連れて屋敷を訪れていた。それはルカリオからの電話のためだった。

「……アンジェロ」

ベッドの上で呼吸器をつけられた状態で横たわる老人。闊達なジョークを飛ばした老人は、その生命の火を弱めている。

医師が傍で見守っている中、マリアは彼の傍に座る。膝の上に抱いたジョシユアは、周囲の重苦しい空気など物ともせず、あちこちを見ていた。

「マリア……か……」

彼と笑いあったのは、ほんの数日前のことだった。だが今や、アンジェロは身体を起こす事すらできないほど衰弱していた。

「どうか気を確かに。大丈夫、すぐに良くなります」

節くれ立った手を握り、マリアは努めて明るい声を出した。

「それにほら。ジョシユアと遊びに行く約束だって……」

「マリア。無理をしなくても良い……。自分の身体のことだ。大体のことは、わかる」

「そんなこと……!」

「ルカリオ」

マリアの背後に立っていたルカリオが、ベッド傍に膝をつく。

「お爺さま」

「……曾孫の顔を見ることができた。嬉しいよ、私の孫よ」

もう片方の手をルカリオに延ばそうとする。それを握りしめ、ルカリオもまた強ばった表情を祖父へと向けた。

ルカリオにもマリアにも分かっていた。

アンジェロの命は、もう長くはない。もうすぐ彼は昏睡するだろ

う。医師もまた、事前に二人にそれを伝えていた。

元々、マリアが現れてからの彼の快復ぶりこそが奇跡だったのだ。それはひ孫を見たいという執念にも似た願いが可能にした奇跡だったのだろう。そしてその願いは叶った。ならば　その終焉もまた、訪れることは不可避だ。

「ルカリオ……」

アンジェロにとって、ルカリオは自慢の孫だった。

息子夫婦が事故死してからは、自分の子供のように育ててきた。アジャーニの総帥としての立場があるから、良い父親とは言えなかっただろう。だがそれでも。ルカリオは次の総帥としての才覚を發揮してくれた。

唯一の問題があるとすれば、幼い頃からルカリオの周囲には、彼を利用しようとする存在が多くいた事だろう。彼はそれを見極める技術を自ずと磨き、結果、ひどく頑迷な人物になってしまった。

女性に対しても、常に一線を画していた。ただベッドを暖めるだけの存在。彼はどこかで、そんな風に考えていたのかも知れない。愛情ある家庭を作るための、大切な相棒。そう思わせる事ができなかった。

だから、マリアを妻だと紹介した時には、驚いた。

彼女はこれまでルカリオの周囲にいた女達とは、まるで違っていったから。金銭に溺れることなく、自分が立っている場所をいつも正確に把握してられる。なによりも暖かい家庭を作り出すことができる暖かさを持っていた。

子供を妊娠しているのだ、という言葉にも驚いた。

「マリアと、仲良くな……」

だが同時に、不安も感じていた。ルカリオの側にある、不可思議な冷たい空気。自分の前ではうまく隠しているが、そもそも二人が連れだって現れる事の少なさが、二人の関係の奇妙さを示していた。

だが、今。二人の間には子供が生まれた。ならばきつと。願うようにアンジェロは思う。

どうか、ルカリオが大切なものを大切なのだ気づけるように。握り替えされた手の力強さを感じながら、ルカリオはマリアへ視線を向ける。

「……マリア。どうか、この孫のことを、頼む」

細く小さな手が、強く強く握り替えしてきた。

マリアは、涙を目に溢れさせながら何度も頷いている。

その膝の上で、小さなジョシユアがきよとした目を自分に向けていた。

それに笑いかけ、アンジェロの意識は白く混濁した世界へと埋没するのだった。

「お爺さま！」

ルカリオが叫ぶ。医師が慌てて駆け寄り、祖父の容態を確認する。「……お眠りになっただけです。ただ……」

今夜が峠だ、と。そう告げる医師の言葉を聞きながら、ルカリオは祖父の節くれ立った手を強く握りしめる。

この手は、ルカリオにとって祖父のものであり、父のものであった。父が死んだことで一度は退いたアジャーニ総帥に再び就いた祖父の元で、彼は育ったのだから。

子供の頃は、とても大きく見えていた。その皺だらけの手が、自分を撫でるのが好きだった。

信頼するように肩に置かれた手が、とてもとても誇らしかったのを覚えている。

彼から総帥の座を譲ると言われた時も、誇らしかった。祖父に認

めてもらえるように全力で走り抜けてきたのだ。そして、それに見合うだけの成果を出し続けてきた。

敬愛する祖父が、小さな老人だと感じるようになったのは、いつからだろうか。

自分の隣で、アンジェロをじっと見つめる女性。マリアは涙を流しながら、膝の上の子供を抱きしめていた。

「……今夜はここに泊まるう。マルセル。すまないが用意を」
「かしこまりました」

老執事に告げ、病室を出る。彼がいない間の仕事の指示を出しておく必要があった。

「ルカリオ様。お茶をお持ちしましょうか？」

「ああ。すまん。図書室にいる」

「はい」

深く頭を下げるマルセルに頷き返し、ルカリオは携帯電話を取り出すのだった。

医療機器の立てる音が耳につく。

マリアはアンジェロのベッドの傍に座ったまま、医師達と眠る義理の祖父の姿を見つめていた。

ルカリオと結婚してから、ここはずっとマリアにとって逃げ場所だった。誰も帰ってこないマンション。自分に対して距離をとり続ける夫。そして、妊娠して思うように動けない自分。

そんな何もかもを受け入れてくれたのは、アンジェロだった。彼はジョークを飛ばしてマリアを笑わせ、アジャーニの歴史を教えてくれた。アジャーニの妻として必要とされる知識を、惜しみなく分け与えてくれた。

今、そんな恩人が永遠の旅に出ようとしている。

「……アンジェロ」

膝の上でもぞりと動いたジョシユアが、眠る曾祖父に手を伸ばす。

「あなたのひいお爺さまよ。ジョシユア。……どうか、覚えていてあげて」

あなたが産まれるのを、本当に本当に、誰よりも楽しみにしてくれていたのだから。

言葉に出すことなく、それでも心の中で思う。

誰がどんなにそれを先延ばしにしたいと願ったのだとしても。

それでも、人は終焉を迎える。

アンジェロ・アジャーニが息を引き取ったのは、その日の深夜遅くの事だった。

マリアは眼前が暗くなっていた。

目の前に立つ男の言葉が理解できない。

「よろしいですか？ ミス・ウォートン。ミスター・アジャーニは、こう仰っています。『あなたと婚姻関係にあった事実はない』、と髪を神経質なまでに撫でつけて、広い額をあらわにした眼鏡の男。きっちりネクタイをしめたスーツ姿には、隙はない。

「どういう……意味ですか」

「ですから、先ほどから申し上げています。あなたがこのマンションを退去するのは、三日後までとさせていただいています。これはミスター・アジャーニの寛大な処置によるものです。乳飲み子を抱えて今日明日に出て行けと言わない彼の温情に感謝されるべきかと」
「待って下さい。私は 私とルカリオは、結婚しています！ それがなぜ、ここを出て行かなくてはならないんです！？」

アンジェロの葬儀を翌日に控えた夜。マリアはマンションへと帰されていた。屋敷は人が行き来していて、確かに乳飲み子を抱えたマリアは邪魔でしかないだろう。だから、その指示には大人しく従った。

だが、その後にマンションを訪れたルカリオの弁護士だという男性が、マリアを呆然とさせる言葉を吐いたのだった。

三日以内に、このマンションを出て行け。

言葉を色々と飾ったが、結局のところ言いたいことは、それに集約された。

「結婚？ おかしな事を仰る。あなたとルカリオ・アジャーニの間

にそのような関係はありません。これは法的にも確認されています」
「そんな……！ 登記所で書類を提出したはずです！」

「そのような書類は提出されていません。これは、法律の専門家として、私が責任を持って言えることです。ルカリオ・アジャーニは独身です。これまでも、これからも」

男の怜悯な言葉にマリアは呆然とするしかない。

自分がルカリオの妻ではない？ そんなはずはない。確かにこの一年近く、自分はそういう存在として扱われていたはず、だ。

「……失礼ですが、ルカリオ・アジャーニが結婚したなどというニュースは聞いた事がありません。あなたは、ご自分の妄想にとりつかれているではありませんか？」

「妄想……？ そんなはずはありません！ だったら、ジョシユアは、あの子はなんだというんですか！」

マリアの叫びに、弁護士は眉一つ動かさない。ちらりとマリアの腕の中のジョシユアを一瞥し、眼鏡のフレームを人差し指で押し上げる。

「ミスター・アジャーニは、ご自分の子供ではない、と仰っています」

「そんな……それを信じるといいますか！？」

「あなたの言葉には、何一つ証拠がありません。あなたはルカリオ・アジャーニの妻だとおっしゃる。だが私の手にある登記所の書類にはルカリオの妻の欄は空欄のままです」

そして、と続けられる言葉が、マリアの身体を縛り付ける。

「そのような虚言を吐く人間の言葉と、アジャーニの総帥であるルカリオの言葉と、どちらが信頼をおけると思えますか？」

「虚言なんかじゃ……嘘なんかじゃありません！」

叫ぶマリアを一瞥して、弁護士は肩をすくめて見せた。

「虚言癖が無いのであれば、妄想癖があると考えられます。いい精神科を知っています。ご紹介しましょうか？」

「私は嘘をついているのでもなければ、現実と夢の区別が付かなく

なっているわけでもありません！ 確かに私は彼と結婚したし
「ですから。何度も申し上げる通り、そのような法的な事実は存在
しません。あなたとルカリオが恋人であった事は確かでしょう。
が、この半年ほどの間は、彼はこの部屋へほとんど訪れていないと
いうではありませんか」

「ッ」

「それにあなたがこの国に入国した時、すでに妊娠していたとも聞
いています。……失礼ですが、その子供は別人の子供なのでは？
ルカリオは子供との血縁関係を否定しています」

「そんな……そんなの嘘よ！」

「……では、三日以内に立ち退いていただけますよう、お願いいた
します。立ち退いていただけない場合、法的な処置を執行させてい
ただく事になります。そのような不幸な事にはならないよう、お考
え下さい」

弁護士は書類を鞆にまとめて放り込むと、ソファから立ち上がる。
目の前で呆然としたまま、赤ん坊を抱きかかえた女性を一瞥する。

「ああ。それと」

「……？」

怪訝そうに顔を上げたマリアを見下ろし、弁護士は最後の通告を
言い渡す。

「あなたはアンジェロ・アジャーニの葬儀へ出席はできません。
もしも会場へ現れたなら、ガードマンによって速やかに排除されま
す。ご理解下さい」

「ま……待って下さい！ どういう事ですか、それは！」

「ミスタ・アジャーニからの通告です」

「そんな……アンジェロの、義理の祖父の葬儀に立ち会っな、と？」

はい、と頷く弁護士にマリアは今度こそ目の前が真っ暗になった
気がした。

アンジェロはマリアにとって、もう一人の祖父だった。妊娠中、色々なことを教えてくれた。その軽妙洒脱な話術で、沈みがちだったマリアを何度となく笑わせてくれたのだ。

その彼の葬儀に出席するな？

彼がその誕生を楽しみにし、名付け親となってくれた彼の死を、自分とジョシユアに見送るな？

ルカリオは、本気で自分を排除しようとしている。それを実感し、身震いが止まらなくなった。腕の中で眠るジョシユアだけが、まるで現実のように感じられる。

「……ルカリオ」

携帯電話を取りだし、すぐさま彼へと電話をかける。

だが聞こえてくるのは、無情な呼び出し音だけだ。

「……どうして！」

知らず叫んだ瞬間、ジョシユアが身動きして泣き出す。

慌てて腕の中の赤ん坊をあやししながら、マリアはもう一度「どうして」と呟いていた。

答えは分かっている。彼は始めからこうするつもりだったのだ。結婚式を挙げなかったのも、登記所で書類だけを提出して済ませたのも。そしてそれすらも、フェイクだった。そういう事なのか。

「……ならば、私は」

ただアンジェロに心穏やかに死出の旅立ちに送るためだけに用意された、偽物の妻。

ふざけている。ふざけ過ぎている。どこまで　どこまで人を馬鹿にすれば良いというのか。

アンジェロの死を見送る事はできないだろう。救いは、彼の死に目に立ち会えた事だけ。そう。あの場で彼を見送れたのならば

埋葬の現場に立ち会う必要は無いのかも知れない。

マリアの胸中に湧くのは怒り。そして悲しみ。結局のところ、彼は最後までマリアを信じてはいなかったのだ。妻という立場を与えてすらいなかった。彼は徹頭徹尾、ジョシユアが他人との間の子供だと決めつけていたのだ。一考の余地なく、ルカリオは自分の思う通りにした。そして利用した。ただただ、彼の敬愛する祖父の心残りをなくすためだけに。

マリアはふらりと立ち上がると、腕の中の子供をベビーベッドに一度寝かせると、自室へと戻る。そして十分ほどでまた居間へ戻ってきた。

その手にはスニーカーが一つ。かつて彼女が使っていたものだ。「行きましよう、ジョシユア。……ごめんね」

赤ちゃんを抱き上げると、マリアは部屋を出て行く。

その間、マリアが振り返る事は一度も無かった。

「ジョシュア！」

隣に住んでいるアメリカ・フェネットの弾けるような声に、ジョシュア・克蘭ベルは顔を上げた。

手に持っていた凶鑑と、庭に咲いていた見た事のない花を見比べていた彼を頭上から見下ろすアメリカは、くるくると巻いたブルネットの髪を風に揺らしている。その癖ツ毛をアメリカが嫌っているのを知っている（彼女は姉のリサのような癖のないストレートヘアに憧れているのだ）が、ジョシュアはアメリカのそんなクルクルの髪の毛が隙だった。

「なにやってるの？」

「凶鑑と見比べてた。これ、見た事のない花だから」

彼が指さした花を見て、アメリカも一緒に凶鑑を覗き込んでくる。すぐ隣にぴったりとくっついた幼なじみの少女に、ジョシュアは少しだけドキリとする。それと同時に鼻を鳴らす。

「甘いにおいがする」

「ママと一緒にケーキを焼いてたの」

「マドレーヌ？」

「うん。あとで一緒に食べましょ？」

アメリカの誘いに頷き返し、ジョシュアは凶鑑のページをめくる。父が買い与えてくれた百科事典は、ジョシュアの宝物だ。見た事のない異国の植物や風俗が描かれたそれは、ジョシュアにまだ見ぬ世界を想像させてくれる。

「……………これじゃない？」

アメリカがあるページを指で止める。

「どれ？ ……なんだか形が少し違うない？」

「そう？　一緒に見えるけど」

色や花の形は確かに似ているが、がくの形状が違うようにも見える。個体差という奴かも知れないが、ジョシユアには判断がつかない。

「……パパに聞いてみよう」

著名な学者であり、とある有名大学の教授である父に聞くことを決めると、ジョシユアは図鑑をぱたりと閉じた。それを合図と知っているアメリカが、ぱつと立ち上がってジョシユアの手を引く。

「じゃあ、遊びに行きましょう！」

「うん。あ、でも待って。これを置いてくるから」

手にした図鑑を掲げ、ジョシユアは駆け足で自宅へと飛び込む。

「ママ！　アメリカと遊びに行ってくる！」

「気をつけてね」

ダイニングで書き物をしていたらしい母が、ジョシユアを見送るために出てくる。そんな母に頷き返し、アメリカの元へと走って戻る。

ジョシユア・克蘭ベルにとって、両親は尊敬する存在であり、幼なじみは少々口うるさいが可愛らしく守るべき存在であり、世界は光に満ちたものだった。

ヘレン・克蘭ベルは息子が隣のガールフレンドと連れだって庭を出て行くのを見送り、ダイニングへと戻った。テーブルの上に置かれた数葉の写真。それはいずれも、彼女の愛息を写したスナップ写真だった。つい先日、誕生日を迎えたばかりの彼のパーティーの様子を写したものだ。主役のジョシユアだけでなく、克蘭ベル夫妻やフェネット一家の姿も写っている。それだけでなく、日頃か

らヘレンたちが撮っている家族のスナップ写真から、いくつかが選
び出され封筒へと入れられるのを待っていた。

ヘレンはそれを一枚一枚確かめ、封筒にまとめて入れる。便せん
もメッセージカードも入れずに封をすると、宛名をさらさらと書き
入れた。

返信用のアドレスは書き入れない。それを書く事は、相手から固
く禁じられていた。

「五年目、か……」

ヘレンは小さく呟く。封筒を持って郵便局へ行くついでに、少し
ばかり買い物をしてこようと考え、ハンドバッグを手に取るのだっ
た。

その手紙は毎年、ジョシユアの誕生日の数日後に送られた。宛先
はとある大都市の郵便局の私書箱宛になっており、そこから先では
どうなっているかは分からない。

これは克蘭ベル夫妻にとって、履行すべき唯一の契約事項であ
り、何よりも守るべき約束だった。

五年前、不妊治療の甲斐なく妊娠することのできなかつた克蘭
ベル夫妻は、とてもギスギスした空気を家庭内に漂わせていた。お
互いが悪いわけではないと分かっている、毎月生理がくるたびに
夫も自分も落胆する。そのたびに、何か澱みのようなものが二人の
間に堆積していくのを感じていたのだ。

そんなある日、一人の女性がヘレンのかかっていた産婦人科の医
師の紹介で、克蘭ベル家を訪れたのである。

女性はその腕に小さな赤ん坊を抱いていた。

そして彼女が克蘭ベル家を辞した時、その手には赤ん坊は抱か
れていなかった。

不妊に悩む夫婦が養子をとることは、この国では別に珍しいこと
ではない。ヘレンも、その夫であるリチャードも、お互いに自分を

責めることに疲れていたのだろう。その女性が望んだ契約事項が少々風変わりであったのだとしても、彼らはそれを受け入れた。

一年に一度、女性が指定した宛先へ、子供の写真を送付すること。女性からは決して真相を明かすことはしない。子供に近づくこともしない。彼女が持つ親権の全ては克蘭ベル夫妻へ移譲される。それだけである。

宛先は最初に一度だけ、手紙が届いた。確認後は破棄するようにとの言葉と共に、私書箱の番号が書かれていた。

それ以後、女性からの連絡は無い。ジョシユアが養子である事を、本人に教えるかどうかも、克蘭ベル夫妻に一任されている。

自分の名すらも、本来ならば名乗るべきではないのだろう、とその女性は言った。女性の名はマリア・ウォートン。子供の名前はジョシユアといった。

克蘭ベル家を辞する前、マリアは一度だけ、ジョシユアを抱きしめた。その姿は離れがたい何かを、無理矢理に引きはがしているように見えて、思わずヘレンは考え直すことを勧めてしまったほどだ。

だがマリアは疲れ切った顔で、首を横に振るだけだった。

そして、それから五年の月日が過ぎたのである。

克蘭ベル夫妻は約束を守り、一年に一度、ジョシユアの写真を指定された宛先へ送っている。ジョシユアが幸福に育っているのだと、せめてそれだけでも知らせたいと願っているからだ。それによって彼女が傷つく事も想像はできる。けれども　せめて、あの傷つき、疲れ切った女性に救いあれと願っていた。

3 4 (後書き)

1 6 : 2 3 誤字訂正

地下鉄を使つて二駅離れた郵便局から帰つたマリアは、薄汚れた階段をゆっくりと登ると粗末な鍵を開けて、自宅へと歸つてきた。

ダウンタウンの古びたアパートは、家賃の安さと引き替えに物騒でスリリングな周辺環境を提供してくれる。初めてここに来たときは見知らぬ土地だったが、五年も暮らせば顔見知りも増え、馴染みの店もできた。

それに『職場』に近いこともあつて、マリアはこの部屋を離れるつもりはなかつた。

寝室に入ると、引き出しの二重底にしてある下から一冊のアルバムを取り出す。手紙を開いて、中に収められていた写真を取りだし、一枚一枚をじっくりと眺める。

そこには大きくなった少年が写っていた。バースデイパーティーの写真だろうか。ケーキを前に得意げな顔をした少年が笑っている。その隣で、可愛らしい少女がおめかしして座っていた。彼らを囲む家族が笑っている。

それを一つ一つ、丁寧に確かめるように指先でなぞり、マリアは微笑んだ。

アルバムに丁寧に収めると、引き出しに片付ける。そして封筒は灰皿の上で火を付け、灰となつていくのをじつと眺めた。

アルバムには、五年の歳月が閉じ込められている。ジョシユアを連れて帰国したマリアは、そのキャリアを活かすことの出来る仕事に就くつもりだった。シングルマザーは今の世の中では特段珍しいものではない。仕事さえあれば、母子二人で生きていくことは可能はずだった。

だが、それが無理だと知れたのは、随分と早い時期のことだ。な

ぜかマリアは、自身のキャリアを活かす仕事に就くことができなかつた。一度は好感触な反応を得ても、帰宅した頃には面接先の会社から断りの電話が入っていた。

理由はなんとなく想像がついた。恐らくは彼女の経歴に、アジアーニからの圧力がかかっているのだろう。そう考えたマリアは、親友のリズや、かつてのボスのアントニオに助けを求めることを諦めた。もしも彼らを巻き込んでしまったなら、マリアは悔やんでも悔やみきれない。

それゆえに彼らとは五年間、一度も連絡を取っていない。故郷にも帰らず、大都市の片隅で息を潜めるようにして暮らしている。

そして、ジヨシユアを養子に迎えてくれた克蘭ベル夫妻にも、マリアからは一度として接触を図ったことは無かった。正確には克蘭ベル家のある土地に、近づく事すらもしていないのである。

これもまた、いつかアジアーニがジヨシユアを奪い取るうとする可能性を考えた末に、苦渋の決断を下したものだ。マリアには、ジヨシユアを守り抜く自信が無かった。たった一人、しかも定職に就く事すらも危うい女と、アジアーニという大企業では戦う前から結果は分かったも同然だ。ならば、マリアの元に居なければ良い。幸いというべきか、マリア・ウォートンの戸籍には結婚歴は存在しない。そして出産は海外で行われた。つまり、帰国した時点でジヨシユアの戸籍は宙に浮いた状態だったのだ。それをマリアは利用した。

ドメステイック・バイオレンスから女性を保護する団体を通じ、マリアは養子を求める夫婦を探した。そこで見つけた克蘭ベル夫妻の元に自分で訪れ、全ての手続きを済ませた。

だから戸籍上、ジヨシユアは克蘭ベル夫妻の実子として登録されているのである。

これでアジアーニがどれほど追い求めようとしたとしても、克蘭ベル家まで辿り着く可能性は限りなく低い。

マリアは、徹底した。ルカリオが何をするか分からないと、五年

前に思い知らされたのだ。だからこそ、ありとあらゆる可能性を彼女は想定した。

そんな彼女が、ルカリオが結婚したというニュースを見たのは、彼の国を放り出されて一年ほど経った頃のことだった。

ニュースでは、有名な教会で上げられた盛大な結婚式が報じられていた。司祭の前で白い礼服姿のルカリオと、美しいドレスを身にまとったサンドラ・イルケの結婚を、リポーターは興奮気味にマイクに向けて報じていた。

元公妃と、巨大財閥の総帥のロマンス。彼らはそう言って、サンドラの指や首を飾る宝飾品の価値やドレスのデザインについて論評した。

アンジェロの喪が明けてすぐに行われた結婚式は、アジャーニという企業グループの新たな発展を予感させるには十分であり、現在もアジャーニグループは揺るぎなく世界に君臨している。

だがそんなニュースを見ても、マリアの心は最早一片たりと動く事はなかった。痛みもしない。怒りも湧き上がらない。どこか遠い世界のニュースや、映画のようにマリアはそれを眺めたのだった。

「……………ハイ？」

携帯電話の振動に気付き、物思いから浮上したマリアはそれを耳に当てた。

「……………ええ。分かったわ。ヒルトンに20時ね？ ……ええ。金払いは良さそうね」

電話の向こうからは彼女の今夜の仕事場を伝える言葉が聞こえる。それに答え、マリアはメモ帳に素早く電話番号を書き記す。

マリアは高級官僚や上流階級を相手にする高級コールガールとなっていた。

まっとうな道では生きていく事すらできないと知り、ジヨシユアを手放した。そしてそれが、マリアの中にあつた最後の道徳観を打ち砕いたのだ。墮ちるところまで墮ちてしまえ。そう思ったのかも知れない。子供一人守ることができない自分に絶望したのかも知れない。

マリアは幸いにして、優れた知識と美しい外見を兼ね備えていた。この五年で築き上げた人脈は、かなりの物となっている。彼女が望めば、パトロンとなってくれる男も多いだろう。実際、コールガールを辞めて自分の愛人にならないか、とベッドで囁かれる事もある。だがマリアはそれに頷くつもりはなかった。

収入の多くを孤児や貧しい母子・父子家庭のための基金へ寄付しているのも、コールガールを始めた頃に住んだアパートに今も住むのも、マリア自身も意識しない贖罪のためなのか。

確かなことは、今夜も彼女は誰かのベッドを暖めるという事だけだ。

そんなマリアの家のドアがノックされる。そしてマリアは、自己と子供を捨てた男と再会することとなる。

#36(前書き)

#37と同時投稿です。

目の前に立っている男の存在が信じられず、マリアはまばたきを繰り返した。

それでも目の前の幻影は消え去る事はなく、ならばこれは現実なのだろうと了解した。

「……久しぶりだな、マリア」

憔悴しきった様子のルカリオに苛立ちすら覚える。彼は、何を考えて自分の前に顔を出せたというのか。だからこそ、マリアの声には険が混じった。

「五年ぶりね。なにか用かしら、ルカリオ・アジャーニ」

「話がある。……中に入れてくれないか」

頷かなければ、テコでも動かない。そんな様子が見て取れて、マリアはさっさと話しを終わらせようと決めた。

「どうぞ？ でも話は早めに済ませてちょうだい。私、もうすぐ仕事だから」

「……お邪魔する」

チエーンを外し、彼を室内に招き入れる。

のろのろと部屋に入ってくるルカリオに苛立ちながら、マリアは手早く化粧を終わらせようと鏡台の前に座った。ルカリオは何もないガランとした居間の中心で立ち尽くしているようだったが、気にしない事にする。

「それで？ 一体なんの用かしら」

「マリア。僕の 僕たちの子供はどうしているんだ」

「は？」

「教えてくれ、マリア。あの子は ジョシユアは、どこにいるんだ？」

「なにを言っているの、あなた」

マリアには理解できなかった。

ジョシユアの存在を気にする程度ならば、まだ理解もできよう。だがルカリオはなんと言った。

僕“たち”の子供。言うに事欠いて、彼はそう言ったのだ。

マリアの顔が強ばっているのに気付く様子もなく、ルカリオは弱々しい声を重ねる。

だが、そんなものはマリアの心を毛筋ほども揺らさない。

今、マリアの中にあるのは怒りと苛立ち。そのどちらもが、理解できないルカリオの言葉に向けられている。

「頼む、教えてくれ……。僕たちの子供は、どこにいるんだ？ここに居るのか？」

「話が分からないわ、ルカリオ・アジャーニ。僕“たち”の子供、って一体なんのこと？」

そう。ルカリオは一体なにを言っているのか。五年も前の事を、今、自分の目の前で口にする権利が、彼にあるはずもないのに。

「マリア。どうか、頼む」

「どこに居るも何も。ルカリオ。『僕たちの子供』なんて、この世のどこにも居ないわ」

縋るような顔で自分を見上げた男を一瞥し、マリアは肩をすくめてドアを指さした。

「分かったなら、早く帰ってくれない？ そろそろ時間なの」

「マリア……。どういう、ことだ？」

鏡越しに見たルカリオの顔色は真っ青になっていた。

五年前、傲慢にも自分を利用し、そしてあっさりと捨て去った男のそんな表情にも、マリアはまったくもって心が動かない事に嘆息する。

「だから、何がよ。どうせここに来たって事は、私のことは調べてあるんでしょう？ コールガールをやっているマリア・ウォートンの身上調査なんて、もう済んでいるんでしょ？ だったら分かるは

ずよ。ここにジヨシユア・ウォートンはいないわ。『私の子供』は、もう居ないの。この世のどこにもね」

そう。ジヨシユア・ウォートンは、もうこの世のどこにも存在しない。マリアの産んだ子供は、戸籍上存在しない子供なのだから。そして今は、遠い街で愛してくれる家族の下で暮らしている。今もきつと、あの可愛らしい少女と遊んでいる。

そう信じられるからこそ、マリアはここでルカリオの希望の全てを断ち切った。

「大体、五年も経ってから一体なんの冗談なのかしら」

「マリア……」

「ねえ、ミスター・アジャーニ。私はこの五年間、泥を嚙るようにして生きてきたわ。この街で一人で。ねえ、ミスター・パーフェクト？ あなたの結婚のニュースも見たわ。素晴らしい結婚式だったわね。あんな綺麗な教会で、誰からも祝福されて。あの子は何一つ与えられなかった。名前すら、アンジェロが与えてくれた物だわ。あなたからは何一つ貰わなかった。ああ、種くらは貰ったけれど、それすらもあなたは否定したの。だったら」

マリアの瞳の色が濃くなる。ようやく凍り付いていた心が、熱を持つ。

「あなたの子供なんて、この世のどこに存在したというの？ あなたはあの子を捨てた。いいえ、最初から受け取ろうとすらしていなかった。だからあの子は、もうこの世のどこにもいないの」

呆然としたルカリオが、その場に膝を突く。

そして突然、マリアに向けて土下座した。

「すまない。すまないマリア。僕は　僕は」

「今さら謝られても遅いわ。そして私には、あなたの謝罪も言い訳も聞く気は無いの。ねえ、そろそろ帰って下さない？ 私、もう仕事に行く時間なの」

「僕は子供ができない身体だと思っていたんだ！」

突然叫んだルカリオに、マリアは思わず言葉を飲み込んでしまった。

「サンドラが　彼女が言ったんだ。僕は若い頃に彼女と結婚したかった。どうしてもだ。だから彼女と避妊具を使わないセックスをして　けれど、子供はまったくできなかった。だから、医者にかかって」

さらに自分の言葉を聞くことなく、ただひたすらに懺悔するルカリオに、マリアは眉をしかめた。どうやら最後まで話さないと帰るつもりも無いらしい。そう思い、黙って聞き流す。

「そこでサンドラが僕に言ったんだ。僕の精子は女性を妊娠させる能力がない、と」

「彼女が診断書を偽造したってこと？」

「違う。僕は……それを見る事すらしなかった。サンドラが笑って僕の男性としての能力を嘲笑って去った後、それを封筒から出す事すらせずに焼き捨てた」

なんだそれは。

マリアは思わずそう思い、鏡越しにルカリオを見る。

「あなた、診断書は見えていないっていうの？ それなのに、自分の生殖能力の問題があると信じ込んだっていうの？」

「僕は認めたくなかったんだ……。これは男としてのプライドの問題だった！ この僕が！ ルカリオ・アジャーニが、男として損なわれているだなんて、認められなかったんだ！」

叫ぶルカリオに、マリアは嘆息する。

「けれど、真実は違ったのでしょうか？ あなたには女性を妊娠させる事ができた」

「……ああ。その通り、だ。サンドラが嘘をついていた。彼女は、当時の僕と結婚するつもりが無かったんだ。モデルとして旬の時期だった。彼女は社交界で男達にもっとチャホヤされたがっていた」
「ふうん。それで？」

「……君が妊娠したと言った時、僕は君が裏切ったのだと思った。君の裏切りが許せなかった。僕は君を愛していたから！」

「へえ」

マリアの冷やかな声と細めた目に気付くことなく、ルカリオは懺悔を続ける。

「僕は女性を妊娠させる事ができない。だが君は妊娠した。なら、それは別の男と君がセックスをしたという証拠以外の何者でもない……。僕は、そう考えたんだ」

だから、自分を夜の街に放り出したというのか。そして一顧だにせず、憎んだのか。自分のプライドとやらを守るために。彼の言う愛とやらは、その程度のものだったのか。

「アンジェロがひ孫を求めていた。彼は病気でもう長くはなかった。僕は尊敬する祖父のために、彼の望みを叶えたかった。だが僕の子供は望めない。僕はそう信じ込んでいた。だから」

「だから、私を利用した？ 一度は捨てた私を丸め込み、結婚したと思わせてマンションに放りこんで、子供が生まれるまでの間だけ、かりそめの結婚生活を送った？」

「……そう、だ」

「それで？ アンジェロが死んだから、お役ご免とばかりに私たちを捨てた訳？ お見事ね。素晴らしいわ！ それほどに、あなたは私を罰したかったのね。その辺の路地で野垂れ死にすればいいと思うほどに！」

「ち、違う！ 僕はそんなことは……！」

「それで？ 五年も経って、どうして今さら真実に気がついたの？ 狼狽えたルカリオを気にせず、マリアはただ話の先を促した。

「……アンジェロの遺品の整理をしていたんだ。そこで、病院から

の資料を見つけた」

「ふうん？」

「……ジョシユアとアンジェロのDNA鑑定の結果報告書だった」

「ああ。そういえば、そんなのもしたわね」

家を追い出された時から、マリアはもうそんな物の存在は頭から放り出していたのだ。アジャーニという全てが煩わしかった。例外はアンジェロと、彼の屋敷で働いていた使用人達だろう。生きていく事に必死で、それすらも記憶の奥底に沈み込んでいたが。

「二人は、とても近い血縁者であると報告されていた。僕は……それを読んで……病院で検査を受けたんだ」

その結果は、マリアには簡単に予想ができた。

「検査の結果……僕の生殖能力に問題はない、とされた。サンドラをすぐに問い詰めた。だが彼女は笑っていた。あの頃の他愛ないジョークだった、と。まさかまだ信じていたなんて、と」

「……そう」

彼女が真実、そう思っているなどとは、二人とも考えていなかった。

だがその嘘のせいでマリアの人生は大きく狂わされた。それだけは間違いない。

「それで？」

「え……？」

呆然とルカリオが顔を上げる。それを見ながら、マリアは首を傾げてみせた。

「それで？ あなたの懺悔は聞いたわ。じゃあ、お話は終わりですよっ？」

「ま……マリア？」

「まだ何か、言うことがあるのかしら」

跪いたままのルカリオを見下ろし、マリアは微笑んでみせる。

彼の懺悔も、言い訳も。その全てに興味は無かった。ああ、確かに胸にわだかまっていた気持ち悪さは消えただろう。なぜルカリオ

が、ああも頑迷に自分の言葉を信じなかったのか。その理由は分かった。だが、それだけだ。

それが分かったからといって、マリアの人生が突然変わる訳ではない。ジョシユアはいないし、自分は今晚、客のベッドで汗だくになる。そんな日常に変わりはない。

「僕は……君に……君に酷いことをしたと思い知らされたんだ」

「そうね」

淡々と首肯して見せれば、ルカリオの顔が強ばるのが見て取れる。「だからね、ルカリオ・アジャーニ。それで何が言いたいのかと聞いているのよ、私は」

「謝って……ジョシユアを、息子と君を……その……家に迎えたい、と……そう思つて……。もちろん君が許してくれるならだが、一緒に暮らしたいと……」

その言葉に、マリアは思わず笑つてしまった。

ククツと喉が鳴り、我慢できずに肩を揺らす。

許してくれるなら一緒に暮らしたい。これまでの償いがしたい。

ルカリオの言葉があまりに愉快で、マリアは身体を震わせ続ける。「フ、フフツ。ねえ、ルカリオ。本気でそんなことを言っているの？」

「ぼ、僕は本気だ！ 君にひどい事をしたとは思つてる。だが、僕だつてサンドラに騙されていたんだ！ マリア、君なら分かつてくれるだろう！？」

「私なら？ ねえ、なぜ私なら理解してくれると思うの？ あなたは、私の言葉を何一つ信じなかった。何一つ私を守ることなく、あなたは私を捨てたの。ねえ、ルカリオ・アジャーニ。どうしてそんな私が、あなたを信じてあげられると思つて？」

マリアの声は冷え切っていた。

心も冷え切っていた。そもそも心が動くはずもない。マリアの心は、ジョシユアの小さな手を自ら放した瞬間から凍えきり、壊れていたのだから。

夜毎、男達とセックスをして金を得る。そんな生活を送れたのも、きつとそのおかげだ。

心という物が、すでにその本来の姿を失っているのだから、心が痛む事もない。

「帰りなさい、ルカリオ・アジャーニ。そして二度と私の前にそのツラを見せないで。ねえ、私があなを殺さないでいられるとどうして信じていられるの？ そのツラに鉛玉をぶち込まないでいられるのは、私が冷静であろうと思っっているからなのよ？」

仕事柄、銃を持つ事には慣れていて。高級官僚相手が主とはいえ、いや、むしろそのせいか妙な性癖の持ち主は多いのだ。身体に傷をつけられでもしたら、困るのはマリアと仲介業者である。

自衛のためにハンドバッグにデリンジャーが入っているし、今も引き出しの中にも銃が入っている。

「さよなら、ルカリオ。後悔を抱きながら生きていくのね」

「マリア……」

おずおずと立ち上がったルカリオが、ふらふらと後ずさって部屋を出て行くのを見送り、マリアは笑った。

嗤う以外になにができただろう。ルカリオのせいで泣くのは止めた。ならば、あとは笑う以外にないだろう。怒りも絶望も、すでに通り過ぎた感情に過ぎないのだから。

その半年後、ルカリオ・アジャーニが離婚を申し立て、その妻サンドラとの調停が泥仕合と化したとゴシップニュースが嬉々として報じたのを、マリアは小耳に挟んだ。

サンドラは妊娠中であり、これはルカリオの子供であると主張したという。ルカリオは当初はそれを否定したが、後にそれを受け入れた。

裁判は数年に渡って続き、最終的には彼の財産の半分を慰謝料としてサンドラへ譲り、さらにはサンドラが産んだ子供の親権がルカ

リオへ渡されて決着がついた。
けれどマリアはそれを何とも思つ事もなく、
淡々とやり過ごしたのだった。

ルカリオ・アジャーニの晩年は、ひどく寂しいものとなった。金銭的にはアジャーニの総帥として満たされていたが、家族運には見放されていたとされる。

離婚調停で揉めた末に財産の半分を分けた元妻は、その後も社交界で浮き名を流し続けた。

離婚調停中に彼女が産みルカリオに押しつけた『息子』は、薬物や犯罪に何度となく手を出して官憲の世話になり続け、スキヤンダルを垂れ流し続けた。

アジャーニの総帥の座も親族に引き継がれた。ルカリオの息子は、不適格と全員から見なされていたのである。

彼の死は、アジャーニの元総帥として悼まれた。だが彼を個人的に悼む者は、ほとんど居なかつたとされる。多くは彼の金を目当てに集まつた『親類』であり、彼の死を心待ちにする者達ばかりであった。

#37 e p i l o g u e (前書き)

#36と同時投稿です

37 e p i l o g u e

/ 37 e p i l o g u e

その教会を彼が訪れたのは偶然だった。

子供がそれなりに大きくなり、愛妻と二人きりでの旅行をしよう
と決めたのは、結婚記念日のことだ。年甲斐もなく楽しみにした旅
行で、二人が選んだのは鄙びた田舎町だった。

大都会で暮らす彼らにとっては、クラクションやけたたましい音
樂がスピーカーから流れてこない環境こそが望ましいものだったか
らである。

街に一軒しかないホテルにチェックインした後、彼らは街の散策
に出た。

二人きりで歩くなど、何年ぶりだろうか。そう笑いあいながら、
二人はかつてのように手を握りあって歩く。

そこで見つけた教会では、なにやらパーティーが開かれているよ
うだった。

「おや、ご旅行ですか？」

門に立っていたシスターがにこやかに笑いながら、二人に話しか
けてくる。田舎町の常か、見慣れない人間にも人なつっこく笑いか
けてくれるのを心地よく思いながら、男は頷いた。

そして、一体なんのパーティーなのかと尋ねる。多くの人が思い
思いに笑い、飲み食いをしている姿は、とても楽しそうだった。

「ああ、これはマザーのお葬式なのです」

「……マザー？ お葬式？」

「ええ。マザーは教会に併設された孤児院の院長を、長いことなさ
つてた方なのです。とてもお優しい方で、多くの子供たちが巣立っ
ていきました。私も……その一人なんです」

誇らしげにマザーの事を語るシスターに、妻が怪訝そうに尋ねる。

なぜ、お葬式なのにパーティーをしているのか、と。

「マザーの遺言なのです。自分が死んだら、皆で明るく送って欲しい、と。湿っぽいのは嫌いだから、好きに騒いで賑やかに神の御許へ送って欲しいのだ、と」

その言葉に、なるほど、と頷いた。

幸いにして自分と妻の両親は、双方とも壮健だ。だが、どちらも同じように、賑やかに送ってほしがるのではないか、などと思う。

「よろしければ、あなた方もどうぞ。マザーを送ってあげてください」

そう誘われ、妻と顔を見合わせる。彼女が頷いたのを見て、シスターに先導されるままに教会の中へと足を踏み入れた。

祭壇の前に、一人の老女が棺の中に収められていた。

多くの花が手向けられた老女は、皆から愛されていたのだろうが、穏やかな死に顔を見れば、彼女がきつと自分の生に満足して逝ったのだと理解できた。

「よろしければ、花を」

そう言われ差し出された花を老女に手向ける。

「……お名前はなんと?」

「マリアと仰っていました。ただ、マリア、と。もしかしたら偽名だったのかも知れません。彼女は自分の昔のことを、あまり話してはくれませんでしたから」

シスターの寂しげな声に、なんとなく頷いた。

「ですが、マザーの子供達は沢山います。今日も、これからまだ帰ってくると言っていました。皆で、私たちのお母さんを送ってあげるんです」

「それは、きつと嬉しいでしょうね」

それほどの子供達に慕われた女性ならば、きつと。それはとても

とても、素晴らしいことなんではないかと、男は思う。

「……あの、失礼ですがお二人のお名前は？」

男はシスターの問いに、微笑んで答えた。

「ジョシユアです。ジョシユア・克蘭ベル。こちらは妻のアメリカ」

「よろしく。アメリカです」

妻が如才なくシスターと握手をする。

「子供も大きくなったので、二人で骨休めの旅にきたんです」

「そうですか。都会みたいになんでもあるわけじゃありませんけれど、いい街ですよ。ここは」

シスターの誇らしい響きを持った声に頷きながら、ジョシユアは再び棺の中の老女へと視線を向け、祈る。

多くの人に慕われた彼女が、どうか心安らかに神のもとへ行けるように、と。

その日、マリア・ウォートンは多くの子供達に送られ、神の御許へ召されたのだった。

End

#37 epilogue (後書き)

/ Postscript

#36、#37は同時更新しました。

皆様、最後まで拙作におつきあい下さい、ありがとうございます。
k . t a k aと申します。

最後がちょっと(かなり)駆け足となりましたが、『おろかなひと』
はこれで閉幕となります。

お気に入り登録して下さった方や、感想を書き込んで下さった方々、本当にありがとうございます。おかげでラストまで完走する事ができました。

本作は、ハーレクインによくある「ヒーローがヒロインを誤解して酷い目に遭わせ、その後真相を知って愛を誓い、女は男を許してハッピーエンド」という筋に対するアンチテーゼとなっております。私にはあのヒロイン達がどうしても理解できなかったのです。愛は大切ですが、それでもヒーローの行動を許容できるヒロインはどれだけMなのか、と。私にはDVする彼氏が時折見せる優しさのせいで離れられなくなった女のようにしか見えなかったのです。読むの間、何度心の中でヒーローを殴ったことが。

そんな訳で、本作はハーレクイン的なハッピーエンドではありませんせんよ、という意味でバッドエンドタグを付けておりました。

さて、次回作はとりあえずちょっとだけ書き出していますが、今回はハッピーエンドとなる予定です。

よろしければ、次回作にもおつきあい下さい。

それでは、最後までおつきあいいただき、ありがとうございました。

2011年4月25日 k・taka 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7445q/>

おろかなひと

2011年4月25日21時54分発行